早稲田大学文研考古誌 潮航

第 40 号
2022年2月

［巻頭言］

調査と研究 田畑幸嗣

［論　　文］

エジプト新王国時代におけるミイラ製作関連遺物群の研究 進藤瑞生

関東・東北古代寺院の伽藍配置とその展開
―「金堂前面の儀礼空間」の分析から― 高橋　亘

［文研考古談話会 2021 年度活動報告］

［2021 年度新人発表会要旨］

早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

溯　航

早稲田大学文研考古誌

第 40 号

巻　頭　言

調査と研究 ..... 田畑幸嗣（1）

論　　文

エジプト新王国時代におけるミイラ製作関連遺物群の研究..... 進藤瑞生（3）

関東・東北古代寺院の伽藍配置とその展開

―「金堂前面の儀礼空間」の分析から―..... 高橋　亘（29）

文研考古談話会2021年度活動報告 ..... (47)

2021年度新人発表会要旨..... (48)

溯航　第40号　1頁　2022年2月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

調査と研究

田畑幸嗣

文学研究科の考古談話会のメンバー、つまりは大学院生主体で発行している同人誌ですから、読者も大学院生が多いのでしょう。そのつもりで書きます。

本号は論文２本が掲載されていますが、当初はそのほかに研究ノート１本、調査報告１本、そしてエッセイも１本予定されていました。ざっとタイトルだけ編集に教えてもらいましたが、学位論文に直結しそうなものから、どこが考古学の研究なのか理解に苦しむものまで様々でした。しかし、それはそれでよろしい。大学院在籍中に様々な文章を書いておくことは、必ず皆さんの将来の糧となります。

同じことは、調査にもいえます。様々な時代・地域の調査に参加することは、調査技術向上の為のまたとないチャンスですし、また研究の引き出しを広げることにも繋がります。是非積極的に参加してもらいたいと思っています。

でも、談話会の先輩のなかには、在籍中にとても熱心に、たくさんの調査に参加したけれども、学部生のレポート以下の学位論文初稿しか書けず、提出を見送ったり、結局書き上げることが出来ずに大学院をドロップアウトしたりした人たちが少なからずいました。あれだけ調査に熱意をかたむけて、なぜそのようなことになってしまうのでしょうか。

調査に参加することで身につく能力は様々ですが、思いつくままに書き出してみると、測量、掘削、図化、写真、安全管理、書類作成、スケジュール作成・管理、資金管理、マネージメントなどになると思います。これらの能力は机にひとりで齧りついていても身につきません。教員や先輩、同期、後輩達と現場で苦労をして、時には失敗をして、時間をかけなければ自分のものにはできないのです。

ですから、こうした能力を身につけた大学院生は、「仕事の出来る」院生と高く評価されることになります。しかし、そうした院生がそれだけで「研究の出来る」院生と評価されることは絶対にありません。なぜなら、研究ができることを証明するには、学位論文を仕上げ、審査にパスしなければいけませんが、上に挙げた能力は、学位論文の執筆に必要なこと、つまり個々の研究には直結しないからです。

論文とは、論証のための文章です。オリジナルな問いがあって、論拠があって、答えがあり、それが論理的・客観的に妥当なものであると認められなければなりません。そのためには、たてた問いが、これまでの研究（問いと答え）に照らし合わせて意義のあることなのか判断する必要がありますし、問いを解くためのやり方（資料と調査分析方法）が適切なものなのかどうかを判断し、さらに分析を実行して、問いから答えまで、論理的に破綻のない一貫した文章に仕上げなければいけません。こうしたことは、机に齧りついたうえで、発表・ディスカッションをしない限り身につきません。バランスが必要です。

では、一年を通じて、調査参加と自分の勉強の時間を等分に振り分ければ、バランスよく両方の能力が身について、仕事が出来て研究の出来る人間になれるのでしょうか。これも絶対に違います。時間の問題ではありません。

研究、特に論文執筆に必要な能力を身につけるための行為は、すべて、知的なプレッシャーを必要とします。他人の言葉を理解し、反証し、自分の言葉を探し、それが適切なものなのかどうか、他者から批判を仰ぐという行為は、自分で自分を知的に追い込まないと出来ません。誰かの調査に参加し（あるいは自分の研究に直結しない調査を企画し）役割分担を決めて皆で仕事をすれば、苦しいことがあっても、知的な格闘を自分に仕掛けなくてもすみます。知的な格闘を経ないのなら、どれだけ調査に参加しても、自分自身の研究の進捗は、ゼロです。ですが、調査に参加した達成感はありますし、「研究をした」気分になれます。でも、それは百パーセント気のせいです。

談話会の先輩で、調査に熱心だけれども論文がいまいちだった院生は、大抵このパターンでした。逆に言えば、調査に出っぱなしでも、きちんと自分を知的に追い込めた院生は、素晴らしい学位論文を仕上げています。調査技術を身につけるだけでなく、知的な格闘を経て、皆さんの経験を研究へ昇華させて欲しいと願っています。

論文

溯航　第 40 号　3–28 頁　2022 年 2 月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

エジプト新王国時代におけるミイラ製作関連遺物群の研究

進藤瑞生

要旨

ミイラ製作は死後の再生・復活と永久的な生活に必要であり、ミイラ製作に用いられた道具や材料の扱いはミイラや死体への観念を強く反映している。本稿はエジプト新王国時代のテーベ西岸において出土したミイラ製作に関連する遺物群を扱ったものである。そうしたミイラ製作関連遺物群の性質理解の一端として、ミイラ製作関連遺物群の出土状況と組成の要因を再検討することを目的に、ミイラ製作関連遺物群および出土状況が良好な墓を対象に遺物組成と出土状況を分析した。その結果、出土状況の要因については、当該期のミイラ製作関連遺物群が再生・復活に必要不可欠ではないという根本的な性質に端を発し、副葬品としての志向の有無、儀礼上の要因など複雑化した様相を提示した。また、組成の要因においても、必要不可欠ではない性質が再利用など従来指摘されてきた要因に先立ものとして指摘した。

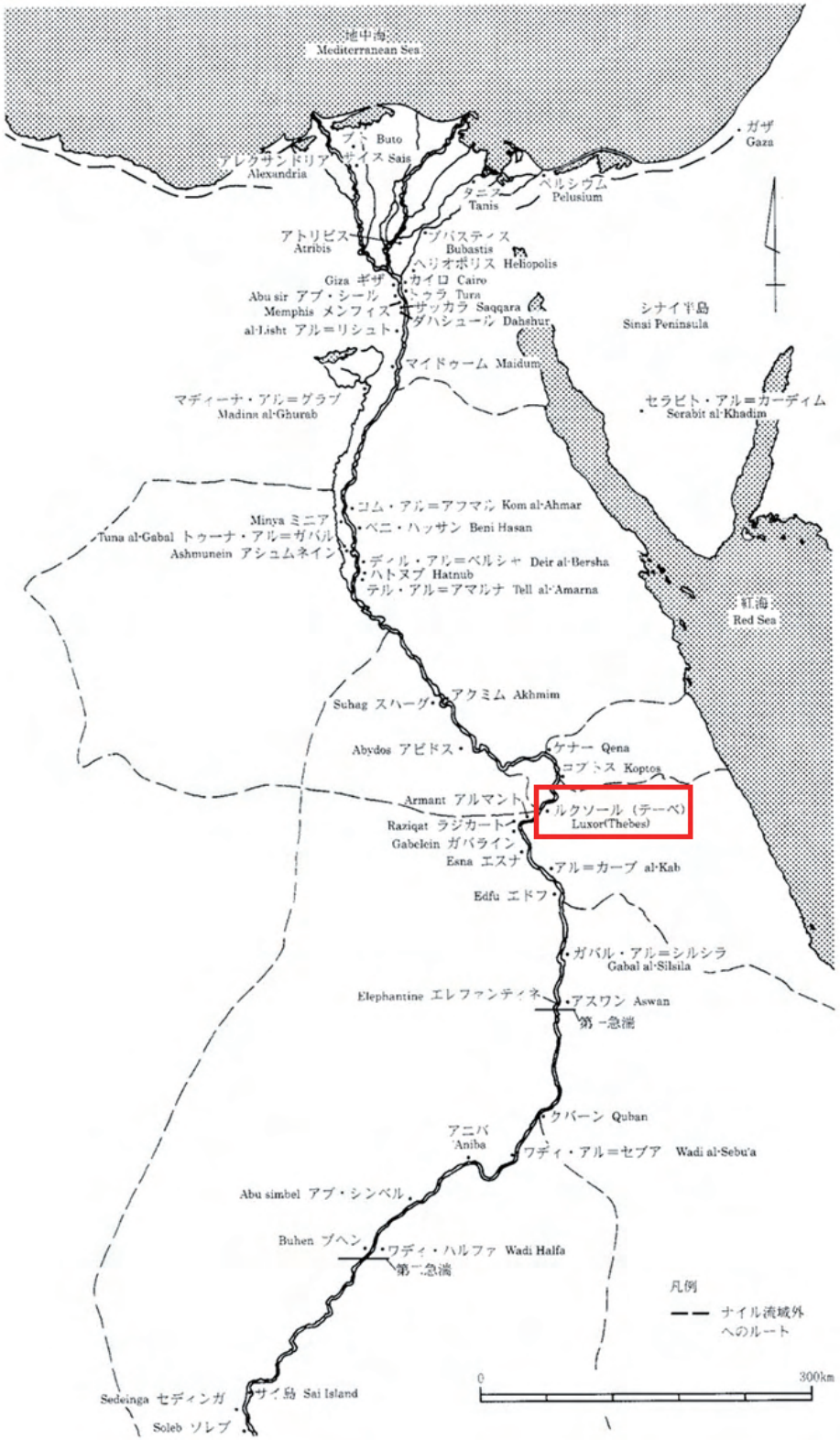
キーワード：新王国時代、テーベ西岸、ミイラ製作関連遺物、組成、出土状況

はじめに

ミイラとは人工的に防腐処理された人間や動物の死体(1)である(Ikram 2015: 47)。古代エジプトの人々は、死者の精神的要素が、腐敗していない死体を通して再生し(Ikram 2010b: 1)、死者はエジプトを向上させた場所で永久的な生活を送ると信じていた(Ikram 2015: 23)。したがって、死体の損壊は魂やアイデンティティの永続に脅威を与えるものであり(Ikram 2010b: 1)、ミイラ製作は死体の防腐、保存への要望であった(Ikram and Dodson 1998: 15; Ikram 2015: 23)。つまり、ミイラ製作は死後の生活を送るために必要な作業であり(Saleem and Hawass 2013: 336)、ミイラは古代エジプトの宗教観や死生観の発現である。そのため、ミイラは、死体や死そのものへの当時の認識、それに携わった集団など古代エジプト社会における死に関する多大な情報をもたらす。

ミイラに関する研究はわずかな文字史料に加え、図像資料、ミイラ自体の分析や考古資料、ミイラ製作の実験的試行などから行われてきた(Ikram 2015: 52)。特に新王国時代はファラオのミイラを含め、数多くのミイラが研究対象となっており(Smith 1912; Leek 1977; Saleem and Hawass 2013)、ミイラ製作の道具や材料一式のうちで実際に出土するミイラ製作関連遺物群(2)も末期王朝時代と共に集中する(Céline 2007: 8)。しかし、ミイラに関する研究の手法はミイラ自体を対象とした科学分析等によるものが多く、研究目的もミイラ製作やミイラ個人の情報を得ることが中心であった。ミイラ製作関連遺物群は墓内で被葬者に伴ったり、墓外で出土したりと様々な出土状況を有する(Budka 2006; Aston and Aston 2010)。こうしたミイラ製作関連遺物群やその出土状況はミイラ製作技術だけでなく、ミイラ製作と埋葬に関わる宗教的実践やミイラ化された遺体への観念など極めて重要な情報をもたらす(Ikram and Grande 2011: 205, 218)。ミイラ製作関連遺物群の研究はこうした領域において多大に貢献し、ミイラ自体や図像資料を対象とした研究とは一線を画す。そのようなミイラ製作関連遺物群はその出土状況や組成の要因が様々指摘されてきたが(Winlock 1973; Céline 2007; Janot 2008)、未だ議論が必要な現状である。

そこで本稿では、ミイラへの宗教観念に関わるミイラ製作関連遺物群の性質を理解する一端として、新王国時代テーベ西岸におけるミイラ製作関連遺物群の組成と出土状況の要因について再検討することを目的とする。そのために、墓外で出土したミイラ製作関連遺物群やミイラ製作関連遺物群が出土した墓、そして従来注目をされなかったミイラ製作関連遺物群が出土しなかった墓を対象に組成と出土状況を分析する。具体的には、分析に先立ってミイラ製作道具と材料の一式を大まかに復元したうえで、どんなミイラ製作関連遺物群が出土しているのかを分析する。加えて、ミイラ製作関連遺物群の様々な出土状況に影響を及ぼし得る、副葬品の組成やそれを納める場所の規模、規模に対する墓内副葬品の収容率等を分析し、ミイラ製作関連遺物群の出土する墓としない墓での傾向を探る。こうしたミイラ製作関連遺物群の出土状況と組成の要因を検討することで、当該期のミイラ製


地中海
Mediterranean Sea
ガザ
Gaza
ブト Buto
アレクサンドリア Alexandria
サイス Sais
タニス
Tanis
ペルシウム
Pelusium
アトリビス
Atribis
ブバスティス
Bubastis
ヘリオポリス Heliopolis
Giza ギザ
カイロ Cairo
Abu sir アブ・シール
トゥラ Tura
Memphis メンフィス
サッカラ Saqqara
ダハシュール Dahshur
al-Lisht アル＝リシュト
シナイ半島
Sinai Peninsula
マイドゥーム Maidum
マディーナ・アル＝グラブ
Madina al-Ghurab
セラビト・アル＝カーディム
Serabit al-Khadim
コム・アル＝アフマル Kom al-Ahmar
Minya ミニア
ベニ・ハッサン Beni Hasan
Tuna al-Gabal トゥーナ・アル＝ガバル
Ashmunein アシュムネイン
デル・アル＝ベルシャ Deir al-Bersha
ハトヌブ Hatnub
テル・アル＝アマルナ Tell al-Amarna
紅海
Red Sea
Suhag スハーグ
アクミム Akhmim
Abydos アビドス
ケナー Qena
コプトス Koptos
Armant アルマント
ルクソール（テーベ）
Luxor(Thebes)
Raziqat ラジカート
Gabelein ガバライン
Esna エスナ
アル＝カーブ al-Kab
Edfu エドフ
ガバル・アル＝シルシラ
Gabal al-Silsila
Elephantine エレファンティネ
アスワン Aswan
第一急湍
クバーン Quban
アニバ
'Aniba
ワディ・アル＝セブア Wadi al-Sebu'a
Abu simbel アブ・シンベル
Buhen ブヘン
ワディ・ハルファ Wadi Halfa
第二急湍
凡例
ナイル流域外
へのルート
0
300km
Sedeinga セディンガ
サイ島 Sai Island
Soleb ソレブ

第１図　エジプト全図

第１表　古代エジプト年表

初期王朝時代	**前3000~2686**
古王国時代	**前2686~2182**
第1中間期	**前2181~2055**
中王国時代	**前2055~1650**
第2中間期	**前1650~1550**
新王国時代	**前1550~1069**
18王朝	**前1550~1295**
イアフメス	前1550~1525
アメンヘテプ1世	前1525~1504
トトメス1世	前1504~1492
トトメス2世	前1492~1479
トトメス3世	前1479~1425
ハトシェプスト	前1473~1458
アメンヘテプ2世	前1427~1400
トトメス4世	前1400~1390
アメンヘテプ3世	前1390~1352
アメンヘテプ4世/アクエンアテン	前1352~1336
スメンクカーラー	前1339
ネフェルネフェルウアテン	前1338~1336
トゥトアンクアメン	前1336~1327
アイ	前1327~1323
ホルエムヘブ	前1323~1295
19王朝	**前1295~1186**
ラメセス1世	前1295~1294
セティ1世	前1294~1279
ラメセス2世	前1279~1213
メルエンプタハ	前1213~1203
アメンメセス	前1203~1200
セティ2世	前1200~1194
シプタハ	前1200~1188
タウセレト	前1188~1186
20王朝	**前1186~1069**
セトナクト	前1186~1184
ラメセス3世	前1184~1153
ラメセス4世	前1153~1147
ラメセス5世	前1147~1143
ラメセス6世	前1143~1136
ラメセス7世	前1136~1129
ラメセス8世	前1129~1126
ラメセス9世	前1126~1108
ラメセス10世	前1108~1099
ラメセス11世	前1099~1069
第3中間期	**前1069~664**
末期王朝	**前664~332**

作関連遺物群の性質解明やミイラへの宗教観念理解の基礎付けとなる。

１．先行研究と本稿の目的

本稿で述べるミイラ研究とは、ミイラを必要とした古代エジプトの来世観、死生観に深く言及した研究ではなく、あくまでもミイラを主としたミイラに関わる研究に限定する。まず始めに、新王国時代におけるミイラ製作関連遺物群の研究以外について、それらの研究手法および目的を概観する。次にミイラ製作関連遺物群研究のミイラ研究における位置づけを確認する。最後にミイラ製作関連遺物群の先行研究を詳述し、見出される課題を踏まえて、本稿の目的を提示する。

１－１．ミイラ研究の射程

先述の通り、ミイラ研究はミイラ自体、図像資料、考古資料、文字史料、製作実験などが行われてきた。これらのうち新王国時代のミイラ研究はミイラ自体、図像資料、考古資料を対象としたものが主である。以下、順に研究対象ごとに研究手法や目的を述べる。

はじめに、ミイラ自体の研究は数多く行われてきた。王族のミイラへの注目度の高さが指摘されているように(Habicht, Bouwman and Rühli 2016: 216)、王族のミイラの先行研究だけでも、研究傾向を知るには十分である。まず、20世紀初頭にG. E.スミス(Smith, G. E.)が頭蓋骨へ詰める物質の多様性の指摘や、個々のミイラの身長や各部位の計測など王族のミイラへの多大なる情報を提示した(Smith, G. E. 1906, 1912)。また、その後に発見されたトゥトアンクアメンや彼の娘たちのミイラも他の研究者によって年齢推定されている(Leek 1972, 1977)。トゥトアンクアメンは複合的な科学分析によって親族関係や病状、死因等が指摘された(Hawass et al. 2010)。ラメセス3世もDNA鑑定によって他のミイラとの親族関係が明らかになっている(Hawass et al. 2012)。さらにCT画像によって新王国時代の王族のミイラにおける脳の処置を分析した研究もある(Saleem and Hawass 2013)。

王族以外のミイラにおいても、CTスキャンやX線による体内の状態観察、ミイラから検出されたナトロン(炭酸ナトリウム／重炭酸ナトリウム、塩化ナトリウム、硫酸ナトリウム(Bianucci, R. 2015: 16))の科学分析が行われている(Bianucci, R. 2015)。さらに、使用された材料の分析(3)ではビチュメンの時代ごとの使用割合を調べた研究などが挙げられる(Clark, Ikram and Evershed 2016)。

以上のようにミイラ自体の研究は解剖学や分子生物学など自然科学的研究が大多数を占め、科学技術を用いた分析手法も多くみられる。こうしたミイラ自体の研究目的は病状や親族関係といったミイラの個人的情報や、製作方法や使用材料といったミイラ製作論が中心であると言える。

次に図像資料の研究について述べる。新王国時代の図像資料はテーベ西岸では2例のみであり(Brier and Wade 2005: 159)、資料としてほとんど無い。その理由として、ミイラ製作の包帯巻きや油塗り(anointing)の図像表現は慣例として避けられていることや(Hays 2010:5)、ミイラ製作の秘匿性が挙げられている(Brier and Wade 2005: 159)。資料は少ないながらも、ドーソン(Dawson)は新王国時代のミイラ製作に関して図像資料から道具への言及を行った(Dawson 1927)。さらに、図像資料に見られる道具の同定も行われている(Brier and Wade 2005)。新王国時代における図像資料は情報量が不足しており、ミイラ製作の道具や手順という文脈で語られてきたことがわかる。

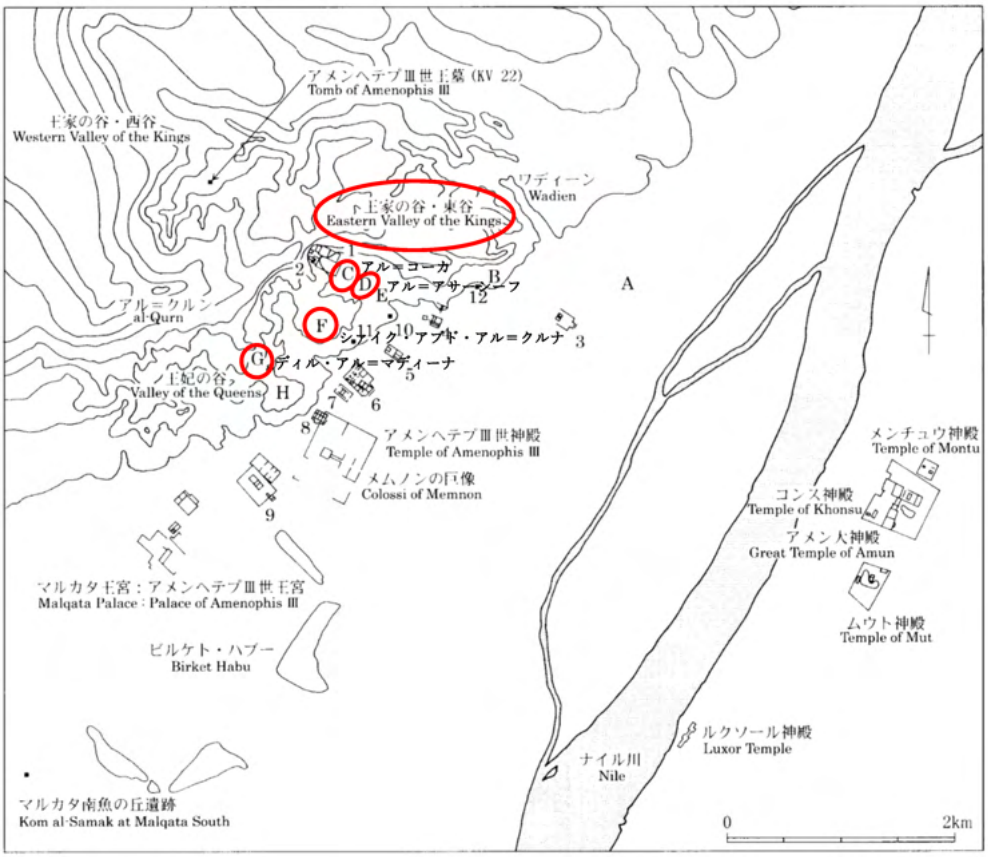
ここまで、考古資料以外のミイラ研究を概観してきた。それらの研究の中心は、製作やミイラ個人の情報を得ることを主な目的とした、ミイラ自体の科学分析研究と言えるだろう。図像資料による研究は資料の制約もあり、道具や材料といったミイラ製作論として位置付けられるに留まる。そのため、死体、ミイラという存在への当時の観念はミイラ製作の基礎であり、本質的な研究と言えるにもかかわらず、これら2つの研究では、ほとんど行われていないことがわかる。

最後に考古資料について述べる。新王国時代のミイラ製作遺構は筆者の知る限り検出されていない。そのため、考古資料とはすなわち、ミイラ製作関連遺物群に限定される。ミイラ製作関連遺物群は図像資料同様、ミイラ製作道具や材料の貴重な情報をもたらす。それだけではなく、出土状況と合わせ、ミイラ製作と埋葬に関する宗教的実践やミイラ化された遺体への観念などの情報をもたらす(Ikram and Grande 2011: 205, 218)。ミイラ製作関連遺物はその使用、廃棄もしくは保存等の過程に宗教観念が反映され、実践されたものと言えるため、ミイラ製作論に加え、ミイラへの宗教観念や死体への認識理解の一端を担う。全時代を通してミイラ製作法の全体像を記録した文字史料は無く(Ikram 2010b: 3)、文字史料等で明確に語られていない場合、それだけでは当然宗教観念の全体像を復元することは困難である。これらはミイラ自体や図像資料では明らかにできない領域であり、先述の2つの研究とは一線を画しミイラ製作関連遺物群による貢献は大きいと言える。

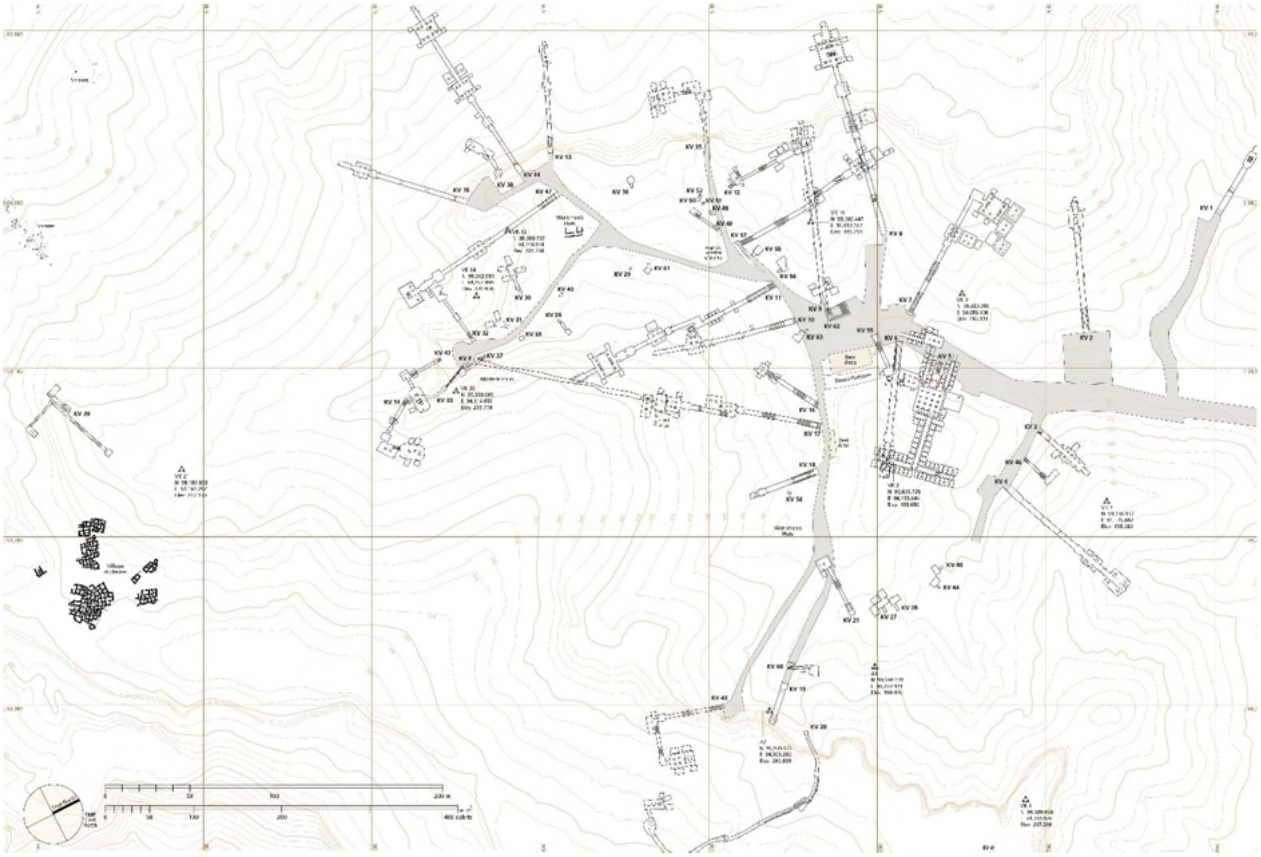
１－２．ミイラ製作関連遺物群研究

ミイラ製作関連遺物群はミイラ製作の道具や材料の直接的な証拠であり、20世紀前半には既に報告されている(Davis 1907; Bruyére 1934, 1937; Lansing and Hayes 1968)。20世紀の代表的な研究としてウィンロック(Winlock, H. E.)によるものが挙げられる。ウィンロックは中王国時代の墓の発掘によってミイラ製作関連遺物を発見した(Winlock 1968a, 1922)。さらに墓(KV62)とは異なる場所(KV54)で見つかったトゥトアンクアメンのミイラ製作関連遺物群を詳細に報告した(Winlock 1973)。これらを通してウィンロックはミイラ製作関連遺物群が死体の一部に触れているため、死者の再生・復活の際に必要であること、これらは汚穢とされたために墓内には置かれなかったことを指摘した(Winlock 1968a: 34; 1973: 7)。ウィンロックは従来の単なる報告に留まらず、ミイラ製作関連遺物群に対して製作道具という側面に加え、汚穢や再生・復活への必要性という意味付けを与えた。そのためウィンロックの研究はミイラ製作関連遺物群研究の初期にして重要なものと言える。S. T. スミス(Smith, S. T.)は17、18王朝テーベ地域の未盗墓、もしくは出土状況が良好な墓36例を集成、分析した(Smith, S. T. 1992)。それによって壺形土器が大半の墓で出土し、その中身は多くがビールや肉であるにもかかわらず、王家の谷に限定してミイラ製作関連遺物群が入っていたことを明らかにした。さらにアレン(Allen, S. J.)は、ウィンロックが墓内に置かれるミイラ製作関連遺物の例を無視していると指摘し、KV54出土のミイラ製作関連遺物群が元々KV62に副葬されていたという説(Reeves 1990a: 67, 69)を支持した(Allen 2000)。特にアレンは小規模ながら大量の副葬品というトゥトアンクアメン墓の特性に触れ、ミイラ製作関連遺物群が通路にしか置けなかった事情を述べた(Allen 200: 24)。ミイラ製作関連遺物群の置かれた位置と墓の規模、他の副葬品との関係性に関するアレンの指摘は出土状況を説明する非常に示唆に富んだものと言える。しかし、これはあくまでもトゥトアンクアメン墓のみへの指摘に留まっていた。20世紀代はこのように、わずかにミイラ製作関連遺物群の性質や出土状況に言及したものもあった。しかし、ほとんどが発掘報告書等における報告に留まっていた。

21世紀に入り、シャーデン(Schaden, O. J.)は王家の谷の一遺構(KV63)でミイラ製作関連遺物群を大量に発見した(Forbes 2006; Schaden 2007, 2009)。KV63の発見によってミイラ製作関連遺物群やその出土状況への注目度の高まりが指摘され(Eaton-Krauss 2008: 288; Gabolde 2016: 123)、蓄積した資料を基にミイラ製作関



第２図　テーベ地図



第３図　王家の谷東谷

連遺物群研究は本格化した。ミイラ製作関連遺物群の集成(Céline 2007;　Ikram and Grande 2011)も進展し、特にセリーヌが全時代のミイラ製作関連遺物群を対象とした出土状況や遺物組成を網羅した詳細な集成を行ったことで、資料の網羅的分析が可能な状況となった。セリーヌは全時代を通して製作中に高頻度もしくは長時間死体に触れていたナトロンや包帯、土器が主要組成であること、ミイラ製作関連遺物群の汚穢の判断はできず、棺から出土する例もあることから死体の一部として敬意が払われていたという主張を行った(Celine 2007: 139, 140)。ウィンロック同様に出土状況と汚穢を根拠なく関連づけている点や、棺以外に入れられる例を無視している点に多少の論理の飛躍が見られるものの、セリーヌの集成研究は現状で最も完成度が高く、今後のミイラ製作関連遺物群研究の基礎を築いた点で評価できる。またミイラ製作関連遺物群の組成要因として接触性をより具体化したと言える。さらに、死者の血液や体液とオシリス神の関連性が指摘され(Janot 2008: 211)、こうした体液や血液はカノポス壺に入った内臓同様に再生・復活に必要であるという主張がなされた(Chapman 2016: 200)。末期王朝期の研究ではミイラ製作関連遺物群と共に髪や皮膚片が出土することも指摘されている(Budka 2006: 85, 99)。つまり、長時間や高頻度といった要素は死者の体液や血液、臓器、髪や皮膚といった死体の一部を欠損させる複合的な要因と言える。したがって、ミイラ製作関連遺物群の直接的な組成要因は欠損もしくは失われた死体の一部に接触する度合いに収斂される。

１－３．先行研究の課題と本稿の目的

ここまでミイラ研究を概観し、そこからミイラ製作関連遺物群の先行研究を詳述してきた。ここではミイラ製作関連遺物の先行研究をまとめ、その課題を見出したうえで、本稿の目的を提示したい。

ミイラ製作関連遺物群研究は20世紀における単なる資料の報告から始まり、ウィンロックによる汚穢と接触性の指摘によって、ミイラ製作関連遺物群の性質が言及された。さらにアレンがトゥトアンクアメン墓の規模や副葬品の収容とミイラ製作関連遺物群の出土状況との関連性に言及した。21世紀になると集成研究も進展し、ミイラ製作関連遺物群の汚穢に疑問が呈され、接触性が具体化された。以上が先行研究のまとめである。

まず、これまでの汚穢の賛否はミイラ製作関連遺物群の出土状況に依拠してきたため、現在でも汚穢の有無は不明である。この現状は汚穢という性質のみによって出土状況が左右されるという前提から還元的に考察した結果である。しかし、汚穢のみと出土状況を関連付けて考察する前段階で、出土状況に影響をもたらし得る他の要素への一層の検討が必要であると筆者は考える。つまり、墓の規模、墓内にどれほど副葬品を収容できる余裕があったかといった要素がミイラ製作関連遺物群の出土状況にもたらす影響を考慮しないまま汚穢が議論されてきた。さらにこうした議論において、墓全体を通して主に注目を浴びるのはミイラ製作関連遺物群が副葬品として出土した墓に偏重している。しかし、出土していない墓もミイラ製作関連遺物群の出土状況を検討する重要な情報を有しているはずである。
こうした複合的な要因を検討しないまま、汚穢論を発展させることは不可能である。

次に、ミイラ製作関連遺物群の死体との接触性についてである。これまで身体的接触を伴うミイラ製作関連遺物群が再生・復活に必要であり、接触性が組成に関わるという主張がなされてきた。先行研究でも指摘されたように確かに出土頻度の高い遺物は接触が多いことが想定される。しかし、接触している度合いが高いと想定されるものの、出土頻度の高くないミイラ製作道具や材料も存在する。したがって、接触性は高いが、出土頻度の高くないものがある以上、ミイラ製作関連遺物群の組成要因として接触性のみを挙げる事には慎重になる必要がある。実際に出土する遺物群のみで検討し、出土していないものを排除した場合、ミイラ製作関連遺物群の性質を正しく理解することはできない。出土頻度の高くない道具や材料も念頭に入れた上で、道具と材料全体から見たミイラ製作関連遺物群の組成を改めて考える必要がある。

以上をまとめ、本稿では先行研究の課題を2つ提示する。1つ目は、ミイラ製作関連遺物群の組成や出土状況の要因について他の要素をあまり考慮されず進んできたことである。2つ目は副葬品として出土してなかった墓や出土頻度の高くない道具や材料といった、ミイラ製作関連遺物群として「出土しない」対象への検討が不足してきたことである。以上の先行研究の課題を踏まえ、本稿の目的を提示したい。本稿ではミイラへの宗教観念に関わるミイラ製作関連遺物群の性質理解の一端として、出土状況と組成の要因を再検討することを目的とする。ミイラ製作関連遺物群に加え、それが出土しない墓や道具や材料を踏まえて、ミイラ製作関連遺物の組成と出土状況の要因より深く検討する。それによって、当該期のミイラ製作関連遺物群を正しく理解し、当時の人々のミイラへの宗教観念を研究する基礎付けができるのである。

第２表　ミイラ製作関連遺物群　対象資料

資料No.	資料名	時期	出土位置	出土遺跡	備考	参考文献
1	包帯	18王朝	TT71下　ラモーゼ、ハトネフェル墓	シャイク・アブド・アル＝クルナ	墓内の出土状況良好	Lansing and Hayes 1968
2	ナトロン入り土器	18王朝	KV36　マイヘルペリ墓	王家の谷　東谷	墓内の出土状況良好	Daressy 1902
						Smith 1992
						Eaton-Krauss 2008
						Lacomy 2016
						Orsenigo 2017
3	ナトロン入り土器	18王朝	KV46 イウヤ、チュウヤ墓	王家の谷　東谷	墓内の出土状況良好	Davis 1907
						Quibell 1908
						Smith 1992
						Eaton-Krauss 2008
4	トゥトアンクアメンのミイラ製作関連遺物群	18王朝	KV54	王家の谷　東谷	KV62の通路から移動か	Davis 1910
						Winlock 1973
						Allen 2000
						Janot 2008
						Winlock and Arnold 2010
5	ミイラ製作関連遺物群	18王朝	KV63	王家の谷　東谷		Forbes 2006
						Schaden 2007, 2009
						Krauss 2008
						Ikram 2010
						Gabolde 2016
6	ミイラ製作関連遺物群	19王朝	シャフト1337	ディル・アル＝マディーナ		Bruyére 1937
7	フリント石、布	19王朝	TT215　アメンエムオペトの神殿前庭部外側	ディル・アル＝マディーナ		Bruyére 1934
8	土器	19王朝	KV17 セティ1世墓	王家の谷　東谷		Reeves and Wilkinson 1996
9	石製容器	19王朝	KV8 メルエンプタハ墓外周辺	王家の谷　東谷		Reeves 1990
						Bickerstaffe, D. 2007

第３表　対象墓

墓名	時期	出土遺跡	参考文献
ハトネフェル・ラモーゼ墓	18王朝	シャイク・アブド・アル＝クルナ	Lansing and Hayes 1968
			Smith 1992
KV36マイヘルペリ墓	18王朝	王家の谷東谷	Daressy 1902
			Smith 1992
			Eaton-Krauss 2008
			Lacomy 2016
			Orsenigo 2017
KV46 イウヤ、チュウヤ墓	18王朝	王家の谷東谷	Davis 1907
			Quibell 1908
			Smith 1992
			Eaton-Krauss 2008
KV62トゥトアンクアメン墓	18王朝	王家の谷東谷	Carter et al 1963
			Reeves 1990a, b
			Smith 1992
			Reeves and Wilkison 1996
ネフェルカウエト	18王朝	アル＝アサーシーフ	Hayes 1968
			Strudwick and Taylor 2003
			Smith 1992
カーターNo.37墓 埋葬室A	18王朝	アル＝コーカ	Carnavon and Carter 1912
			Smith 1992
カーターNo.37墓 埋葬室E	18王朝	アル＝コーカ	Carnavon and Carter 1912
			Smith 1992
TT8カー・メリト墓	18王朝	ディル・アル＝マディーナ	Schiaparelli 1927
			Smith 1992
			Vassilika 2010
			Bianucci et al. 2015
TT1センネジェム墓	19王朝	ディル・アル＝マディーナ	Bruyére 1959
			Smith 1992
			Adel Mahmoud Abd el-Qader, Donnat, S 2011

２．対象遺跡と資料

２－１．対象遺跡

まず、本稿では対象地域をテーベ西岸に設定した。テーベ西岸におけるミイラ自体の研究は数多くみられ、(Smith, G. E. 1906; Leek 1972, 77 Hawass et al. 2010, 2012; Saleem and Hawass 2013)、最も研究の進んだ地域と言える。さらに新王国時代のミイラ製作関連遺物群の集成(Céline 2007; Ikram and Grande 2011)によれば、当該期テーベ地域の出土例が最も多い。そのため、テーベ地域におけるミイラ製作関連遺物群研究はこの地域での先進的なミイラ自体の研究と合わせ重層的なミイラ研究を構成する一助となる。テーベ地域内の対象遺跡は王家の谷、アル＝アサーシーフ、シャイク・アブド・アル＝クルナ、アル＝コーカ、ディル・アル＝マディーナである。

２－２．対象資料

分析に先立ち本稿で扱う対象資料の範囲を示す。全時代のミイラ製作関連遺物群とその出土状況はセリーヌによって集成されている。そのため、本稿の対象資料も、セリーヌの集成に準拠し、テーベ西岸かつ当該期の遺物において資料情報を収集でき本稿の分析に耐えるものに限る。先述したように本稿では墓も分析で扱う。これらの墓はミイラ製作関連遺物群の出土状況との関連性を検討するための情報量が豊富であることが好ましい。そのため、出土状況が良好なこと、被葬者がミイラ製作を行っていたと考えられる根拠があることを条件に選定している。ミイラ製作関連遺物群および対象資料墓は表で示した(第1, 2表)。また研究対象の中心と言えるミイラ製作関連遺物群については以下で詳述する。遺物組成が複数種類に及ぶ場合は資料名をミイラ製作関連遺物群と総称している。

資料1　包帯

ハトネフェル・ラモーゼはセンエンムトの両親であり、シャイク・アブド・アル＝クルナのTT71センエンムト墓前庭部付近において出土状況が良好な状態で発見された(Lansing and Hayes 1968)。墓内に副葬された複数の籠のうちで、一つの籠”Basket H”中にオイルに浸った包帯を入れてあり、ハトネフェルのミイラを製作する過程で使用されたものとされる(Lansing and Hayes 1968: 27)。

資料2　ナトロン

マイヘルペリ墓はロレ(Loret)によって1899年に発掘されたものの、ロレによる最終的な報告書は出されなかった(Smith, S. T. 1992: 223; Orsenigo 2017: 24)。しかし、出土遺物の集成されたカタログが報告されており(Daressy 1902)、ミイラ製作において遺体の乾燥などの役割を持つナトロンを収容した土器が報告された(Daressy 1902: 20)。さらに副葬品の出土状況も近年復元されており、それが入り口から見て最深部、被葬者の足元側の壁際に副葬されていた(Lakomy 2016: 53)。マイヘルペリ墓はもともと別の墓に埋葬されていたが、この墓に再埋葬された可能性が指摘されている(Eaton-Krauss 2008: 289)

資料3　ナトロン

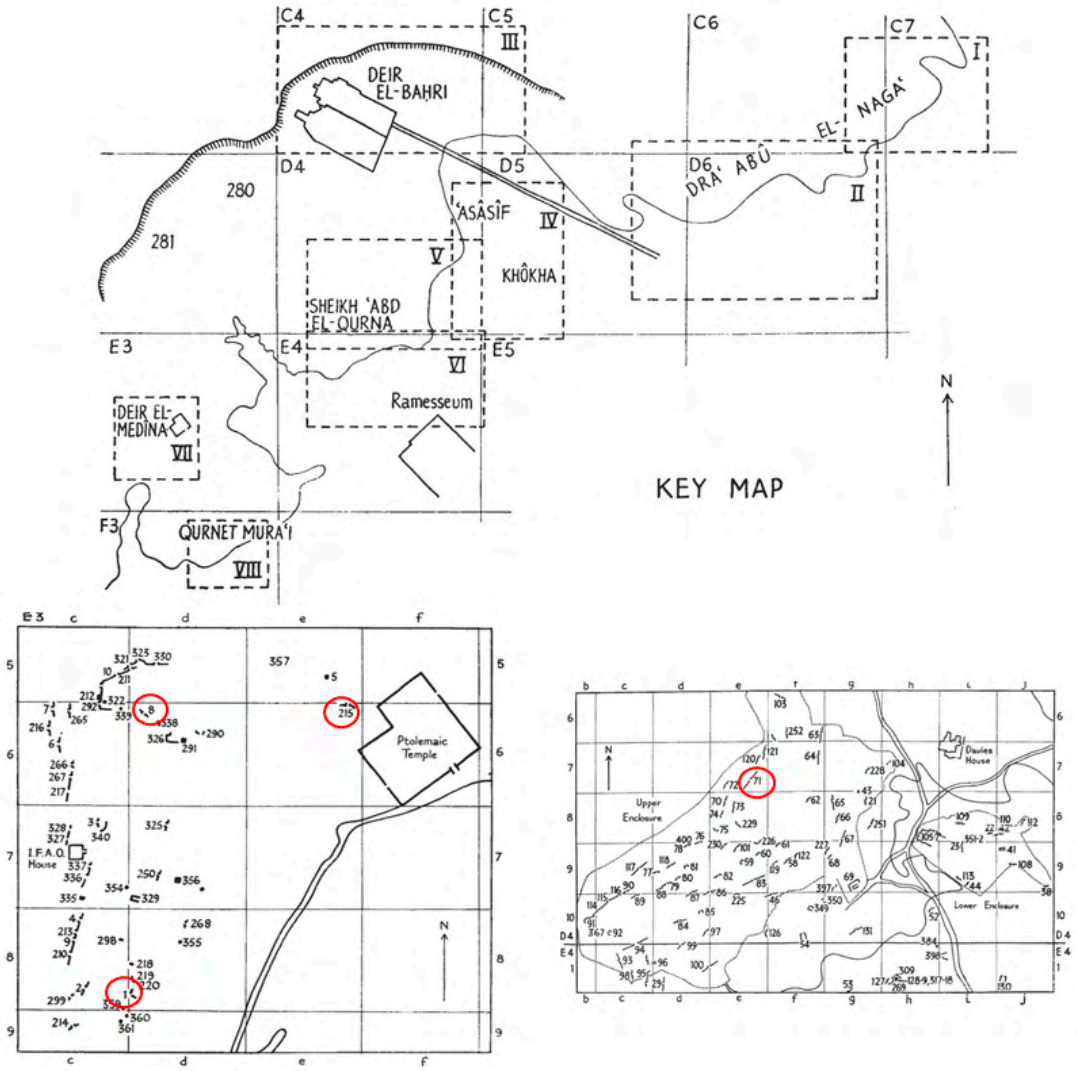
アメンヘテプ3世の王妃ティイを娘に持つイウヤとチュウヤの墓は1905年にデイビス(Davis)によって発見された(Quibell908: I)。出土遺物の科学分析によって土器や石製容器の中に入ったナトロンが報告された(Lucas 1908: 75-77)。副葬品の出土状況も報告されており(Quibell 1908: IV)、こうした土器が墓最深部に重なる形で置かれていた。この墓はマイヘルペリ墓同様に再埋葬の可能性が指摘されている(Eaton-Krauss 2008: 289)。

資料4　トゥトアンクアメンのミイラ製作関連遺物群

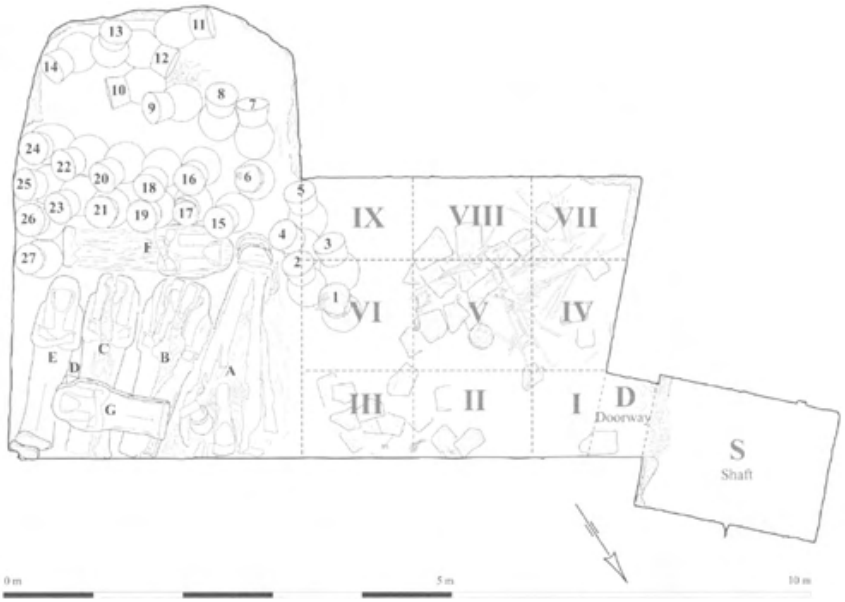
トゥトアンクアメンの墓が発見される以前にすでに王家の谷において発見されている(Davis 1910: 4)。出土遺物はミイラ製作と関連のあるナトロンやトゥトアンクアメンの即位名が書かれた布(MMA09.184.1)やナトロン土器に加えて、動物骨や皿など儀礼的な会食に関連したものなどが報告された(Winlock 1973)。土器がトゥトアンクアメンの血液や体液を収集する目的で使用された場合もあるため(Janot 2008: 211)、出土土器は様々な用途で使用されたと考えられる。これらの遺物はもともとKV62の通路にあったが、一回目の盗掘後、さらなる盗掘を防ぐために通路が瓦礫で覆われたために、KV54へ移された(Reeves 1996: 95)。アレンは壊れた土器が意図的に破壊された可能性を挙げるもののそれには否定的な立場をとっている(Allen 2000: 28)。しかし、後述するKV63との類似性を踏まえると可能性は高いと筆者は考える。

資料5　ミイラ製作関連遺物群

KV63はトゥトアンクアメンの墓KV62発見以来、80年以上空いて王家の谷で新たに番号付けされた遺構である。2005年から2006年にかけてのKV63の発見によってエンバーミングカシェへの注目が集められた(Eaton-Krauss 2008: 288; Gabolde 2016: 123)。最終的な報告は現時点では出されていないものの、出土状況(Forbes, D. 2006; Ikram 2010: 127)や遺物の詳細(Ertman et al. 2006; Schaden 2007, 2009)について断片的であるが報告されつつある。それらの報告を踏まえると、ミイラは全



第４図　ディル・アル＝マディーナ、シャイク・アブド・アル＝クルナ遺跡詳細図



第５図　KV63 出土状況図

く見つからなかったにもかかわらず、ナトロンや土器片、ベッドや枕などが棺や土器にまとめて入れられて出土したことが分かった。特にここから出土したベッドはミイラ製作への使用、ミイラ製作後に死者を横たえたる用、もしくは日常用と様々な用途が考えられる。本稿全体を通し、用途や機能が確定していないベッドはミイラ製作関連遺物群としては扱わない。遺物組成はKV54と類似しており、ミイラ製作関連遺物群と合わせて儀礼的な会食を想起させる遺物が出土している。別個体の土器内に収容されていた土器の破片同士が接合したことや、複数の棺から類似した枕が出るなどの状況から本稿では、長期的に複数の被葬者に関わるミイラ製作関連遺物群がここに置かれていったというよりも、一被葬者や同一時にまとめて置かれたものと考える。また大型の土器や棺にまとめて入れられていた土器片やベッド片が接合することや先に述べた別々の土器内に入れられた土器片が接合することを踏まえて、これらの土器が意図的に破壊され、その後にまとめて大型の土器などに入れられたものと筆者は考える。

第６図　KV63 土器内収容状況

資料6　ミイラ製作関連遺物群

シャフト1377は1933年から1934年にかけてブルイエール(Bruyére)によってディル・アル＝マディーナでの調査が行われており、その際に発見された遺構である(Bruyére 1937)。シャフト内では土器の破片や汚れた布を入れたアンフォラに加え、ラメセス4世墓の設計図の断片や棺の断片、彫像片などが見つかった一方で、ミイラや遺体についての報告はない(Bruyére1937: 80)。設計図の断片等、ミイラ製作関連遺物群とは無関係の遺物が合わせて出土している状況とKV54やKV63の例から勘案し、シャフト1377は墓として使用したとは考えられず、本稿においては墓というよりもKV63やKV54に近い性格を有するものとして扱う。

資料7　包帯、フリント石

ディル・アル＝マディーナTT215は神殿であり(Bruyére 1934: 55; Poter and Moss 1960: 311)、詳細な出土位置は不明ではあるものの、前庭部外側で2個の土器が発見され、中にはミイラ製作に使用すると考えられるフリント石と包帯が入っていた(Bruyére 1934: 55)。

資料8　ミイラ製作関連遺物群

セティ1世は19王朝2代目のファラオであり、ラメセス2世の父に当たる。王家の谷で最大級であり、完成度の高い彩色が施されている(Reeves 1996: 138)。リーヴスはバートン(Burton, J.)の未報告資料を扱い、セティ1世墓最深部から見つかった彩色用の筆や多数の土器の破片にミイラ製作と関連があるという可能性を指摘している(Reeves 1996: 138)。

資料9　石製容器

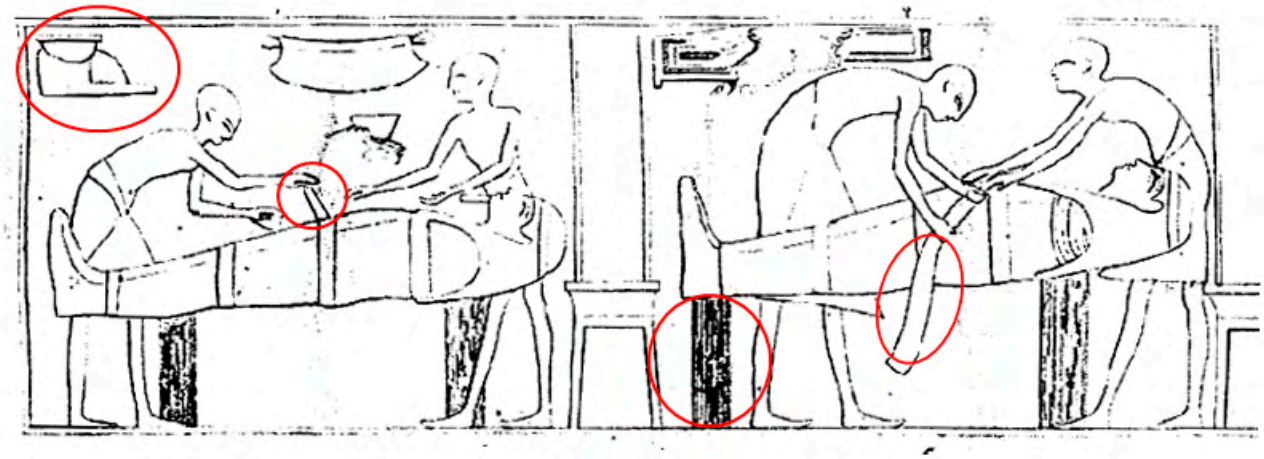
ラメセス2世の息子であるメルエンプタハの墓とされる王家の谷KV8の周辺より出土。墓外に13個のトラバーチン製の石製容器が一塊に並べら、丁寧に埋納するかの如く石によって伏せられていた(Carter NoteE)(5)。容器上のヒエラティックの内容から、かつてオイルが入っていたことが分かっている(Bickerstaffe, D. 2007: 50)。

第７図　資料９石製容器

３．分析方法

改めて本稿の目的はミイラ製作関連遺物群の組成と出土状況の要因を再検討することである。出土状況は墓の規模や副葬品の収容、組成といった汚穢以外の要素の検

第８図　ミイラ製作道具参考図



第９図　ミイラ製作図

討が不足してきた。また組成でも出土していない接触性が高いものの道具や材料を合わせて検討する必要がある。本稿では対象資料の出土状況と組成の分析を行う。ここで強調すべきなのは、従来の研究と異なり、実際に出土したミイラ製作関連遺物群のみから検討するのではなく、ミイラ製作関連遺物群として出土していない事例と合わせて分析することである。つまり、組成では、ミイラ製作に使用されたが出土していない道具や材料と言える。出土状況では、副葬品としてミイラ製作関連遺物群が出土しなかった墓と言える。

３－１．出土状況関連

まず、ミイラ製作関連遺物群の出土状況に関する分析を述べる。ミイラ製作関連遺物群は墓内や墓外と多様な出土状況を有することは先も述べた。そこで、ミイラ製作関連遺物群の出土の有無に関わらず、出土状況が良好な墓を対象として、出土した墓としなかった墓の両方で①副葬品組成、②副葬品収容場所の規模と収容率という2つの観点に注目する。

以下、それぞれ具体的な方法を述べる。①は発掘報告書などによって出土報告がなされた副葬品をリスト化する。なおリスト化する際の、副葬品の項目やグルーピングはS. T. スミスに準拠している。そしてミイラ製作関連遺物群が墓内で出土する場合としない場合で被葬者の副葬品組成にどのような傾向があるのかを分析する。

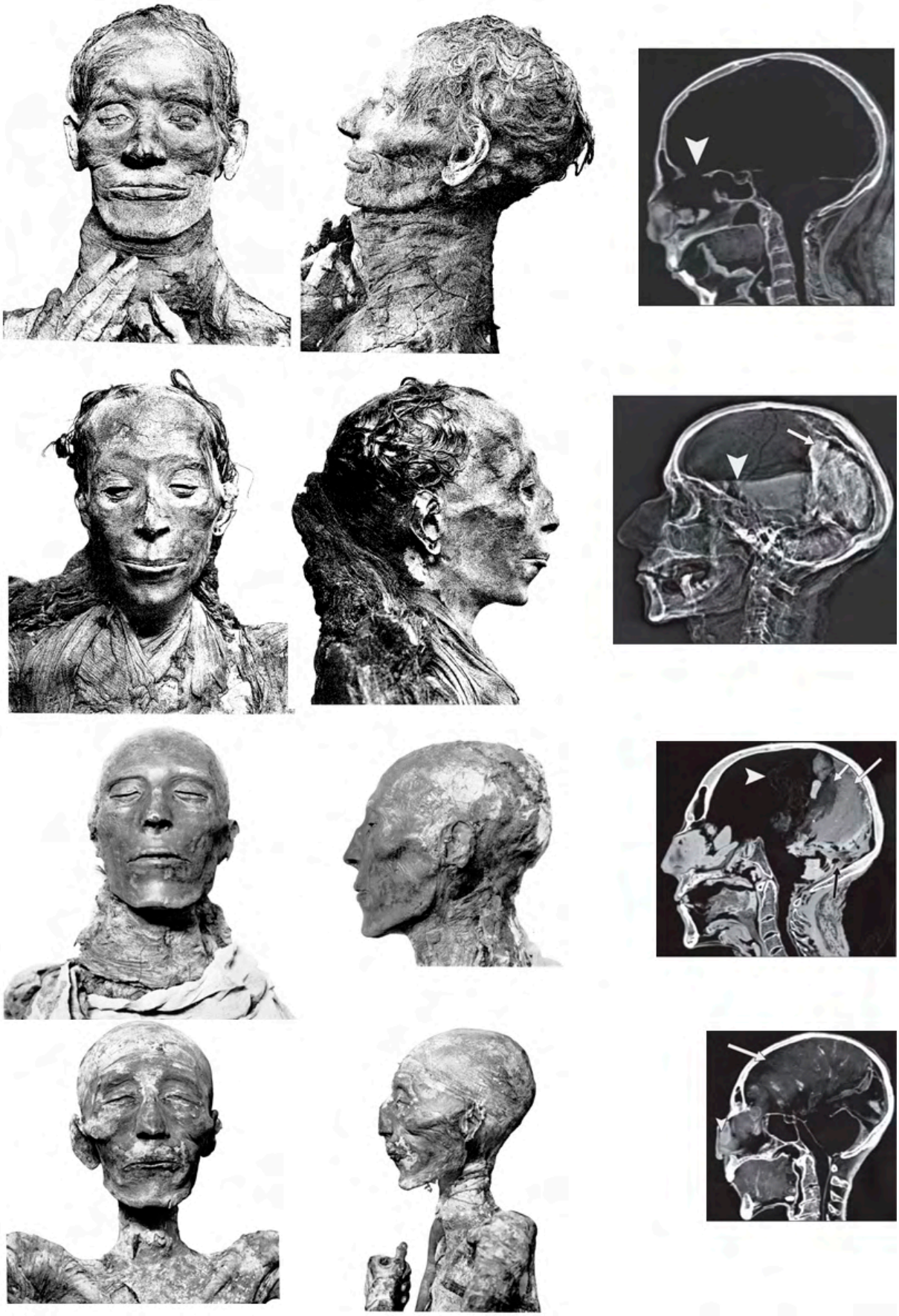
②はミイラ製作関連遺物群を副葬品として納めることができる、もしくは納めることを想定されていた面積(7)とその面積においてどれほど副葬品を収容しているのかという問題である。ミイラ製作関連遺物群が出土している墓ではミイラ製作関連遺物群を除いた副葬品の収容を問題とする。対象墓は出土状況が良好であるため、副葬品が墓内でどれほどの密度で収容されていたのかが確認でき、ミイラ製作関連遺物群を物理的に副葬できる余裕があったかどうかを検討できる。対象資料墓の出土状況図ごとに、記載されたスケールおよび縮尺から、対象墓全体で出土状況の縮尺を統一する。スケールが不明なもの、もしくは出土状況図が確認できないものも、参考と分析において参考とする。そしてミイラ製作関連遺物群が出土している墓としていない墓においてミイラ製作関連遺物群を置く物理的な余裕の差異について分析する。トゥトアンクアメン墓は先述のようにミイラ製作関連遺物群が元々入っていたことが指摘されており、本稿でも元々墓内で出土したとして分析する。

３－２．組成関連

次に、ミイラ製作関連遺物群の組成が、道具や材料全体から見て接触性の高いという要因のみに影響されるのかを検討する。組成分析の前段階として、ここで対象資料のミイラ製作関連遺物群ごとに、出土の有無とは関係なく実際に用いられたであろうミイラ製作道具と材料を部分的に復元しておく。それに基づきミイラ製作関連遺物群の組成にどのような傾向がみられるかを分析するのである。以下、分析に先立ち行う復元の方法について詳述する。まず、ミイラ製作関連遺物群が墓内で出土する、もしくは使用された被葬者を特定できる場合、墓内のミイラ、副葬品のカノポス壺、ミイラ製作関連遺物群を用いて、ミイラ製作の道具と材料を復元する。ただし、先行研究によってミイラから得られる情報が乏しい場合、ミイラは除外する。次にミイラ製作関連遺物群が墓外で出土し、ミイラ製作関連遺物群が使用された被葬者を特定できない場合、ミイラ製作関連遺物群のみによって断片的な復元を行う。また、この際に、ミイラ製作に必要となる道具や材料については全時代を通したセリーヌの集成(6)と当該期の図像資料に準拠した。

続いて復元するうえでの基本的な情報と前提を整理する。カノポス壺が出土した場合、被葬者は内臓摘出とそのための摘出用に皮膚を切開することが考えられる。そのため、ナイフや開創器、臓器摘出台も合わせて必要になると考えられる。カノポス壺はハトネフェル・ラモーゼ、マイヘルペリ、イウヤ・チュウヤ、トゥトアンクアメン、メルエンプタハ墓で発見されている(Daressy 1902; Quibell 1908; Carter et al. 1963; Dodson 1994)。また王族のミイラの分析によってイウヤ、チュウヤ、トゥトアンクアメン、セティ1世、メルエンプタハに脳のかき出しの痕跡が認められている(Boyer 2003; Saleem and Hawass 2013)。したがって、このミイラたちには脳をかき出す鈎針が必要であり、同じく王家の谷に埋葬されたマイヘルペリも同様と想定される。18王朝ディル・アル＝マディーナのメリトはミイラ製作においてナトロンが使用されており(Bianucci et al. 2015: 16)、当該期のミイラのナトロン使用は同様に行われていた可能性がある。また、ナトロンを使用する場合には被葬者を乗せるナトロン用の台が想定されている(Winlock 1968b: 34; Brier 2005: 162. 163)。また、シャイク・アブド・アル＝クルナにおける包帯を使用する際の図像資料から台、はけ、鼻用注入器等が必要と言える(Dawson 1927; Brier 2005)(第9図)。

ミイラ製作の質は階層や経済性によることが指摘されている(Smith 1992: 199)。そのため、同遺跡や類似する階層で参考にできるミイラがいる場合、信用度は落ちるものの、復元の参考としている。また、ナトロンを除く自然由来のものに関しては、ミイラ製作以外の用途も



第 10 図　ミイラと頭部 CT 画像（上からイウヤ、チュウヤ、セティ 1 世、メルエンプタハ）

考えられるため、本稿では分析から除外した。また資料ごとにミイラ製作関連遺物群の種類や量が異なるが、組成分析の性質から、分析は出土した遺物の種類を基に行い、数量までは踏み込まない。

前述のように仮定した一式においてミイラ製作関連遺物群の組成にどのような傾向が見られるかについて、各道具の使用段階、接触性の観点から分析する。使用段階は臓器摘出、乾燥、包帯巻きの3段階を設ける。

接触性に関して、以下の3段階に設定する。

高：死者に接触し、欠損もしくは失われる部分にも触れると想定される。

中：死体には接触するが、欠損もしくは失われる部分には触れないと想定される。

低：死体に直接的に接触しないと想定される。

これらの観点をミイラ製作関連遺物群および実際には出土していない道具や材料で共通点や相違点を分析する。

4．分析

4－1．分析1　出土状況関連

まず、ミイラ製作関連遺物群が副葬品として出土した墓としていない墓の組成について分析する。出土した墓としていない墓を比べた際に、出土した墓は全体的な傾向として副葬品が豊富であると言える。しかし、マイヘルペリ墓やハトネフェル・ラモーゼ墓はカー・メリト、ネフェルカウエト、センネジェム墓と同水準かもしくは劣っている。加えてイウヤ・チュウヤ墓もカー・メリト墓と同水準である。出土していない墓はカー・メリト墓からカーターNo.37墓埋葬室Aに至るまで、副葬品の豊富さに大きな差があると言える。これらを踏まえると副葬品の豊富さは必ずしもミイラ製作関連遺物群の出土と関係しないことが読み取れるであろう。

次に副葬品の組成を詳しくみていく。内臓を入れるという機能を持つカノポス壺はミイラ製作と密接な関係性を持っている。対象墓9例の内、このカノポス壺はカー・メリト墓を除く8例で確認でき、ミイラ製作関連遺物群出土の有無に関わらず、広く副葬されていることがわかる。また状況証拠からミイラ製作関連遺物群ではないと想定されるが、ミイラ製作関連遺物群と機能的に類似している遺物として化粧道具としてのナイフやカミソリ、亜麻布、アンファラ、壺などを挙げられる。これらの一部はカーターNo.37墓を除く7つの墓で確認できた。つまり、カノポス壺同様にミイラ製作関連遺物群の出土有無と関係なく広く副葬されることがわかる。

次に副葬品収容場所の規模と収容率を分析する。対象墓の遺物出土状況図もしくは墓の平面図を示した(第11図)。

まず、ミイラ製作関連遺物群が出土した墓について言及する。トゥトアンクアメン墓は4部屋全て高い収容率を誇る。副葬品収容の規模が対象墓の中で最大であり、ミイラ製作関連遺物群を無いものとして見ると、通路が最も収容に余裕がある場所と言える。イウヤ・チュウヤ、ハトネフェル・ラモーゼはトゥトアンクアメン墓に比べ墓の規模が小さい。加えて遺物が密集し、収容率が高いことからミイラ製作関連遺物群を入れる余裕はそれほどないと言える。マイヘルペリ墓の収容率はそれほど高くないものの、規模が小さいため、イウヤ・チュウヤ、ハトネフェル・ラモーゼ墓同様にそれほど余裕があ

第４表　副葬品組成

	トゥトアンクアメン	マイヘルペリ	イウヤ・チュウヤ	ハトネフェル・ラモーゼ	カー　メリト	ネフェルカウエト	カーターNo.37 A	カーターNo.37 C	センネジェム
木棺	○	○	○	○	○	○	○	○	○
マスク	○	○	○	○	○				○
カノポス壺	○	○	○	○		○	○	○	○
シャブティ	○		○		○				○
像	○		○					○	○
パピルス		○	○	○	○	○			
豊穣シンボル	○	○	○						
宝飾品	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ゲーム	○	○			○	○			
花束、花輪	○	○			○				○
家具	○		○	○	○	○		○	○
箱、籠	○	○	○	○	○	○	○	○	○
化粧道具	○	○	○	○	○	○	○	○	○
個人用品	○	○	○	○	○	○	○	○	○
金属、石製容器	○	○	○	○	○	○	○		
花瓶、ボウル、皿	○		○	○	○	○		○	
サンダル	○		○	○	○	○			○
杖	○		○		○	○		○	○
衣服	○								
布	○		○	○	○	○			
アンフォラ	○	○		○	○	○			○
彩文土器	○		○		○				
壺型土器	○	○	○	○	○	○			

るとは言えない。

次にミイ製作関連遺物群が出土していない墓に言及する。まず、最大規模であるカー・メリト墓は明らかにハトネフェル・ラモーゼ墓やマイヘルペリ墓を上回り、イウヤ・チュウヤ墓と比べても同規模もしくはそれ以上である。加えて、2部屋のうち入り口側の部屋は比較的収容率が低く、規模を合わせて考えるとハトネフェル・ラモーゼ墓よりははるかに余裕があり、マイヘルペリ、イウヤ・チュウヤ墓にも収容の余裕さでは十分匹敵する。このような状況は他の墓でも見られ、ネフェルカウエト墓は明らかにハトネフェル・ラモーゼ墓より余裕があると言え、カーターNo.37墓もハトネフェル・ラモーゼ墓に匹敵する。

以上のことから、ミイラ製作関連遺物群が出土した墓においても収容に余裕のない墓があり、出土していない墓でも、出土した墓を凌ぐ余裕を兼ね備えていた場合があることが分かった。

４－２．分析2　組成関連

以下に復元をまとめた(第5表)。これを踏まえてミイラ製作関連遺物群の組成を分析する。まず、実際の出土の有無に関係なく、ミイラ製に用いられた可能性が高い道具や材料の傾向を述べる。ピンセットや毛剃り、縫い針、口開け用具、鼻用注入器やスプーンは情報不足により復元できなかった。また開創器や刷毛、包帯用の台等が使用されていた可能性も否定できないが、推測の域を出ない。そのため、これらの道具は本稿では明言しない。対して、土器や布・包帯は全てで用いられ、ナトロンとナトロンベッド、ナイフ、臓器摘出台などが6例と過半数を占めて利用されていた可能性が高い。また脳をかき出す鈎針も4例と比較的高い割合で使用された可能性が高い。以上が復元による大まかな傾向と言える。

では実際に出土するミイラ製作関連遺物群の傾向に言及する。実際に出土したのは土器7例、布・包帯5例、ナイフ1例、ナトロン4例、石製容器2例、筆1例であった。土器や布・包帯は比較的高い割合で出土し、ナトロンは4例すべてが王家の谷によるものであり、王家の谷に限れば高い割合で出土していると言える。
一方で使用された可能性が高いナトロン用の台や鈎針、臓器摘出台は出土しなかった。ナイフやナトロン用、臓器摘出用の台は出土割合が低かった。

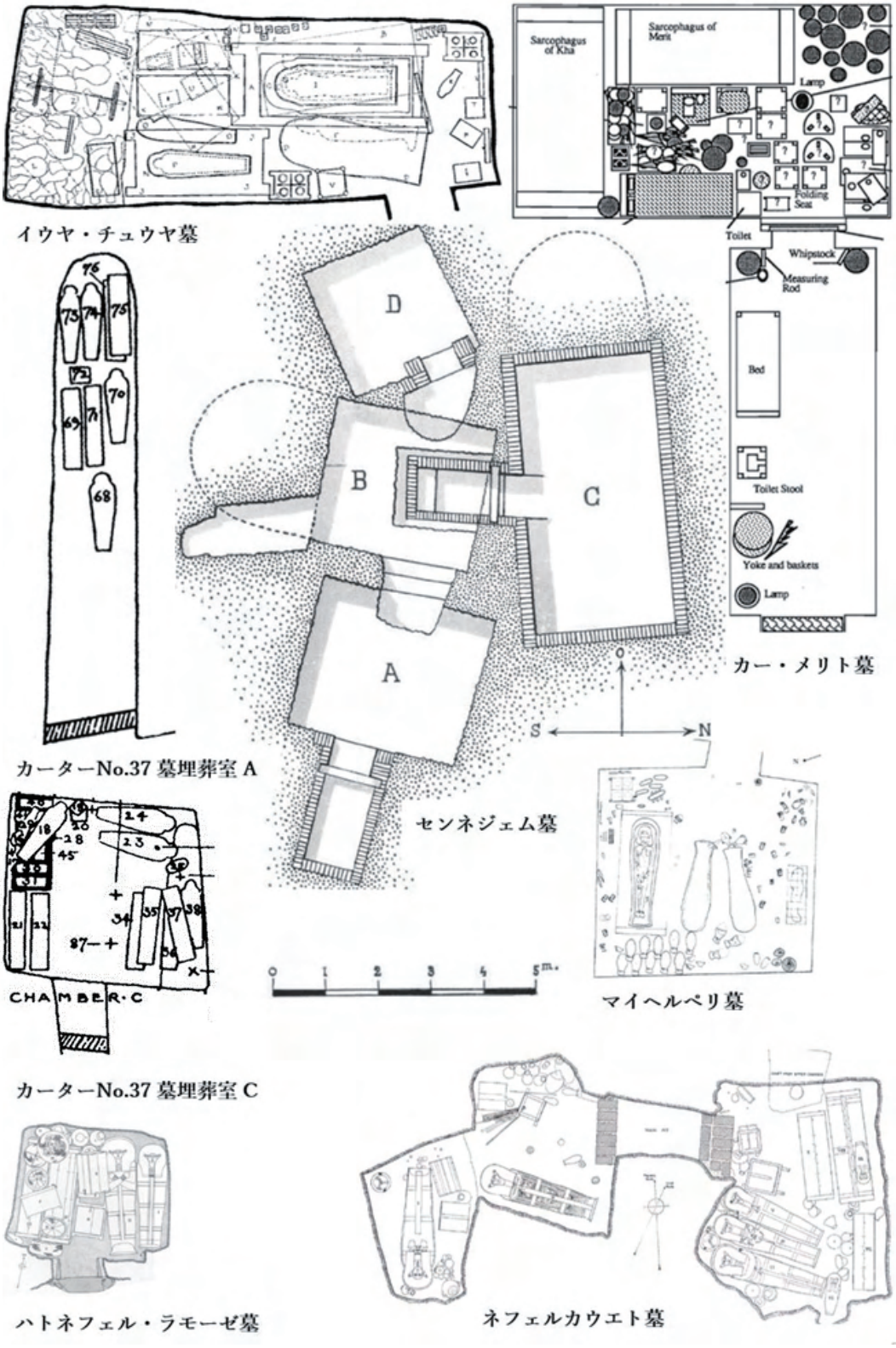
ここからミイラ製作関連遺物群と、使われたと考えられるが出土しなかった道具の使用段階と接触性を分析する。そのため、使用段階が不明であり、接触性にも幅が見られる石製容器や土器、筆には言及しない。出土割合が高かった布・包帯は包帯巻き段階であり(8)、ナトロンは乾燥段階に位置する。出土割合の低いナイフは臓器摘出段階であった。対して、出土しなかったナトロン用の台は乾燥段階であり、臓器摘出台と鈎針は臓器摘出段階であった。包帯巻き段階は包帯・布しか復元によって言及できるものがないため、出土していない道具との比較はできない。しかし、臓器摘出段階、乾燥段階共に出土したもの、してないもの両方があり、使用段階と出土組成に明確な関連性は見られない。

さらに接触性についても言及する。実際に出土したナトロンやナイフは接触性が高く、布・包帯も低いものではないと言える。そのため、出土遺物に一定の接触性は看取できる。一方で出土していない、鈎針、臓器摘出用台、ナトロン用台は全て接触性が高い。そのため、接触性の高さ、有無と組成に直接的な関連性は認められなかった。

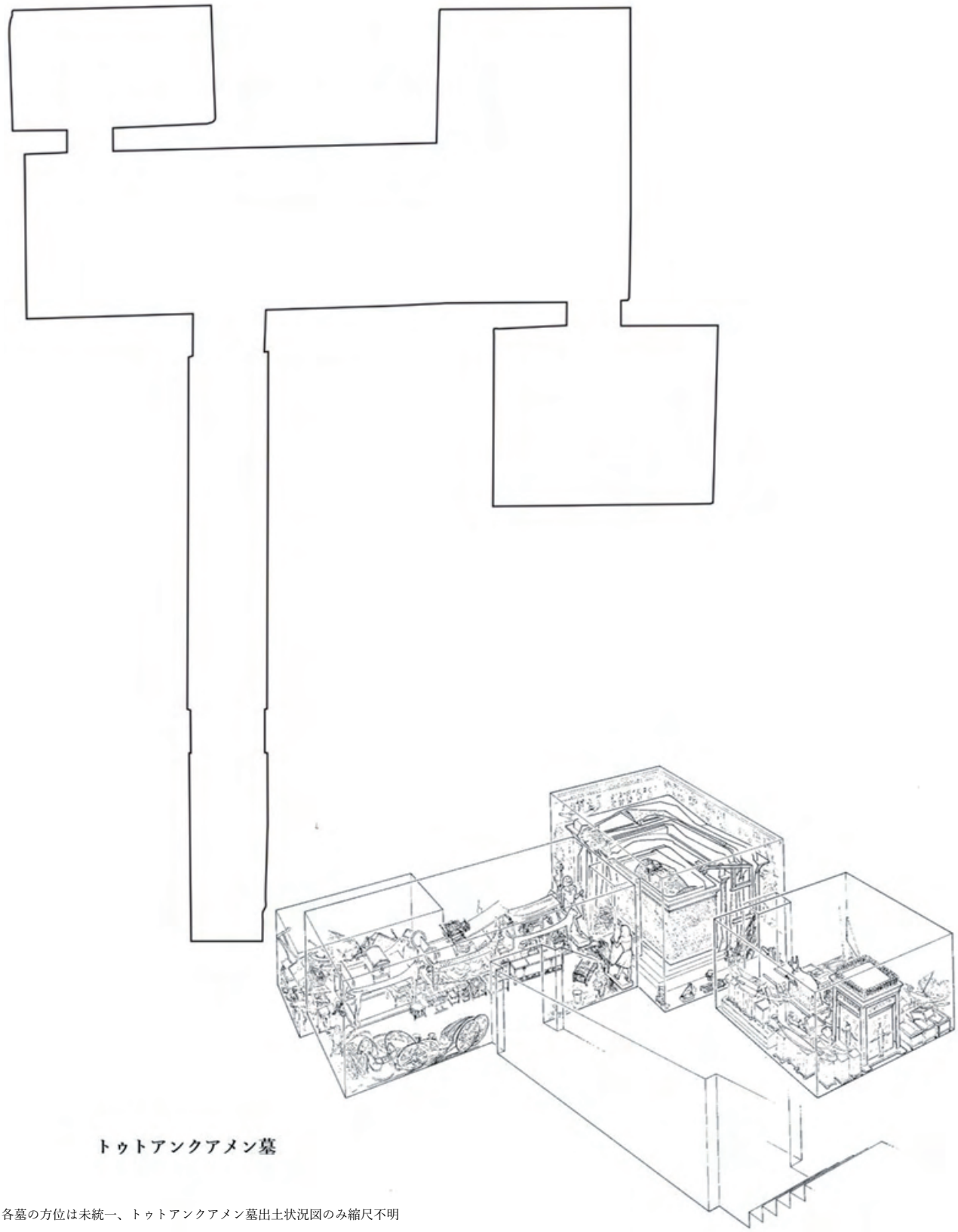
第５表　ミイラ製作関連遺物群組成

			イウヤ・チュウヤ	マイヘルペリ	トゥトアンクアメン	セティ1世	KV63	メルエンプタハ	ラモーゼ、ハトネフェル	シャフト1337	TT215神殿前庭部外側
	道具、材料	接触性									
臓器摘出	ナイフ	大	○	○	○	△	△	○	○	△	◎
	鈎針	大	△	○	○	○	△	○			
	ピンセット	大									
	開創器	大	△	△	△	△	△	△	△	△	△
	毛剃り具	大									
	縫い針	中									
	臓器摘出台	大	○	○	○	△	△	○	○	△	○
乾燥	ナトロン	大	◎	◎	◎	○	◎	○	△	△	△
	ナトロン用台	大	○	○	○	○	○	○	△	△	△
	鼻用注入器	中									
	口開け用具	小									
	刷毛	低	△	△	△	△	△	△	△	△	△
	台	低～中	△	△	△	△	△	△	△	△	△
	布・包帯	中～大	○	○	◎	○	◎	○	◎	◎	◎
その他、場面不明	筆	低～中				◎					
	スプーン	低～中									
	土器	小～大	◎	◎	◎	◎	◎	○	○	◎	◎
	石製容器	小～大					◎	◎			
参考文献			Daressy 1902	Davis 1907	Winlock 1973	Reeves and Wilkinson 1996	Forbes 2006	Dodson 1994	Lansing and Hayes 1968	Bruyére 1937	Bruyére 1934
			Orsenigo 2017	Quibell 1908	Carter et al 1963	Saleem and Hawass2013	Schaden 2007, 2009	Janot 2008			
				Saleem and Hawass2013	Saleem and Hawass2013		Ikram 2010	Saleem and Hawass2013			
			Dawson 1927								
			Breier 2005								
			Céline 2007								
			Bianucci ea al. 2015								

◎：ミイラ製作関連遺物群として出土　○：ミイラの状態やカノポス壺を踏まえて可能性高い　△：同時期や同遺跡のミイラや図像資料から推定



第 11 図　墓の平面図もしくは出土状況①



各墓の方位は未統一、トゥトアンクアメン墓出土状況図のみ縮尺不明

マイヘルペリ、トゥトアンクアメン墓、カー・メリト墓の出土状況図は再原図

第 11 図　墓の平面図もしくは出土状況②

５．考察

これまでの分析を踏まえて、ミイラ製作関連遺物群の出土状況と組成要因について再検討を試みる。

５－１．出土状況の要因

副葬品の有無や種類は被葬者の階層や経済性に依拠していると言える(Smith 1992)。分析によって墓の副葬品の豊富さとミイラ製作関連遺物群の出土には関係が無いことが分かった。さらに被葬者はミイラ処理を受けているならば、道具や材料は用意できていることになる。加えてミイラ製作関連遺物群に機能性が類似する副葬品も出土している。これらのことを踏まえると、階層や経済的要因でミイラ製作関連遺物群を墓内に入れられなかったとは考えられない。さらに、出土していない墓でも副葬品の収容の余裕で出土した墓を凌ぐ例が複数見られた。以上のことから、本稿におけるミイラ製作関連遺物群が出土しない墓は収容率や経済、階層等に関係なくミイラ製作関連遺物群を副葬品として当初から志向していなかったことを要因に求められる。

一方で、墓内で出土した墓は副葬品として志向されていたことは明らかである。しかし、ハトネフェル・ラモーゼ墓は副葬品収容には余裕がなかった。マイヘルペリ墓でも収容率が高くないが、小規模で余裕があったとは言えない。トゥトアンクアメン墓は本来の埋葬をほぼ無傷で保てた唯一の王墓であり(河合1994: 61)、先にも述べたように盗掘前は部屋の収容率は高いが通路に置く余裕はあった。しかし、一回目の盗掘後、さらなる盗掘を防ぐために通路が瓦礫で覆われ、通路にあったものはKV54へ移された(Reeves 1996: 95)。ハトネフェル・ラモーゼ、イウヤ、チュウヤ、マイヘルペリ墓ではミイラ製作関連遺物群の種類が一種類に限られ、トゥトアンクアメンでは多様であった。これらのことは先行研究でも指摘されていたように収容率に影響を受けていることは明らかである。一般的な王墓は副葬品の質は別としてトゥトアンクアメン墓よりも大量の副葬品を納めていたとされる(河合1994: 79)。そのため、メルエンプタハ墓でミイラ製作関連遺物群が出土しておらず、セティ1世墓で出土しているのはこうした収容率の要因も考えられよう。さらに他の副葬品の収容率の影響で出土状況が変化するという様相は他の副葬品よりも墓内に入れる優先度が低かったことに起因すると言える。つまり、副葬品として志向されたとしても優先度が低いために、収容率の影響を受けると言えるのではないか。ここまで述べた、ミイラ製作関連遺物群の副葬品としての志向性に応じて墓内での出土が左右され、さらに、墓内でも副葬品としての優先度が低いために収容率に影響を受けることを改めて整理しておく。また、先行研究では再生・復活との観点(Winlock 1973)からカノポス壺に入れられた内臓同様(Chapman 2016)に死者の体液や血液は保存される必要があることが言われてきた(Janot 2008)。今回の分析で対象墓のうち9例中8例という非常に高い割合でカノポス壺が墓内から出土していることが分かった(9)。これに対して、ミイラ製作関連遺物群は先述の要因によって出土が左右されている。先行研究において指摘されたような再生・復活への必要性が同様であるならば、カノポス壺とミイラ製作関連遺物群は同様な出土状況になることが考えられる。しかし、カノポス壺と比べて、ミイラ製作関連遺物群が出土していない墓における副葬品としての志向性の無さや、出土している墓における優先度の低さを踏まえると、これらに先立つ要因として、先行研究の指摘と異なり、当該期のミイラ製作関連遺物群は内臓ほど再生・復活に必要とされていなかった可能性を指摘できる。つまり、再生・復活にそれほど必要とされないという性質は副葬品として志向されない状況や、優先度の低さという要因を生み出す本質的な要因と言える。ミイラ製作関連遺物群の出土は再生・復活に必要不可欠ではないという性質やそれに伴う副葬品としての志向、収容率など複雑な要因によって左右される可能性を提示できるのではないか。

これまでの検討によってミイラ製作関連遺物群の様々な出土状況について説明してきた。最後にミイラ製作関連遺物群が再生・復活にそれほど必要でないにも関わらず、墓内や特定の遺構に保存される事実について考察したい。その際に特に遺物の出土状況が明確であるKV63を参考に考察する。先に述べたように、これらはミイラ製作関連遺物群だけでなく、葬送に伴う儀礼的な会食に関わる遺物が数多く共伴していた。また、土器やベッド等は意図的に壊されてまとめられていた可能性があることも指摘していた。こうした意図的な破壊の意味について特に赤色土器を対象とした様々な先行研究がある(Blackman 1924; Davis, N de G. 1925; Borchardt 1929; Spiegel 1971; Dijk 1986, 1993)。以下に赤色土器の主な破壊の意味を列挙する。

①死者との関わりを持つものを日常生活へ戻す拒否意識(Blackman 1924: 51)

②死者の状態と同化する、もしくは葬列の悲しみを再現する(Davies, N. de G. 1925; 48)

③死者の霊によって生存者が害されるのを防ぐ(Borchardt 1929: 15, 16)。

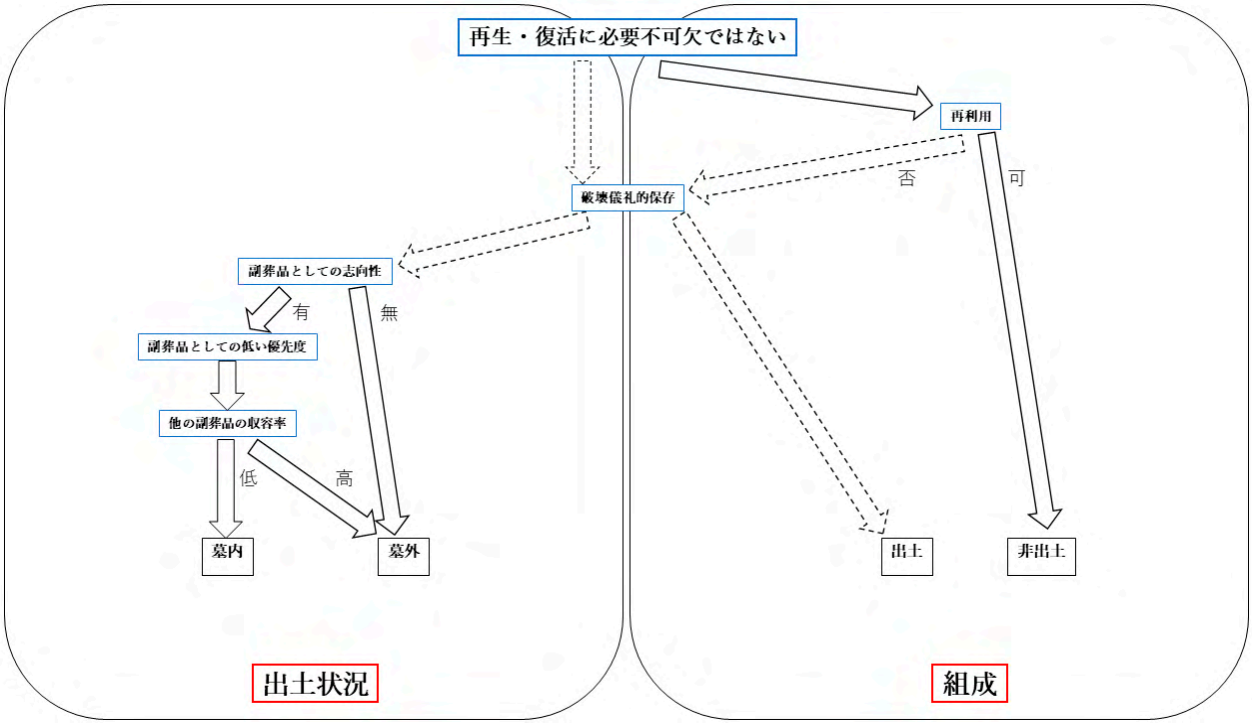
④土器に宿った儀礼的な力を放出するため(Spiegel 1971: 37, 38)。

さらに、青色彩文土器の破壊ついても④の意味で解釈されている(高橋2013; 310)。
KV63の意図的な破壊についてこれらのうちから一つに限定して求めることは困難であり、複数が当てはまる場合も当然考えられる。KV63では赤色土器や青色彩文土器が出土していること(Schaden 2007: 22)、儀礼的な会食に関わる遺物と共伴することを勘案し、ミイラ製作関連遺物群も①や④との親和性の高さを指摘するにとどめる。これはKV63におけるミイラ製作関連遺物群が保存されたことへの説明であり、当該期のミイラ製作関連遺物群すべてに当てはまるとは言えない。しかし、ディル・アル＝マディーナのシャフト1337やKV54はKV63と類似しており、破壊儀礼的な保存を含んでいる可能性は多分にあると考えられる。

以上のことを最後にまとめる。当該期のミイラ製作関連遺物群の出土状況の要因は複雑化しており、根本的な要因に再生・復活に必要不可欠ではないという性質を持つ。しかし、ミイラ製作儀礼に用いられたミイラ製作関連遺物群は、日常生活に戻すことへの躊躇や儀礼的な力を放出するなどの破壊儀礼的な性質によって保存する場合もある。さらに、副葬品として志向するか否かが墓ごとに委ねられ、副葬品として志向した場合でも、優先度は低いために他の副葬品の収容率に影響を受け、時には墓外で出土する。

５－２．組成の要因

次にこうした出土状況を踏まえて組成の要因について考察する。先行研究で指摘されるようなミイラ製作関連遺物群の接触性の高さは一部認められる。しかし、全ての接触性の高いものが出土する訳ではないことが道具や材料全体を復元したことで改めて確認でき、直接的な組成要因とは言えない。チャップマン(Chapman)は道具の一部が出土しないことと再利用の可能性を関連付けた(Chapman 2016: 195)。換言すれば、出土する遺物には再利用の無さと関連付けられる。例えばミイラ製作関連遺物群として頻出のナトロンはひとたび水分を限界まで吸収するとそれ以上吸収できないという特性から(Brier and Wade1997: 98)、再利用に適していない典型と言える。それに対して、実際に出土していない鈎針や臓器摘出台などは機能的に再利用可能と言える。出土状況でも述べたように、当該期ではミイラ製作関連遺物群は再生・復活に必要不可欠ではなかった可能性がある。つまり、出土状況同様に、それほど必要ではないという性質が道具や材料の再利用という実用性重視を可能とする根本的な要因として考えられる。そして残された遺物は出土状況でも述べたように、破壊儀礼等の要因で保存され出土するという組成要因を想定できる。



第 12 図　組成、出土状況要因

おわりに

本稿では新王国時代テーベ西岸のミイラ製作関連遺物群の出土状況と組成の要因を検討すべく、従来あまり注目されてこなかった出土していない道具や材料、副葬品として出土しなかった墓にも注目し、ミイラ製作関連遺物群および墓における出土状況と組成を分析した。それによってミイラ製作関連遺物群は再生・復活にそれほど必要ではなく、またそれに伴う墓ごとの副葬品の志向、収容率や破壊儀礼的要因など複雑化された出土状況の要因を整理できた。組成要因としては、従来言われてきた再利用の可能性を踏まえ、それらを許容する根本的な要因として出土状況同様に再生・復活にそれほど必要ではないというミイラ製作関連遺物群の性質を指摘した。しかし、これらはあくまでも当該期のテーベ西岸における一考察であり、ミイラ製作関連遺物群の全体的な要因とは言えないであろう。今後、他地域や全時代を通してミイラ製作関連遺物群の出土状況や組成を踏まえて、ミイラ製作関連遺物群の性質について検討していく必要がある。

註

(1)本稿では死体を「死者の肉体」という観点に加え、「ミイラ製作完了前の状態」を指すときにも用いている。

(2)ミイラ製作で用いられた道具や材料一式が完全に出土することはまず無い。ミイラ製作に関わる道具や材料のうち、実際に出土している遺物をミイラ製作関連遺物群と総称している。尚、単体の対象遺物を呼称する際にはミイラ製作関連遺物とする。これまでの研究において、使用された道具や材料を埋納したり、副葬したりする場所は「防腐処理の隠し場」を意味する、「エンバーミングカシェ」と総称されてきた(Ikram and Grande 2011; Krauss 2008; Ikram and Dodson 1998: 106)。先行研究において言及される「エンバーミングカシェ」出土の遺物がすなわちミイラ製作関連遺物群に当たることを明記しておく。

(3)材料分析研究は集成されてまとめられており、詳細は以下を参照されたい(Gomaa Abdel-Maksoud and Abdelrahman Elamin 2011)

(4)本稿では墓番号としてTT, KVの後に来る数字についてはPoter and Moss 1960, 1964に依拠し、テーベ内遺跡名はアメンヘテプIII世王墓(KV22)報告書刊行委員会2008に依拠する。

(5)カーターのフィールドノートがグリフィス研究所で公開されており、参照先のURLは引用・参考文献欄に記載した。

(6)セリーヌの集成のうちで人へのミイラ製作に用いられた道具に限定している。

(7)こうした副葬品の収容できる面積とは異なる、王家の谷における墓自体の面積についてはカイロ・アメリカン大学によるTheban Mapping Project(https://thebanmappingproject.com/)を参照されたい。本稿でも、具体的な墓ごとの情報やプラン図を参照した場合に、墓番号と参照先のURLを引用・参考文献欄に記載している。

(8)布や包帯は各段階で使用される(Chapman 2016: 43)。しかし、死後35日目から始まるとされる包帯巻き(Shore 1992: 229-230)がミイラ製作場において中心的な行為とされるため(Chapman 2016: 43)、本稿でも包帯巻き段階に設定した。

(9)唯一出土していないカー・メリト墓ではミイラの内臓が摘出されていないことと、カノポス壺やその厨子など(canopic equipment)が必要とされないことを関連付けて指摘されている(Bianucci et al. 2015: 19)。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、早稲田大学文学学術院の近藤二郎教授、寺崎秀一郎教授には日頃から多大なるご指導をいただいた。また、金沢大学新学術創成研究機構の河合望教授、山崎世理愛氏には本稿に関連した貴重な情報を賜った。考古学研究室の諸先輩方には本稿への助言を賜った。末筆であるが感謝申し上げる。

引用・参考文献

アメンヘテプIII世王墓(KV22)報告書刊行委員会編 2008『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書［I］中央公論美術出版

河合　望 1994「新王国時代第18王朝の王墓の副葬品の組成に関する一考察」『エジプト学研究』2早稲田大学エジプト学会p61-81

河合　望 2021『古代エジプト全史』雄山閣

高橋寿光 2007「石製およびガラス製容器を模倣した彩文土器から見た第18王朝後半のディール・アル＝マディーナの絵師」『オリエント』50-2日本オリエント学会p181-203

高橋寿光 2013「青色彩文土器の破壊の意味について」『永遠に生きる: 吉村作治先生古稀記念論文集: eternal life』吉村作治先生古稀記念論文集編集委員会

高橋寿光・近藤二郎・吉村作治 2009「2006年－2007年度アメンヘテプ3世王墓出土土器概報」『エジプト学研究』15早稲田大学エジプト学会p71-92

フジテレビジョン・インターパブリカ 2012『エジプト考古学博物館所蔵　ツタンカーメン展―黄金の秘宝と少年王の真実―』フジテレビジョン

ヘロドトス 1972松平千秋訳『歴史(上)』岩波書店

北條勝喜「＜ケガレ＞をめぐる理論の展開」服藤早苗・小嶋菜温子・増尾伸一郎・戸川点『ケガレの文化史物語・ジェンダー・儀礼』森話社p7-60

ダグラス、メアリ 2009塚本利明訳『汚穢と禁忌』筑摩書房

Adel Mahmoud Abd el-Qader, Donnat, S., 2011 Catalogue of Funerary Objects from The Tomb of The Servant in The Place of Truth Sennedjem(TT1).: Ushabtis, Ushabtis in Coffins, Ushabti Boxes, Canopic Coffins, Canopic Chests, Cosmetic Chests, Furniture, Dummy Vases, Pottery Jars, and Walking Sticks, Mainly from Egyptian Museum in Cairo and Metropolitan Museum of Art of New York. Bibliothèque Générale. 37 Cairo: Institut Français d'archeologie orientale

Allen, S. J. 2000Tutankhamun's Embalming Cache Reconsiderd. In Hawass, Z.(eds.) Egyptologyat the Dawn of the Twenty-first Century Proceeding of the Eightn International Congress of Egyptologists Volume1 Archaeology.: 23-29 Cairo and New York: American University in Cairo press

Arnold, D and Bourriau, J. 1993 An introduction to ancient Egyptian pottery. Mainz am rhein: P. von zabern

Aston, D. A. 1996 Egyptian Pottery of the Late New Kingdom and Third Intermediate Period(Twelfth-Seventh centuries BC)Tentative Footsteps in a Forbidding Terrain, Studien Zur Archäologie Und Geschichte Altägyptens 13, Heidelberg: Heidelberger Orientverlag

Aston, D. A. 2003 The Theban West Bank from the Twenty-fifth Dynasty to the Ptolemaic Period. In Strudwick, N., Taylor, J. H.(eds.) The Theban Necropolis Past, Present and Future.: 138-166. London: British museum

Aston, D. A. 2011 t3 pXrt wty The Saqqara Embalmers' Caches Reconsidered; Typology and Chronology. In Aston, D., Bader, B., Gallorini, C., Nicholson, P., Buckingham, S.(eds.) Under the Potter's Tree Studies on Ancient Egypt Presented to Janine Bourriau on the Occasion of her 70th Birthday, Oriental Ia Lovaniensia Analecta 204: 45-79 Leuven, Paris, Walpole, Ma: Uitgeverij Peeters, Departement oosterse Studies

Aston, D. A. and Aston, B. G. 2010 Late Period Pottery from the New Kingdom Necropolis at Saqqara Egypt Exploration Society-National Museum of Antiquities, Leiden, Excavations 1975-1995 EES Excavation Memoir 92. London and Leiden: Egypt Exploration Society in collaboration with the national museum of antiquities Leiden

Bianucci, R., Habicht, M. E., Buckley, S. Fletcher, J., Seiler, R. Öhrström, L.M., Vassilika, E. Böni, T., Rühliet, F. J. 2015 Shedding New Light on the 18th Dynasty Mummies of the Royal Architect Kha and His Spouse Merit. PLoS ONE 10(7): e0131916. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0131916　2022年2月2日閲覧

Bickerstaffe, D. 2007 Embalming cache in the Valley of the Kings. KMT a modern journal of ancient Egypt 18-2: 46-53

Biertak, M and Reiser-Haslauer, E 1982 Das Grab des 'Anch-Hor, Obersthofmeister der Gottesgemahlin Nitokris II, Denkschriften der Gesamtakademie 7. Wien: Verlag der Österreichischen Akadademie der Wissssenschaften

Blackman, A. M. 1924 The Rock Tomb of Meir IV. London: Sold at the offices of the Egypt Exploration Fund

Borchardt, L. 1929 Bilder des, Zerbrechens der Krüge. Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde 64: 12-16

Boyer, R. S., Rodin, E. A., Grey, T. C. and Connolly, R. C. T 2003 he Skull and Cervical Spine Radiographs of Tutankhamen: A Critical Appraisal. American Journal of Neuroradiology 24-6: 1142-1147・Brier B. and Wade RS. 1997.The Use of Natron in Human Mummification. Zeitschrift fur Agyptische Sprache 124: 89-100

Brier, B. and Wade, R. S. 2005 Tools of the Ancient Egyptian Embalmers. Journal of Biological Research - Bollettino della Società Italiana di Biologia Sperimentale 8: 159-163

Bruyére, B. 1934 Rapport sur les Fouilles de Deir el-Médineh(1931-1932). Cairo: Imprimerie de L'institut Français D'archeologie Orientale

Bruyére, B. 1937 Rapport sur les Fouilles de Deir el Médineh (1933-1934). Cairo: Imprimerie de L'institut Français D'archeologie Orientale

Bruyére, B. 1959 La tombe N° 1 de Sen-Nedjem à Deir el-Médineh. Mémoires Publiés par les Membres de

l'Institut Français d'archéologie du Caire 88. Le Caire : Institut français d'archéologie orientale.

Budka, J. 2006 Deponierungen von Balsamierungsmaterial im spätzeitlichen Theben (Ägypten). Befund, Kontext und Versuch einer Deutung. In Roeder, H., Mylonopoulos, J. (eds.), Archäeologie und Ritual. Auf der Suche nach der rituellen Handlung in den antiken Kulturen Ägyptens und Griechenlands.: 85-103 Vienna: Phoibos Verlag

Carter, H. Photograph I. J. 341 unpublised, onlined in the Grifith Institutehttp://www.griffith.ox.ac.uk/gri/cc/page/photo/341.html　2022年2月4日閲覧

Carter, H. Notebook E: 18 unpublised, onlined in the Grifith Institute. http://www.griffith.ox.ac.uk/gri/cc/page/tscript/ts18a.html　2022年2月1日閲覧

Carter, H. Map K. 14. unpublised, onlined in the Grifith Institute.http://www.griffith.ox.ac.uk/gri/cc/page/map/257-69.html　2022年1月30日閲覧

Carter, H. unpublised, onlined in the Grifith http://www.griffith.ox.ac.uk/gri/carter/317b(2)-c317b-07.html2021年11月25日閲覧

Carter MSS i G3 unpublised, onlined in the Grifith http://www.griffith.ox.ac.uk/gri/gif-files/Carter_i_G_3.jpg 2022年2月3日閲覧

Carnavon and Carter, H. 1912 Five Years' Exploration at Thebes a Record of Work done 1907-1911. London, New York, Toronto, and Melbourne: Henry Frowde, Oxford university Press

Carter, H., Murray, H., Nuttall, M. 1963 Tutʿankhamūn's Tomb Series I A Handlist of Howard Carter's Catalogue of Objects in Tutʿankhamūn's Tomb. Oxford: Vivian Ridler

Carter, H. and Newberry, P. 1904 The tomb of Thoutmôsis IV,Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire No. 46001 – 46529. Westminster: Archibald Constable and Co., 2, Whiteholl Gardens.

Céline, B. A. 2007. Balsemingscachettes in het Oude Egypte: Catalogus van alle cachettes, analyse van hun inhoud en hun rol in het mummificatieproces. The degree of licentiate in Egyptology. Leuven: Catholic University of Leuven.

Chapman, S. L. 2016 The Embalming Ritual of Late Period Through Ptolemaic Egypt. Ph.D. Birmingham: University of Birmingham

Clark, K. A., Ikram, S., Evershed, R. P. 2016 The significance of petroleum bitumen in ancient Egyptian mummies. Philosophical Transactions A 374 20160229.: 1-15 http://dx.doi.org/10.1098/rsta.2016.0229　2022年2月2日閲覧

Daressy, M. G. 1902 Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire No. 24001 – 24990 Fouilles de la Vallee des Rois (1898·1899). Cairo: Imprimerie de L'institut Français D'archeologie Orientale

Davies, Norman. de Garius. 1925 The Tomb of Two Sculptors at Thebes. New York: Metropolitan Museum of Art

Davies, Norman de Garius 1973 The tomb of Rekh-mi-Rēʿ at Thebes. Publications of the Metropolitan Museum of Art, Egyptian Expedition 11. New York: Arno press

Davis, T. M. 1907 The tomb of Iouya and Touiyou. London: Archibald Constable and Co., Ltd

Davis, T. M. 1910 Excavations Bibān el Moulùk the Tomb of Queen Tîyi. London: Constable and Co., Ltd

Dawson, W.R 1927Maknig a mummy. Journal of Egyptian Archaeology 13: 40-49, pl XII

Dijk, J. v. 1986 Zerbrechen der roten Töpfe. In Helek, W. and Westendrof, W.(eds) Lexikon der Ägyptologie 6: 1389-1396. Wiesbaden: Otto Harrassowitz

Dijk, J. v. 1993 The New Kingdom Necropolis of Memphis Historical and Iconographical Studies. Ph.D. Dissertations. Groningen: University of Groningen

Dodson, A. 1994 The Canopic Equipment of the Kings of Egypt, London and New York: Kegan Paul International.

Dodson, A. and Cross, S. 2016 The Valley of the Kings in the reign of Tutankhamun. Egyptian Archaeology 48: 3-8

Eaton-Krauss, M. 2008 Embalming caches. The Journal of Egyptian Archaeology 94: 288-293

Ertman, E., Wilson, R. and Schaden, O. J. 2006 Unraveling the Mysteries of KV63. KMT a modern journal of ancient Egypt 17-3: 18-27

Faccetti, F., Ribechini, E., Betrò, M., Colombini, M. P. 2014 Oils and Embalming Balms from the Tombs TT14 and M.I.D.A.N.05 at Dra Abu el-Naga (Luxor-Egypt). Journal of Intercultural and Interdisciplinary Archaeology 1001: 39-50

Forbes, D. 2006 Mystery Tomb Found in the Valley of the Kings: A Preliminary Account of KV63's Surprising Discovery. KMT a modern journal of ancient Egypt 17-2: 28-32

Gabolde, M. 2016 Some Remarks on the Embalming Caches in the Royal Necropoleis at Thebes and Amarna. In Dijk, J. V.(eds.) Another mouthful of dust Egyptological Studies in Honour of Geoffrey Thorndike Martin Oriental Ia Lovaniensia Analecta 246: 123-140 Leuven, Paris and Bristol, ct: Peeters

Gomaa Abdel-Maksoud and Abdelrahman Elamin 2011 A Review on The Materials Used During Mummification Processes in Ancient Egypt. Mediterranean Archaeology and Archaeometry11-2: 129-150

Habicht, M. E., Bouwman, A. S. and Rühli, F. J. 2016 Identifications of Ancient Egyptian Royal Mummies from the 18th Dynasty Reconsidered. Yearbook of Physical Anthropology 159: 216–231 Washington, D.C: the American Association of Physical Anthropologists Viking Fund

Hamdy R., Fahmy A.G. 2018 Study of Plant Remains from the Embalming Cache KV63 at Luxor, Egypt. In Mercuri A., D'Andrea A., Fornaciari R., Höhn A.(eds) Plants and People in the African Past.: 40-56 https://doi.org/10.1007/978-3-319-89839-1_3 2021年10月29日閲覧

Hawass Z, Gad YZ, Ismail S, Khairat R, Fathalla D, Hasan N, Ahmed A, Elleithy H, Ball M, Gaballah F, Wasef S, Fateen M, Amer H, Gostner P, Selim A, Zink A, Pusch CM. 2010. Ancestry and pathology in King Tutankhamun's family. The Journal of the American Medical Association 303: 638–647.

Hawass Z, Ismail S, Selim A, Saleem SN, Fathalla D, Wasef S, Gad AZ, Saad R, Fares S, Amer H, Gostner P, Gad YZ, Pusch CM, Zink AR. 2012. Revisiting the harem conspiracy and death of Ramesses III: anthropological, forensic, radiological, and genetic study. BMJ 345: e8268-

Hayes, W. C. 1968 The Tomb of Neferkhēwet and his Family. The Egyptian excavation 1934-1935. Bulletin of the Metropolitan Museum of art 30-2: 17-36. New York: Arno Press.

Hays, Harold M. 2010, Funerary Rituals (Pharaonic Period). In Jacco Dieleman, Willeke Wendrich(eds.), UCLA Encyclopedia of Egyptology, Los Angeles.

Ikram, S. 2010a Mud Trays in Ancient Egyptian Mortuary Practices. Journal of the American Research Center in Egypt 46: 125-131

Ikram, S. 2010b Mummification. In Jacco Dieleman, Willeke Wendrich(eds.), UCLA Encyclopedia of Egyptology, Los Angeles.

Ikram, S. 2015 Death and Burial in Ancient Egypt. Cairo and New York: The American university in Cairo press

Ikram, S. and Dodson, A. 1998 The Mummy in Ancient Egypt Equipping the Dead for Eternity. London: Thames ＆Hudson

Ikram, S. and Grande, M. J. L- 2011 Three embalming Caches from Dra Abu el-Naga. Bulletin de L'institut Français D'archéologie Orientale 111: 205-228 Cairo: institut Français D'archéologie Orientale.

Janot, F. and Hawass, Z. 2008 The Royal Mummies: Immortality in Ancient Egypt. Cairo: The American University in Cairo(村田綾子訳、近藤二郎監修2010『ビジュアル王家のミイラ: 古代エジプトの死後の世界』日経ナショナルジオグラフィック社)

Lakomy, K. C. 2016 »Der Löwe auf dem Schlachtfeld« Das Grab KV36 und deie Bestattung des Maiherperi im Tal der Könige. Wiesbaden: Reichert

Lansing, A. and Hayes, W. C. 1968 The Museum's Excavations at Thebes. The Egyptian Expedition 1935-1936. Bulletin of the Metropolitan Museum of art 32-1-2: 4-39. New York: Arno Press.

Leek, F. F. 1972 The Human Remains from the Tomb of Tut'Ankhamen. Oxford: Griffith Institute

Leek, F. F. 1977 How old was Tutʿ Ankhamūn? The Journal of Egyptian Archaeology 63: 112-115, Plate XIX・Lucas, A. 1908 In Quibell, M. J. E.(eds.) Catalogue General des Antiquités Égyptiennes du Misée du Caire Nos 51001-51191 Tomb of Yuaa and Thuiu.: 75-77. Cairo: Imprimerie de L'institut Français D'archeologie Orientale

Meskell, L. 1999 Archaeologies of Life and Death. American Journal of Archaeology 103-2: 181-199

Morimoto, I., Naito, Y., Hirata, K., Wakebe, T. 1986 Ancient Human Mummies from Qurna, Egypt Studies in Egyptian Cultures 4 Tokyo: Waseda University

Meigs, A. S. 1978 A Papuan Perspective on Pollutio. Man, New Series 13-2: 304-318

Mond, M. R. 1904 Report on Work Done the Gebel Esh-Sheikh Abd-El-Kurneh at Thebes, January to March1903. Annales du Service des Antiquités de l'Égypte 5: 97-104 Cairo: Imprimerie de L'institut Français D'archeologie Orientalede

Orsenigo, C. 2017 Revisiting KV36 The Tomb of Maiherpri. KMT: a modern journal of ancient Egypt.28-2: 22-

38

Polz, D. 1993 Bericht über die 2. und 3. Grabungskampagne in der Necropole von Dra‘ Abu el-Naga/Theben-West. Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo 49: 227-238, Tafeln 41-44S

Poter, B. and Moss, R. L. B. 1960 Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs, and Paintings I. The Theban Necropolis Part1. Private Tomb. Oxford: Griffith institute, Ashmolean Museum

Poter, B. and Moss, R. L. B. 1964 Topographical Bibliography of Ancient Egyptian Hieroglyphic Texts, Reliefs, and Paintings I. The

Theban Necropolis Part2. Royal Tombs and Smaller Cemeteries. Oxford: Griffith institute, Ashmolean Museum

Quibell, M. J. E. 1908 Catalogue General des Antiquités Égyptiennes du Misée du Caire Nos 51001-51191 Tomb of Yuaa and Thuiu. Cairo: Imprimerie de L'institut Français D'archeologie Orientale

Reeves, N. 1990a Valley of the kings. The Decline of a Royal Necropolis. London: K. Poul Intetnationl

Reeves, N. 1990b The Complete Tutankhamun: The King・The Tomb・The Royal Treasure. London: Thames and Hudson(近藤二郎訳1993『図説黄金のツタンカーメン: 悲劇の少年王と輝ける財宝』原書房)

Reeves, N. and Wilkinson, R. 1996 The Complete Valley of the Kings Tombs and Treasure of Egypt's Greatest Pharaohs. London: Thames＆Hudson(近藤二郎訳1998『図説王家の谷百科：ファラオたちの栄華と墓と財宝』原書房)

Rosellini, I. 1834 I Monumenti dell Egitto e Della Nubia. Pisa: presso Niccolò capurro e C.M D

Saleem, S. N. and Hawass, Z. 2013 Variability in BrainTreatment During Mummification of Royal Egyptians Dated to the 18th–20th Dynasties: MDCT Findings Correlated with the Archaeologic Literature. American Journal of Roentgenology 200-4: W336-344

Schaden, O. J. 2007 KV 63: An update. The Final Stages of Clearances. KMT a modern journal of ancient Egypt 18-1: 16-25

Schaden, O. J.2009 KV63 2009 Season. KMT a modern journal of ancient Egypt 20-3: 18-29

Schiaparelli, E. 1927 La Tomba Intatta dell'Architetto Kha Nella Necropoli di Tebe. Turin: AdArte. Revived in 2007

Seiler, R., Ruhli, F. 2015 “The Opening of the Mouth” —A New Perspective for an Ancient Egyptian Mummification Procedure. The Anatomical Record 298.:1208–1216

Shaw, I. 2000 The Oxford History of Ancient Egypt. Oxford: Oxford university press

Shore, A. F. 1992. ‘Human and divine mummification’, In A. B. Lloyd (ed.), Studies in pharaonic religion and society in honour of J. Gwyn Griffiths. London: Egypt Exploration Society 226-235.

Smith, G. E. 1906 A contribution to the study of mummification in Egypt with special reference to the measures adopted during the time of the 21st dynasty for moulding the form of the body. Mémoires présentés à l'Institut égyptien 5-1. LeCairo: Imprimerie Nationals

Smith, G. E. 1912. The Royal Mummies. Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire. Cairo: Impr. de l’Inst. Français d’Archéolgie Orientale

Smith, S.T. 1992 Intact Tombs of the Seventeenth and Eighteenth Dynasties from Thebes and the Kingdom Burial System. Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo 48: 193-231.

Sudhoff, K. 1911 Agyptische Mummienmacher-Instrumente. Archiv für Geschichte der Medizin 5: 161-172

Spiegel, J. 1971 Das Auferstehungsritual der Unas-Pyramide: Beschreibung und erläuterte Übersetzung Ägyptologische Abhandlungen 23 Wiesbaden: O. Harrassowitz

Strudwick, N. and Taylor, J. H. 2003 The Theban Necropolis: Past, Present, and Future. London: British Museum

Töpfer 2015 Theory and Practice/Text and Mummies:The Instructions of the ‘Embalming Ritual’ in The Light of Archaeological Evidence. In Kóthay, K. A.(eds.), Burial and Mortuary Practices in Late Period and Graeco-Roman Egypt, Proceedings of the International Conference held at Museum of Fine Arts, Budapest, 17–19 July 2014: 23-34. Budapest: Museum of Fine Arts

Vassilika, E. 2010 The tomb of Kha: The Architect. Firenze: Scala.

Walker, W. H. 1995a Ritual prehistory: a Pueblo case study.

Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Arizona, Ann Arbor: University Microfilms.

Walker, W. H.1995b “Ceremonial trash?” In Skibo, J. M., W.H. Walker, & A.E. Nielsen(eds.), Expanding Archaeology.: 67-79, Salt Lake City: University of Utah Press

Weinstein, J. M. 1973 Foundation Deposits in Ancient Egypt., Ph.D. University of Pennsylvania, History, archaeology. Ann Arbor: University Microfilms.

Winlock, H. E. 1968a. The Egyptian Expedition 1918-1920: II excavations at Thebes 1919-1920. Bulletin of the Metropolitan Museum of Art 15: 12-32. New York: Arno Press.

Winlock, H. E. 1968b. The Egyptian Expedition 1921-1922: excavations at Thebes. Bulletin of the Metropolitan Museum of Art 17 (12.2): 19 -49. New York: Arno Press.

Winlock, H. E. 1930 A Late Dynastic Embalmer’s Table. Annales du Service des antiquités de l'Égypte 30. Le Caire: Service des antiquités de l'Égypte

Winlock, H. E. 1973Materials Used at the Embalming of King Tut-‘Ankh-Amun. New York: Arno Press. Reprint edition, copyright by The Metropolitan Museum of Art 1941

Winlock, H. E. and Arnold, D. 2010Tutankhamun’s Funeral. New York: The Metropolitan Museum of Art; New Haven and London: Yale University

Metropolitan museum of art online catalogue

Object No. 09.184.1

httpswww.metmuseum.orgartcollectionsearch548837 2021年10月30日閲覧

The American University in Cairo Theban mapping Project

KV 08 Merenptah

http://thebanmappingproject.com/sites/default/files/plans/KV08_0.pdf 2022年1月21日閲覧

KV 17 Sety I

https://thebanmappingproject.com/sites/default/files/plans/KV17_1.pdf 2022年1月21日閲覧

KV 36 Maiherperi

https://thebanmappingproject.com/index.php/tombs/kv-36-maiherperi 2022年1月21日閲覧

KV 46 Yuya and Thuyu

https://thebanmappingproject.com/index.php/tombs/kv-46-yuya-and-thuyu 2021年1月21日閲覧

http://thebanmappingproject.com/sites/default/files/plans/KV44-46_0.pdf 2021年1月20日閲覧

KV 54 Tutankhamen cache

https://thebanmappingproject.com/sites/default/files/plans/KV50-54_0.pdf 2021年1月21日閲覧

KV62 Tutankhamen

http://thebanmappingproject.com/sites/default/files/plans/KV62_1.pdf 2021年1月21日閲覧

https://thebanmappingproject.com/index.php/tombs/kv-62-tutankhamen 2022年1月20日閲覧

KV 43 Thutmes IV

https://thebanmappingproject.com/index.php/tombs/kv-43-thutmes-iv 2022年1月21日閲覧

https://thebanmappingproject.com/sites/default/files/plans/KV43_1.pdf 2022年1月20日閲覧

Valley of the kings

http://thebanmappingproject.com/sites/default/files/plans/Valley%20of%20the%20Kings.pdf 2022年1月21日閲覧

The Grifith Institute

http://www.griffith.ox.ac.uk/ 2022年2月3日閲覧

http://www.griffith.ox.ac.uk/discoveringTut/ 2022年2月3日閲覧

図版出典

第１図　アメンヘテプIII世王墓(KV22)報告書刊行委員会 2008: 2　一部加筆

第２図　アメンヘテプIII世王墓(KV22)報告書刊行委員会 2008: 4　一部加筆

第３図　The America University in Cairo Theban Mapping Project, Valley of the kings　一部編集

第４図　Poter and Moss 1960: 494, 499, 501を基に一部加筆して作成

第５図　Ikram 2010a: 127一部編集

第６図　Ertman et al. 2006: 21

第７図　Carter Photograph I. J. 341

第８図　Winlock1930: 103; Winlock 1968b: 42; Biertak, and Reiser-Haslauer 1982: 192を基に一部編集、加筆して作成

第９図　Rosellini 1834 Plate. CXXVL　一部編集および加筆

第10図　Smith 1912: Plate. XL, XLI, XLVII, XLVIII, Quibell 1908: Plate LVII, LVIII, LIX, LX, Saleem and Hawass 2013: W339-341を基に一部編集して作成

第11図　Hayes 1968: 24; Lansing and Hayes 1968: fig1; Lakomy 2016: 53 Smith 1992: 226, Carnavon and Carter 1912: Plate LV; Bruyére 1959: PL VI; Quibell 1908: IV; Reeves 1996: 50とCarter MSS i G3の再ト

レースを基に一部編集、加筆して作成
第12図　筆者作成

第１表　Shaw 2000: 479-482;河合2021: 277-281を基に筆者作成
第２表　筆者作成
第３表　筆者作成
第４表　筆者作成
第５表　筆者作成

論文

溯航　第40号　29-45頁　2022年2月
早稲田大学大学院文学研究科考古談話会編集・発行

関東・東北古代寺院の伽藍配置とその展開

—「金堂前面の儀礼空間」の分析から—

高橋　亘

要旨

6世紀中ごろの仏教公伝以来、日本全国に仏教寺院が造営される。寺院は、塔や金堂などの複数の建物によって伽藍を形成する。この建物同士の相対的位置関係を伽藍配置と呼び、古くから研究されてきた。しかしその研究の中心は、宮都周辺の中央寺院の形式分類であり、中央から地方への伽藍の波及や展開を説明するには至っていない。そこで本稿では、関東・東北の古代寺院を事例に「金堂前面の儀礼空間」という視点から、伽藍配置の定量的な分析を行った。分析から、中央寺院の伽藍配置が「金堂前面の儀礼空間」を拡張する方向で変遷していく様相を明らかにした。また、中央寺院と関東・東北の伽藍を比較することによって、日本古代寺院の展開の一端を解明できた。

キーワード：古代寺院、伽藍配置、関東、東北、金堂

はじめに

日本に仏教が伝来した所謂「仏教公伝」は、年代について様々な説があるが、概ね6世紀中ごろであったと考えられている。以来仏教は、日本の文化と密接な関係にあり、当該期の仏教文化の解明は、日本古代社会の理解に必要不可欠である。寺院において、伽藍は宗教実践の場であり「伽藍配置の変化には何がしかでも教理上の理由が存在するはず」（森 1991）と考えられてきた。特に伽藍配置と呼ばれる、寺院の中心的建物とその相対的位置関係、空間構造については、先学の膨大な蓄積がある。しかし、伽藍配置研究の主眼はあくまでも畿内や宮都周辺など（これら、畿内・宮都周辺の地域を以下「中央」、この地域に位置する寺院を以下「中央寺院」と呼称する。）にあり、地方の様相や寺院の波及を明らかにするには至っていない。

そこで本稿では、東国と東北の伽藍配置を事例に、飛鳥・奈良時代の仏教文化の受容と展開についてその一端を解明することを目的とする。

1．飛鳥・奈良時代の伽藍配置研究

1－1．飛鳥・奈良時代の伽藍配置研究の現状

日本古代の伽藍配置について初めて考古学的に言及したのは、石田茂作である。石田は、畿内の古代寺院を中心に日本古代の伽藍配置を整理し、その系譜を示した（石田 1956）。また、角田文衛は全国の国分寺を集成し、国分寺伽藍配置について言及した（角田編 1938、1996、1997など）。このような黎明期の研究では、塔が回廊内から回廊外に徐々に移っていくという伽藍配置の変化の要因について、舎利信仰（塔）から仏像信仰（金堂）への変化の表れと捉えており、以降通説となっている。

上原真人は、発掘事例の増加によって判明した多様な伽藍配置を通時的に整理し、分類を行った（上原 1986）。上原は、金堂前面の儀礼空間の確保という方向で、官大寺の伽藍が変遷していくことを指摘した。その結果、回廊外に塔が移っていったと解釈し、上述の通説に疑問を呈している。森郁夫や菱田哲郎は、伽藍配置の変化の要因を国家政策や宗教観に求め、護国仏教と伽藍配置の関係性を論じた（森 1991・1998、菱田 2005）。

近年は、韓国での発掘増加に伴って活発化した朝鮮半島と日本の伽藍の比較研究（清水 2006、三舟 2017など）や、国分寺の伽藍に関する研究（山路 1994、須田・佐藤編 2011、網 2014）、法起寺式伽藍配置を整理する研究（貞清 2013・2020）などが見られる。

伽藍配置は、寺院の遺構研究の中心的な視点であり、古代の仏教観の解釈など、一定の成果を挙げた。しかし近年は、山路直充による寺院の空間構成の研究や、梶原義実による景観地の研究など（山路 2011、梶原 2017）、伽藍配置以外の視点が目立っており、三舟が「日本における古代寺院の伽藍配置研究は停滞している」（三舟 2017）と指摘するように、伽藍配置研究は下火になっている。

１－２．飛鳥・奈良時代の伽藍配置研究の課題

これまで、伽藍配置研究は分類研究が中心であり、発掘事例の増加と再分類というサイクルによって研究が進んできた。こうした先学の蓄積により、飛鳥・奈良時代の伽藍配置は、ある程度様相が明らかになっている。しかし、中央寺院を中心とした伽藍配置研究は分類に終始しており、通時的・系統的な研究が少ない。特に、中央寺院よりも伽藍配置が多様な地方寺院には、分類に当てはまらないものも散見されるため、中央から地方への寺院の波及を説明するには至っていない。

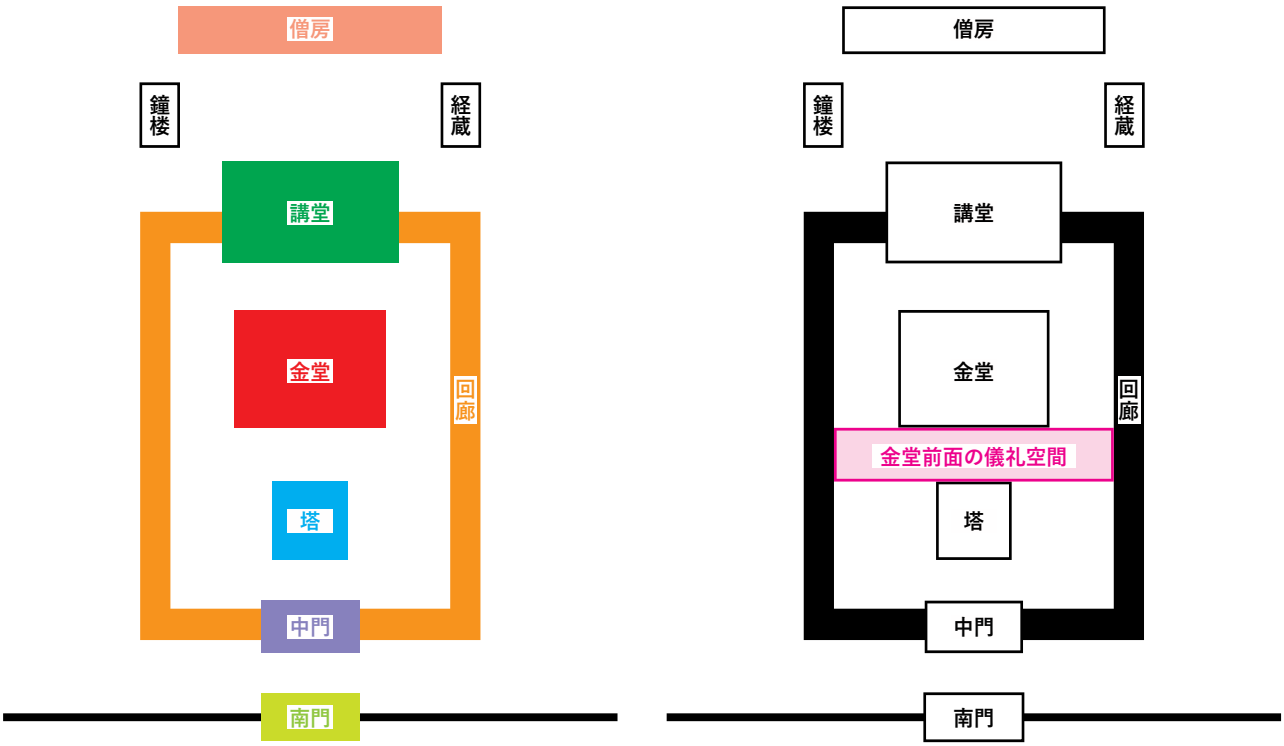
そこで本論では、伽藍形式に左右されない、定量的な分析を行う。まず従来の伽藍形式の指標となる中央寺院の伽藍配置の変遷傾向を定量的に分析する。そのうえで、関東・東北を事例に地方寺院への波及に関して考察する。

１－３．本論の分析視角

日本古代伽藍配置の変遷傾向を示した数少ない視点の１つに、上原真人の「金堂前面の儀礼空間」に関する指摘がある（上原 1986）。上原は、日本古代の伽藍配置は金堂の前面（大半の金堂は南、南北棟の金堂の場合は東）を拡張する方向で変遷していき、国分寺などにその傾向が顕著なことを指摘した。この指摘は、飛鳥・奈良時代の伽藍配置の変遷傾向を整理するうえで、非常に重要な視点であるものの、批判や検討の対象として扱われることが少ない。そこで本論では、この「金堂前面の儀礼空間」に再度着目し、定量的な分析を通して再検証する。

また、伽藍形式と「金堂前面の儀礼空間」の関係を見出すために、中央寺院のうち、伽藍形式の指標となっている寺院の「金堂前面の儀礼空間」の変遷を示す。さらに、東国と東北の代表的な寺院に対しても同じ分析を行い、中央寺院と比較する。これにより、上原の視点を再検証するだけでなく、伽藍形式の変遷原理の解明、中央から地方への伽藍の伝播の様相の解明を目指す。

なお、上原は「金堂前面の儀礼空間」について、『続日本紀』の東大寺大仏開眼会の記事から、平城宮大極殿前庭に類似した機能を推定しているほか、金堂前で儀礼を行ったことが記されている『諸寺供養類記』の法勝寺総供養（1077年）の記事を引用し、儀礼空間の機能を説明している。しかし、これらの指摘は文献からの類推であり、現段階では考古学的に証明することが難しい。よって、本論では既往研究を踏襲し「金堂前面の儀礼空間」という用語を用いるが、儀礼空間の機能や実態につ



第１図　古代の伽藍主要堂塔（四天王寺式）と「金堂前面の儀礼空間」

いては言及しない。また、「金堂前面の儀礼空間」を、「回廊に囲まれた金堂前面の空間のうち、いずれの建物も存在せず、またその他の建物の前面と干渉しない空間。」と定義する（第１図）。

２．「金堂前面の儀礼空間」の分析

２－１．分析の方法

従来の伽藍配置研究は、形式を端的に示した模式図や復元図などを用いた分析が多い。しかし、本論では「金堂前面の儀礼空間」について定量的な分析を行うため、主に調査図面を用いる。

対象の寺院に対して、A（回廊内の面積）、B（「金堂前面の儀礼空間」）、C（Aに対してのBの占有率）を以下の方法で算出する。調査図面のうち、測地系の記載があるものはGISソフトEsri社Arc-GISにインポートし、ジオリファレンスを行う。その後、Arc-GIS内の「面積計算」機能を用いて、それぞれの面積を算出する。測地系の記載がないものについては、Adobe Illustratorを用いて縮尺を合わせ、各面積を算出する。

上述の作業を経て、それぞれを棒グラフ・表に示し検討を行う。

２－２．分析の対象

分析の対象となる寺院について、中央寺院と関東・東北の寺院に分け、以下にそれぞれ推定創建年代順に示した。

（１）中央寺院（第２図）

中央寺院のうち、従来「○○寺式」と呼称されてきた、伽藍形式の標式となっている７寺院を、本論の主な分析対象とした。

【飛鳥寺】（第３図－１）

飛鳥寺（奈良国立文化財研究所 1958）は、七堂伽藍を備えた日本で最初の本格寺院である。587年に蘇我氏の氏寺（法興寺）として発願されたと考えられている。伽藍中軸線上に中金堂・塔を配し、塔の左右に西金堂・東金堂をそれぞれ南北棟で配置した、１塔３金堂形式と呼ばれる伽藍配置をとる。朝鮮半島に類例が認められる（鈴木2010など）ものの、日本でこの伽藍形式をとるのは飛鳥寺のみである。

【四天王寺】（第３図－２）

飛鳥寺造営後、次に出現したのは四天王寺式伽藍配置である。四天王寺（文化財保護委員会 1967）に代表される伽藍配置で、北に金堂・南に塔を、いずれも伽藍中軸線上に配する１塔１金堂形式の伽藍配置である。扶余周辺に類例が多く見られることから、百済の影響で成立した考えられている（網 2018、韓・賈 2014など）。

四天王寺は、620年頃に創建されたと考えられており、この頃に創建された山田寺（文化財研究所奈良文化財研究所 2002）や法隆寺若草伽藍（法隆寺発掘調査概報編集小委員会 1983）なども四天王寺式伽藍配置である。また、この伽藍配置は畿内周辺の地方寺院にも一定数採用されており、小規模の波及が想定されるが、全国的な波及は見られない。

【法起寺】（第４図－３）

四天王寺創建直後には、法起寺・法隆寺式伽藍配置が現れる。両伽藍は、東西に塔と金堂を並置する伽藍配置で、特に西に金堂、東に塔を配置する伽藍配置を法起寺寺式伽藍配置と呼ぶ。初源は法起寺（奈良県立橿原考古学研究所 1996）であり、640年頃に建立された。

法起寺式・法隆寺式伽藍配置は、一定期間畿内の主要寺院で採用されるが、その後すぐに見られなくなる。一方、造寺活動の活発化に伴い、地方寺院では広く受容され、９世紀に至るまで全国で普遍的に採用される。特に、法隆寺式に比べて法起寺式は地方に多く分布することが知られており、近年ではその性格に言及する研究や全国の事例を整理する研究も見られる（菱田 2005、貞清 2020など）。

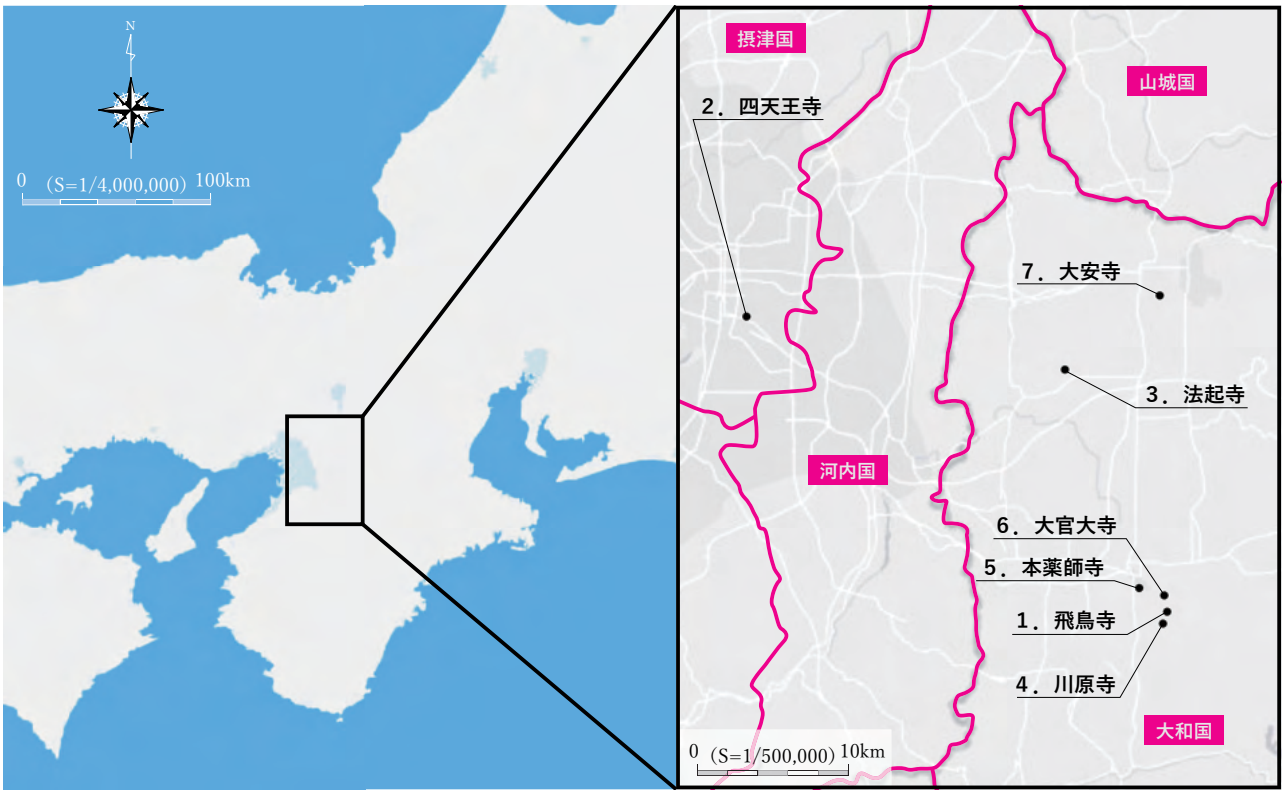
なお、法起寺式伽藍配置と同時期に登場した法隆寺式伽藍配置については、その初源である吉備池廃寺（文化財研究所奈良文化財研究所 2003）や標式である法隆寺西院伽藍の様相が明らかでないため、今回は分析の対象としていない。

【川原寺】（第４図－４）

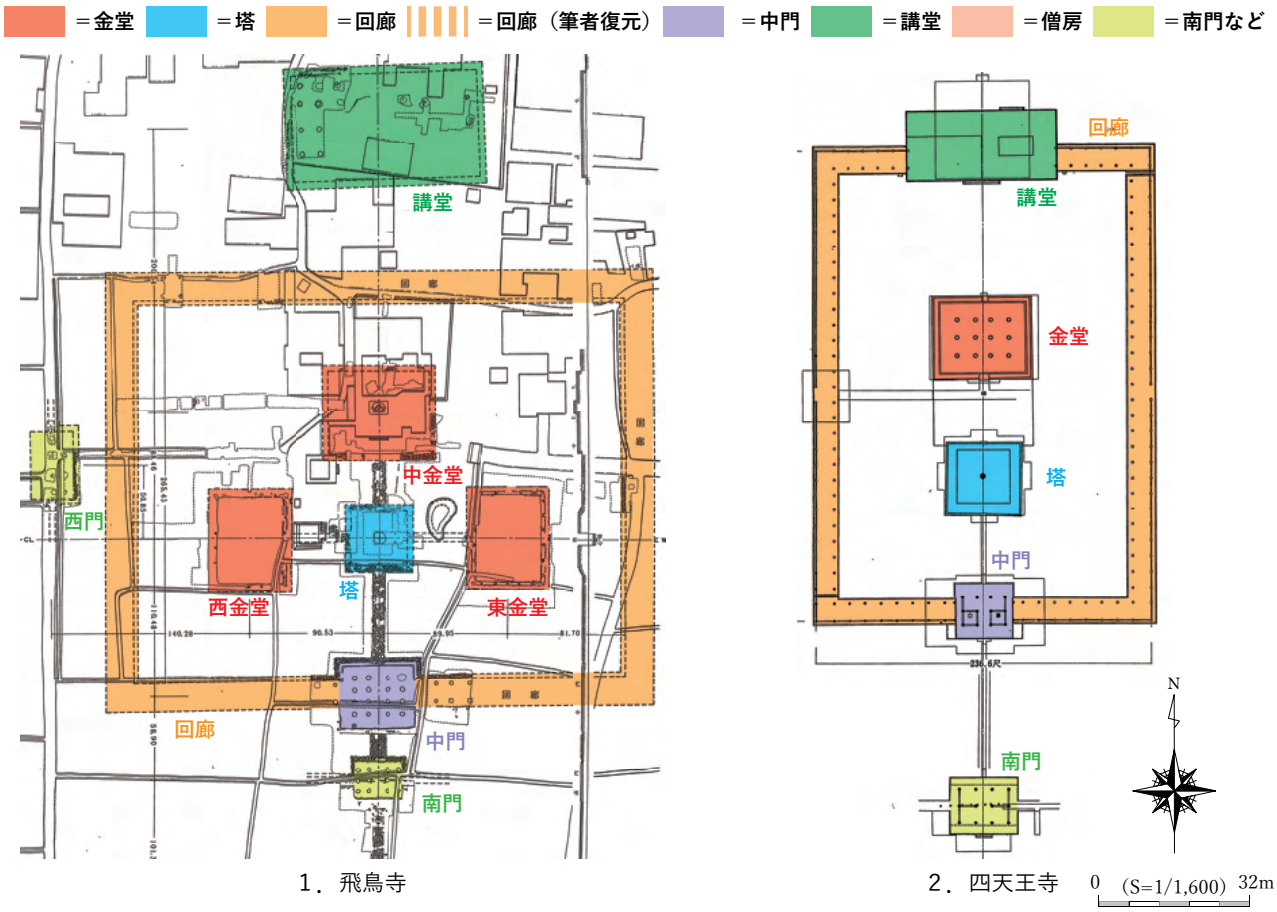
７世紀前半に登場した塔と金堂を並置する伽藍配置（法起寺・法隆寺式）のうち、金堂を南北棟に据えて西金堂とし、伽藍中軸線上に中金堂を備える１塔２金堂式の伽藍を川原寺式伽藍配置と呼ぶ。

川原寺（奈良国立文化財研究所 1960）は660年頃の創建が推定されている、飛鳥四大寺に数えられる大寺であるが、『日本書紀』などの史料に記載が少なくその性格は不明である。この川原寺式伽藍配置は、天智天皇によって遷都された大津京（667年）に同じく１塔２金堂式で建立された南滋賀町廃寺（滋賀県教育委員会 1978、林2001）に類例が見られる程度である（なお、西金堂は南北棟ではない可能性も指摘されている）。

同時期に、川原寺式伽藍配置の中金堂を講堂に置き換えた観世音寺式伽藍配置も登場した。大津京の崇福寺（林 2001）や後期穴太廃寺（大津市教育委員会 2018）を嚆矢とし、筑紫観世音寺（九州歴史資料館 2007）や

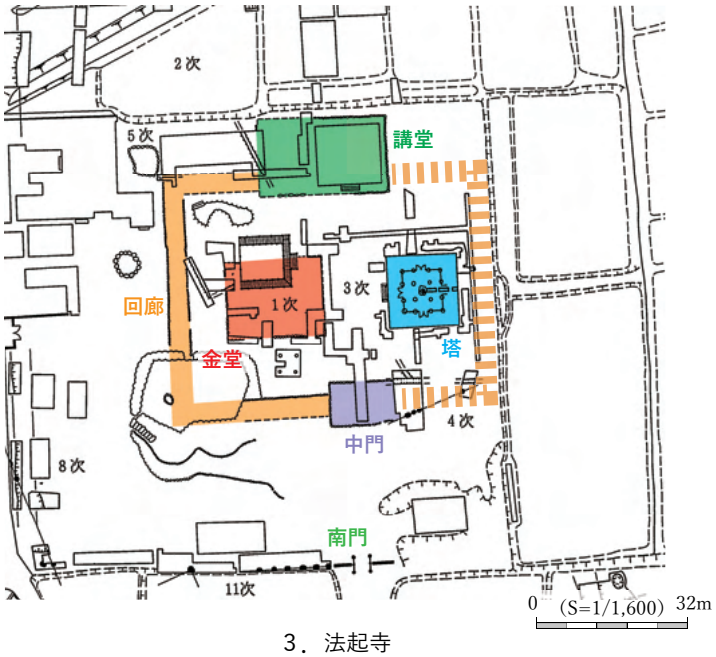


第２図　本論で扱う中央寺院の位置

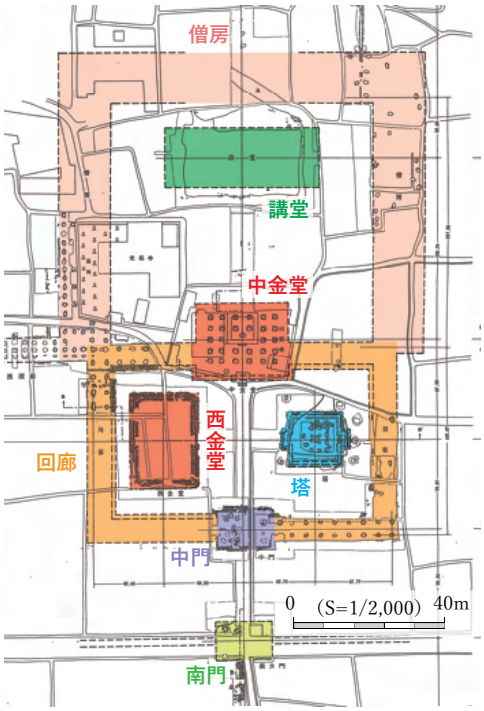


１．飛鳥寺　　２．四天王寺

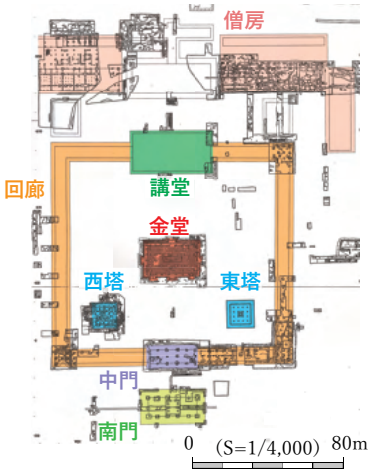
第３図　本論で扱う中央寺院の伽藍配置①



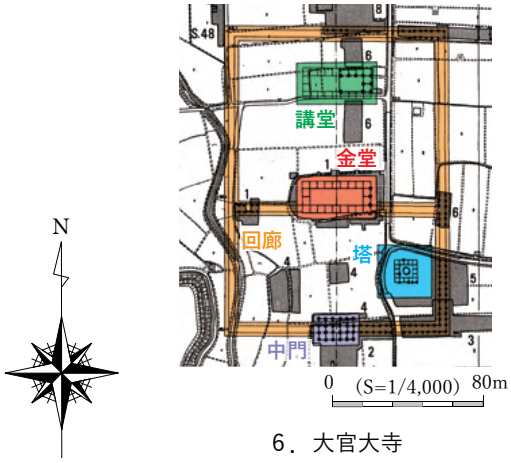
3．法起寺



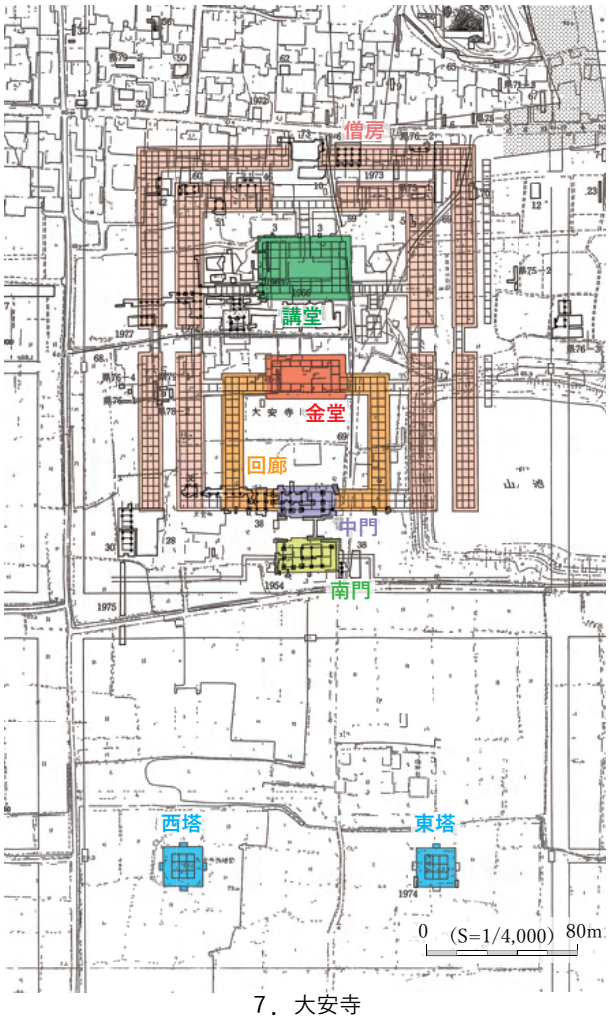
4．川原寺



5．本薬師寺



6．大官大寺



7．大安寺

第４図　本論で扱う中央寺院の伽藍配置②

多賀城廃寺（宮城県教育委員会・多賀城町 1970）など、地方寺院にもみられる。この観世音寺式伽藍配置について、分布や性格から、鎮護国家的な思想を有する「官寺」とする指摘もある（貞清・高倉 2010）。

【本薬師寺】（第４図－５）

680年頃、天武天皇によって発願された本薬師寺（花谷1997、奈良文化財研究所 2015）が藤原京内に建立された。本薬師寺は金堂の南に２塔を構える２塔１金堂式の伽藍で、薬師寺式伽藍配置と呼ばれる。この双塔伽藍は、これ以前の日本では見られない。一方、感恩寺（金・尹 1961）など、新羅に類例が見られるほか、遺構は未確認であるものの中国の文献に双塔伽藍の記載が見られることなどから、薬師寺式伽藍配置は、大陸からの影響で成立したと理解されている（森 1991、甲斐 2006、向井 2019など）。平城遷都後も京内に薬師寺（奈良国立文化財研究所 1987）が薬師寺式伽藍配置で創建されたほか、百済寺（枚方市文化財研究調査会 2015）など、畿内周辺の地方寺院で数例認められる（上原 2015）。

【大官大寺】（第４図－６）

７世紀末には、藤原京内に大官大寺（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1983）が造営される。金堂の南かつ伽藍中軸線より東に塔を配置する１塔１金堂式の伽藍配置で、大官大寺式伽藍配置と呼ばれる。『扶桑略記』には建設途中に火災で焼失したことが記載されており、伽藍は未完成だったと考えられている（大安寺史編集委員会 1984）。同時期には類例がほとんど見られないが、８世紀中葉から国分寺で一定数採用される伽藍配置である。

【大安寺】（第４図－７）

710年に平城京が遷都されると、京内には官寺が次々と建立される。そのひとつである大安寺（奈良市教育員会 1997）は、藤原京大官大寺から法灯を継いだといわれており、回廊外南に塔を２基配置する伽藍配置をとる。この２基の塔は、それぞれ回廊に囲まれた「塔院」を形成する。この大安寺式伽藍配置は、東大寺（東大寺 2020、鶴見 2021）、西大寺（奈良市埋蔵文化財調査センター 2013）など、平城京内の官寺に多く見られる。

（２）関東・東北の寺院（第５図）

関東・東北の古代寺院のうち、主要堂塔（特に回廊、金堂、塔）の様相が判明している14寺院を、本論の主な分析対象とした。なお、対蝦夷政策や護国仏教など中央から影響を受けたと考えられていることから、東国に隣接する陸奥国（出羽国）の寺院も対象としている。また国分寺の伽藍形式については、回廊と塔の位置関係から整理した網伸也の分類（網 2014）を用いる。

【山王廃寺】（第６図－１）

上野国群馬郡に位置する、７世紀第Ⅲ四半期に創建された関東最古級の寺院で、法起寺式伽藍配置をとる（前橋市教育委員会 2012）。周囲には、総社古墳群や、上野国分寺、上野国府などが位置しており、山王廃寺周辺は古墳時代から奈良時代にかけて上野国の中枢域であったと考えられる。

【上植木廃寺】（第６図－２）

上野国佐位郡に位置する７世紀後半に創建された寺院で、大官大寺式伽藍配置と左右対称（塔が西に位置する）になる変則的な伽藍配置をとる（伊勢崎市教育委員会 2009）。寺院の南には、八角正倉をもつ佐位郡家が位置する。

【茨城廃寺】（第６図－３）

常陸国茨城郡に位置する７世紀後半に創建された寺院で、法隆寺式伽藍配置をとる（石岡市教育委員会 2018）。南西には、茨城郡衙に比定される外城遺跡が位置する。

【新治廃寺】（第６図－４）

常陸国新治郡に位置する８世紀初頭に創建された寺院で、金堂の左右に塔が１基ずつ並置する、特殊な伽藍配置をとり、新治廃寺式伽藍配置とも呼ばれる（高井 1988）。南東には、新治郡衙が位置する。

【多賀城廃寺】（第６図－５）

陸奥国に位置する８世紀第Ⅰ四半期に創建された寺院で、観世音寺式伽藍配置をとる（宮城県教育委員会・多賀城町 1970）。陸奥国府である多賀城に隣接し、国府とほぼ同時期に建立されたと考えられている。

【下野薬師寺】（第７図－６）

下野国河内郡に位置する７世紀末に下毛野一族の氏寺として創建された寺院で、８世紀前半に官寺へと改修された（国士舘大学文学部考古学研究室 2004）。塔を伽藍の中心に置き、その北に品字状に３つ金堂を配する特殊な伽藍配置である。761年には、淳仁天皇の詔により日本三戒壇のうちの1つが下野薬師寺に設置された。

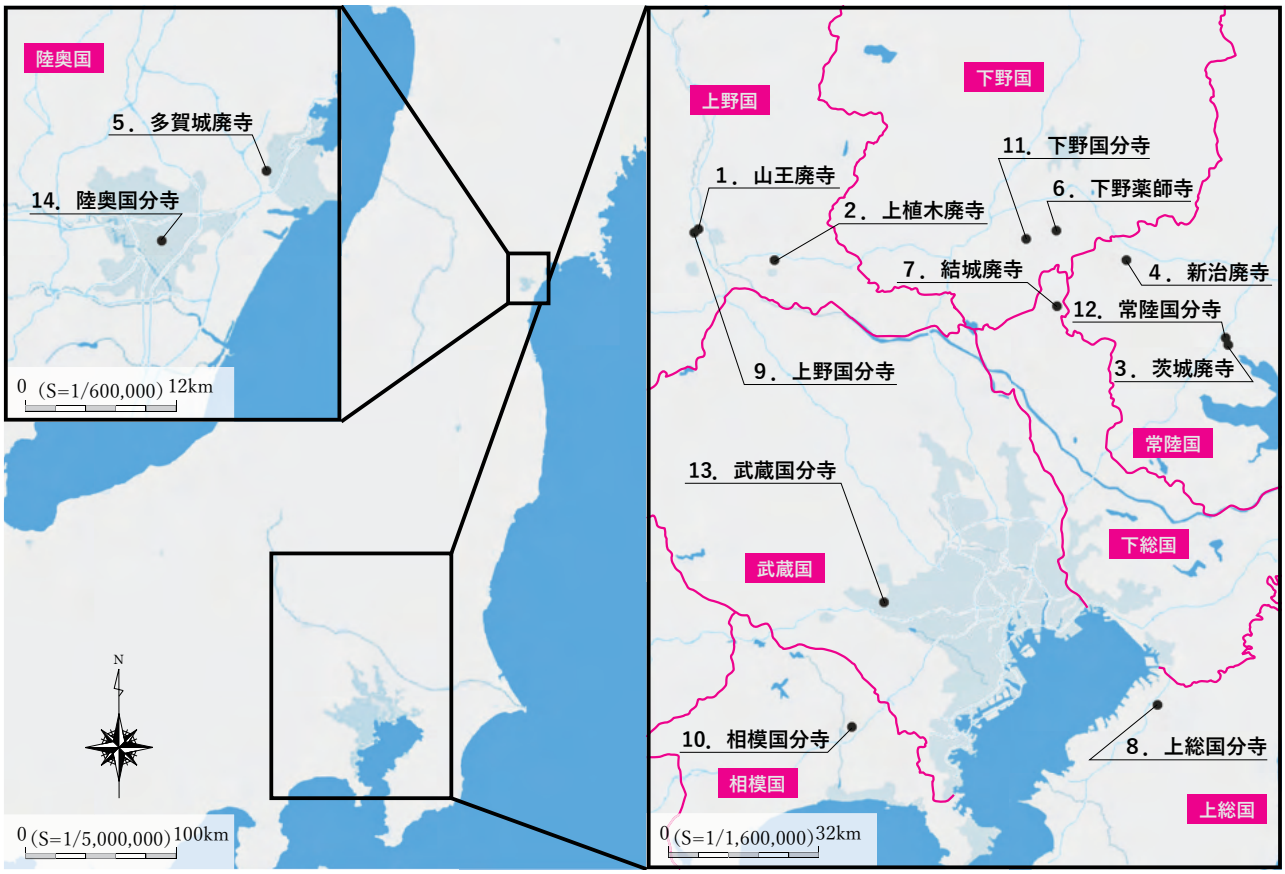
なお、本論では官寺化に伴って伽藍が改修・整備された8世紀代の伽藍配置（須田 2012）を用いて分析を行う。

【結城廃寺】（第７図－７）

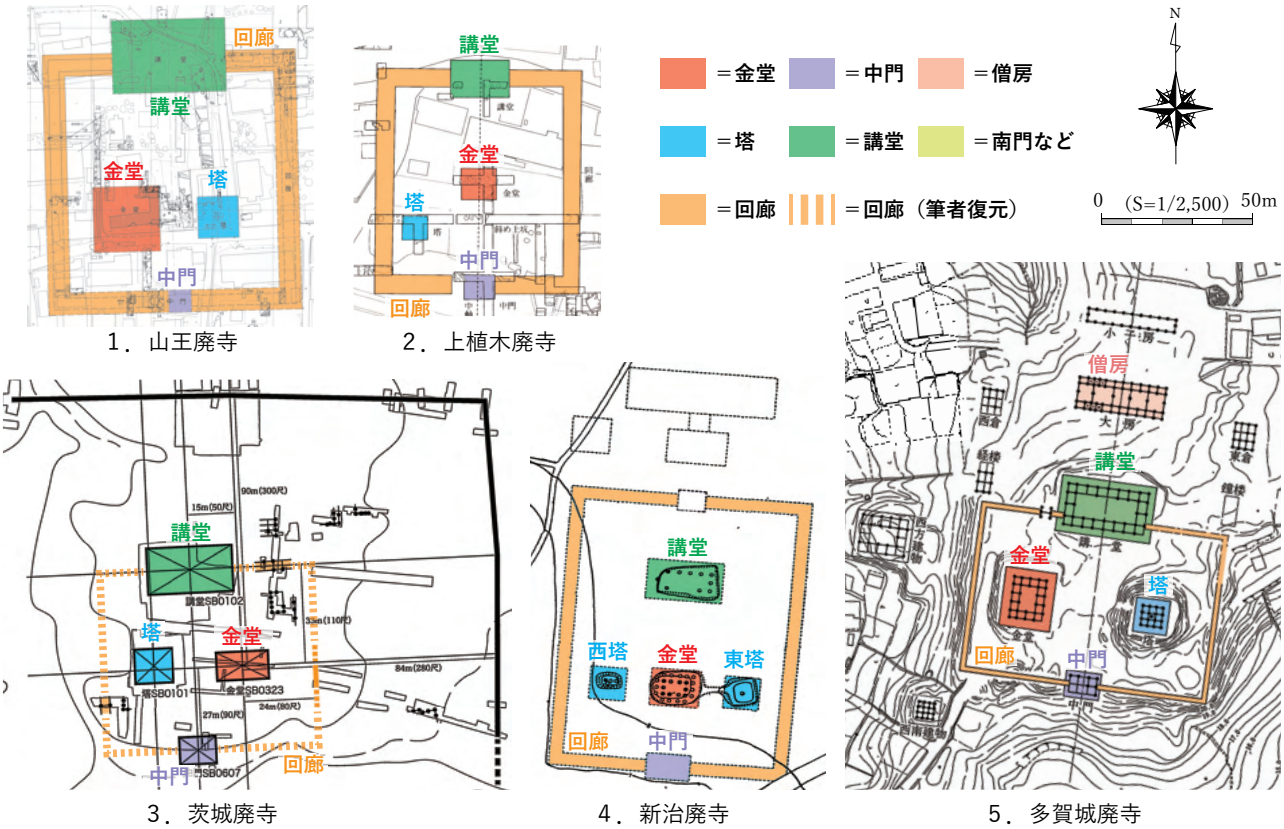
下野国結城郡に位置する８世紀第Ⅱ四半期に創建された寺院で、法起寺式伽藍配置をとる（結城市教育委員会 1999）。北東には、結城八幡瓦窯が位置する。

【諸国国分寺】

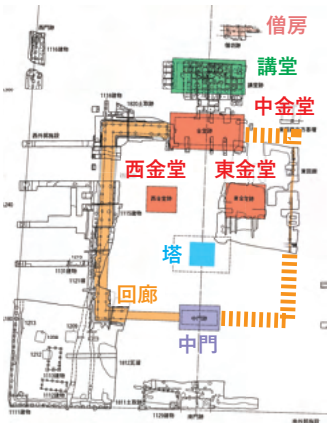
741年に聖武天皇によって、国分寺造営の詔が発布さ



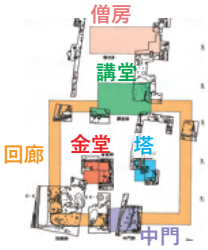
第５図　本論で扱う関東・東北寺院の位置



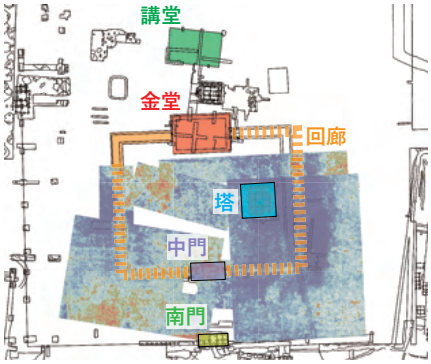
第６図　本論で扱う関東・東北寺院の伽藍配置①



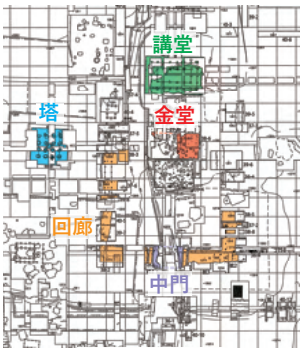
6．下野薬師寺



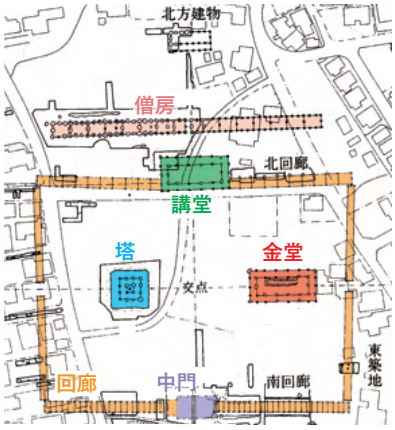
7．結城廃寺



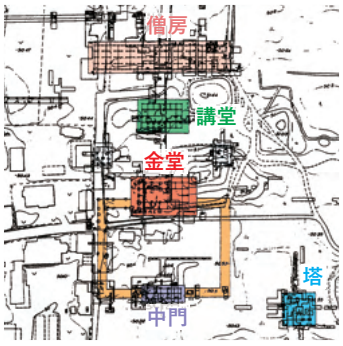
8．上総国分寺



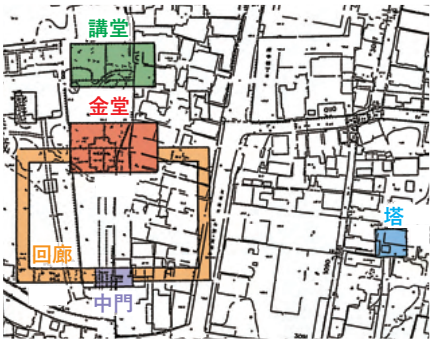
9．上野国分寺



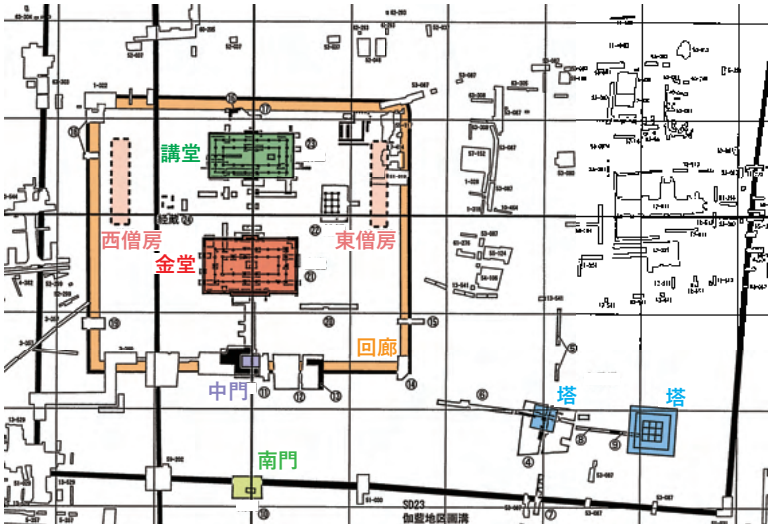
10．相模国分寺



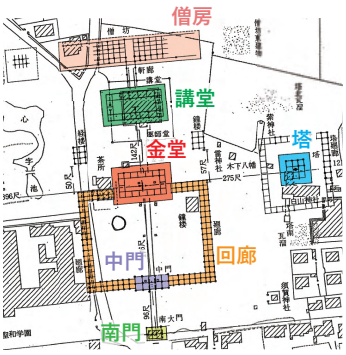
11．下野国分寺



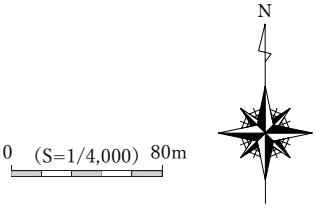
12．常陸国分寺



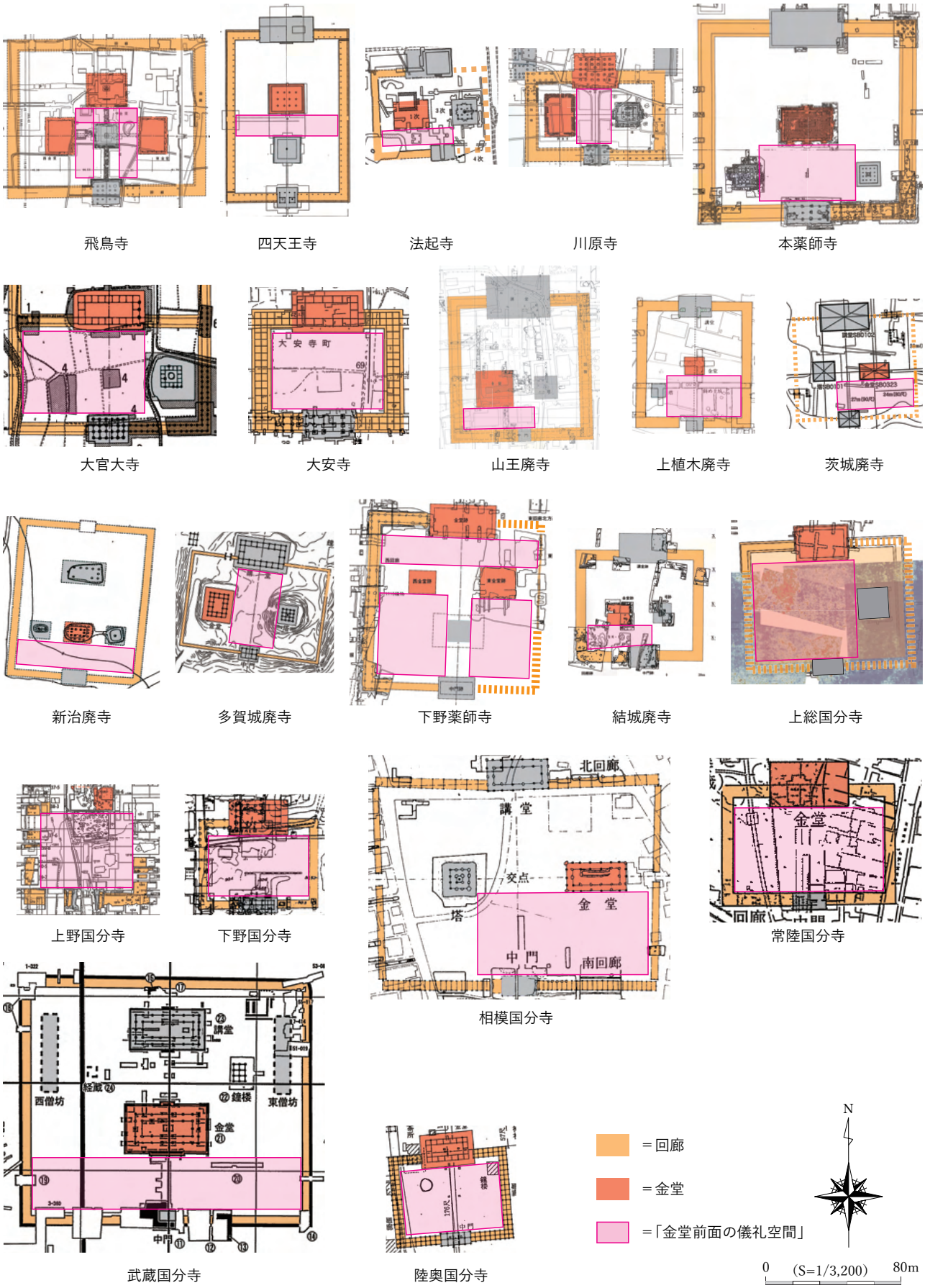
13．武蔵国分寺



14．陸奥国分寺



第７図　本論で扱う関東・東北寺院の伽藍配置②



第８図　対象寺院の「金堂前面の儀礼空間」の設定

れ、全国に国分寺が造営された。国分寺は、他の地方寺院に比べて調査が進んでおり、様相が分かっている事例が多いことから、本論でも以下の７つの国分寺を分析の対象とする。

上総国分寺：回廊内のうち伽藍中軸線より東側に、塔を配置する大官大寺式伽藍配置（市原市教育委員会 2009、城倉ほか 2021）。国分寺Ⅰa式（第７図－８）。

上野国分寺：回廊外西に、塔を配置する伽藍配置（群馬県教育委員会 2018）。国分寺Ⅱa式（第７図－９）。

相模国分寺：回廊内に、塔と金堂を並置する法隆寺式伽藍配置（海老名市編 1998）。国分寺Ⅲa式（第７図－10）。

下野国分寺：回廊外東に、塔を配置する伽藍配置（下野市教育委員会 2008）。国分寺Ⅱa式（第７図－11）。

常陸国分寺：回廊外東に、塔を配置する伽藍配置（黒沢 1998）。国分寺Ⅱa式（第７図－12）。

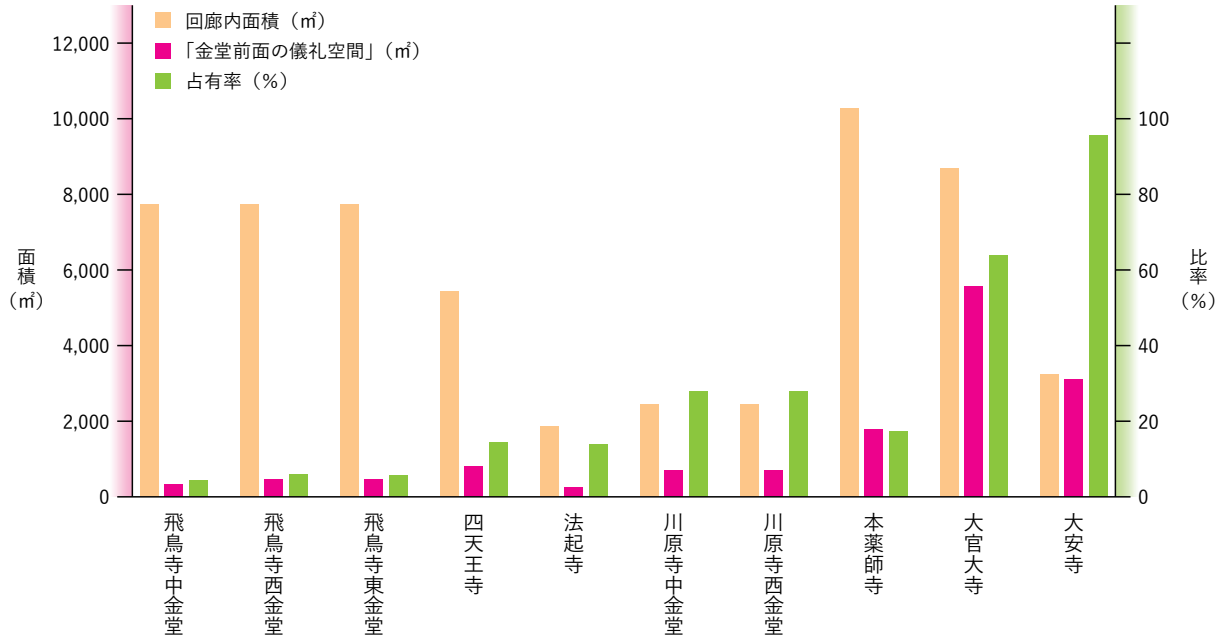
武蔵国分寺：回廊外東に、塔を配置する伽藍配置（国分寺市教育委員会 2016）。国分寺Ⅱc式（第７図－13）。

陸奥国分寺：回廊外東に、塔を配置する伽藍配置（陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961）。国分寺Ⅱa式（第７図－14）。

２－３．分析

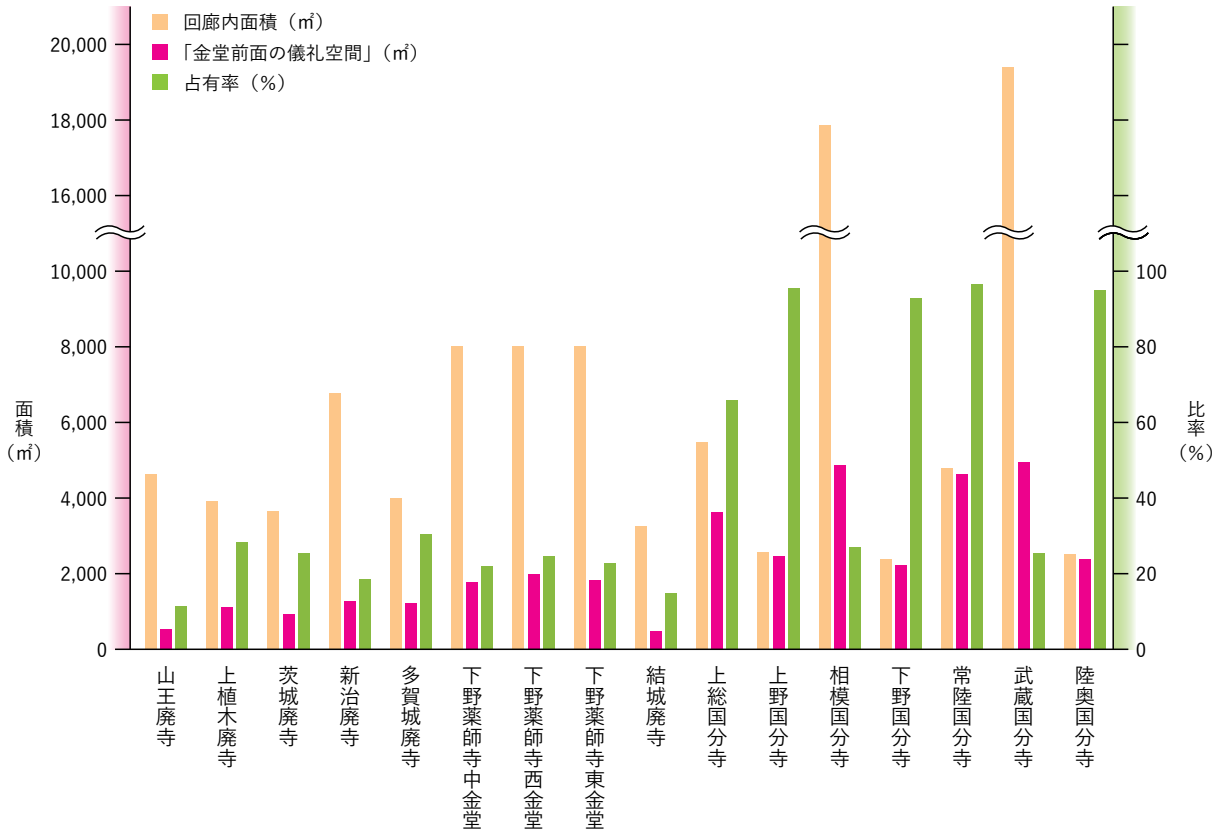
まず、「１－３．」で設定した定義に従って、対象寺院の「金堂前面の儀礼空間」をそれぞれ設定した（第８

国名	遺跡名	伽藍形式	A：回廊内面積（㎡）	B：「金堂前面の儀礼空間」（㎡）		C：占有率（%）	年代
大和国	飛鳥寺	飛鳥寺式	7,796	中金堂	336	4.3	6 世紀第Ⅳ四半期
				西金堂	459	5.9	
				東金堂	454	5.8	
摂津国	四天王寺	四天王寺式	5,476	801		14.6	7 世紀第Ⅰ四半期
大和国	法起寺	法起寺式	1,870	261		14.0	7 世紀第Ⅱ四半期
大和国	川原寺	川原寺式	2,461	中金堂	694	28.2	7 世紀第Ⅲ四半期
				西金堂	694	28.2	
大和国	本薬師寺	薬師寺式	10,343	1,801		17.4	7 世紀第Ⅳ四半期
大和国	大官大寺	大官大寺式	8,742	5,610		64.2	7 世紀末
大和国	大安寺	大安寺式	3,254	3,131		96.2	8 世紀第Ⅰ四半期



第９図　中央寺院の各算出面積・占有率一覧（上）とグラフ（下）

国名	遺跡名	伽藍形式	A：回廊内面積（㎡）	B：「金堂前面の儀礼空間」（㎡）		C：占有率（%）	年代
上野国	山王廃寺	法起寺式	4,626	532		11.5	7世紀第Ⅲ四半期
上野国	上植木廃寺	特殊	3,922	1,113		28.4	7世紀後半
常陸国	茨城廃寺	法起寺式	3,650	928		25.4	7世紀後半
常陸国	新治廃寺	特殊	6,782	1,266		18.7	8世紀初頭
陸奥国	多賀城廃寺	観世音寺式	4,000	1,223		30.6	8世紀第Ⅰ四半期
下野国	下野薬師寺	特殊	8,036	中金堂	1,773	22.1	8世紀前半
				西金堂	1,989	24.8	
				東金堂	1,828	22.7	
下総国	結城廃寺	法起寺式	3,267	488		14.9	8世紀第Ⅱ四半期
上総国	上総国分寺	国分寺Ⅰa式	5,485	3,626		66.1	8世紀中葉
上野国	上野国分寺	国分寺Ⅱa式	2,560	2,454		95.9	8世紀中葉
相模国	相模国分寺	国分寺Ⅲa式	17,880	4,868		27.2	8世紀中葉
下野国	下野国分寺	国分寺Ⅱa式	2,392	2,227		93.1	8世紀中葉
常陸国	常陸国分寺	国分寺Ⅱa式	4,790	4,640		96.9	8世紀中葉
武蔵国	武蔵国分寺	国分寺Ⅱc式	19,420	4,944		25.5	8世紀中葉
陸奥国	陸奥国分寺	国分寺Ⅱa式	2,517	2,394		95.1	8世紀中葉



第10図　関東・東北寺院の各算出面積・占有率一覧（上）とグラフ（下）

図）。また、「２－１．」で提示した方法で、A（回廊内の面積）、B（「金堂前面の儀礼空間」）、C（Aに対してのBの占有率）を算出した。算出した面積や占有率は推定創建年代順に並べ、一覧表、棒グラフで示した。なお、金堂が複数ある寺院については、金堂１基ごとに算出した。また、法起寺や茨城廃寺、下野薬師寺など回廊の一部が不明な寺院は、報告書などを参考に筆者が復元して分析を行った。

（１）中央寺院（第９図）

回廊内面積は、本薬師寺や大官大寺など、都城内で整備された寺院で8,000㎡を超えており、広い傾向にある。しかし、初期の飛鳥寺や四天王寺なども5,000㎡以上あり、反対に平城京内の大安寺は3,254㎡と狭く、一定の法則は見いだせない。一方「金堂前面の儀礼空間」は、川原寺以前の寺院では1,000㎡以下なのに対し、本薬師寺、大官大寺、大安寺といった都城内の寺院は1,000㎡を超える。また占有率は、飛鳥寺が5%前後で、四天王寺、法起寺が14%前後なのに対し、川原寺以降に創建された寺院は全て15%を超えている。

（２）関東・東北寺院（第10図）

回廊内面積は、下野薬師寺や上総、相模、武蔵の各国分寺などの地方官寺で5,000㎡を超える。しかし、他の国分寺は5,000㎡以下でやや狭く、私寺（氏寺）である新治廃寺は6,782㎡と広い。

「金堂前面の儀礼空間」は、国分寺以前の寺院は2,000㎡以下なのに対し、国分寺は全て2,000㎡を超える。また、官寺である下野薬師寺の３基の金堂でも2,000㎡に近い値を示している。占有率は、上野、下野、常陸、陸奥の各国分寺で90%を超え、上総国分寺も66.1%と高い値を示す。そのほか、多賀城廃寺も30%を超える。一方、武蔵国分寺や相模国分寺は回廊内面積が広い為、占有率が低い値を示しており、その他の私寺（氏寺）も30%以下である。

３．関東・東北の伽藍配置の変遷と展開

３－１．中央寺院の「金堂前面の儀礼空間」と伽藍形式

ここまで、回廊内面積と「金堂前面の儀礼空間」の面積を算出し、分析を行った。ここでは、中央寺院の「金堂前面の儀礼空間」の分析から伽藍形式の変遷について考察する。

中央寺院の回廊内面積は広狭さまざまである一方で、「金堂前面の儀礼空間」や占有率は年代が下るにつれて徐々に大きくなっており、特に川原寺以降その傾向が強くなる。川原寺式伽藍配置は、それまでの法起寺・法隆寺式伽藍配置と異なり、回廊内の西金堂を南北棟で配置する。これにより、従来は金堂に対して南だった金堂前面が、金堂に対して東に位置することになり、その結果金堂前面が拡張する。また、それまで金堂は、基本的には回廊の内側に位置していたが、川原寺式の中金堂には回廊がとりつき、その後の伽藍形式で主流になる。川原寺式伽藍配置の成立直後には、中金堂が省略された観世音寺式伽藍配置が大津宮周辺で成立する。観世音寺式は、川原寺式と同じく南北棟の金堂であるため、「金堂前面の儀礼空間」が拡張された伽藍配置といえる。

藤原京内に造営された本薬師寺は、回廊内面積が10,343㎡で、分析した中央寺院の中で最も大きい。しかし、「金堂前面の儀礼空間」は1,801㎡で、占有率は17.4%と低い。薬師寺式伽藍配置は、回廊内に塔が２基配置される双塔伽藍である。金堂よりも南に２基の塔が置かれるため、「金堂前面の儀礼空間」は必然的に狭くなる。薬師寺式は新羅感恩寺などに酷似した伽藍が見られることから、日本で成立したのではなく新羅で成立した伽藍形式を採用したと考えられており、「金堂前面の儀礼空間」の意識は低いと考えられる。

本薬師寺同様、藤原京内に造営された大官大寺は、「金堂前面の儀礼空間」がそれよりも遥かに拡張しており、その占有率も64.2%と従来の伽藍形式に比べてはるかに大きい。大官大寺式伽藍配置は、川原寺式中金堂と同じように回廊が金堂にとりつく。また塔が伽藍中軸線よりも東に大きくずれて配されており、「金堂前面の儀礼空間」がより拡張された伽藍形式となる。

平城京の大安寺は、大官大寺に比べると回廊内面積が3,254㎡、「金堂前面の儀礼空間」が3,131㎡と、共に小さい一方で、占有率は96.2%となる。大安寺式伽藍配置は、回廊が金堂にとりつき、さらに２基の塔が回廊外に配置されるため、回廊内は「金堂前面の儀礼空間」のみである。これ以降、平城京内では大安寺式伽藍配置やそれに類似した伽藍形式で寺院が造営されるようになる。

以上をまとめると、次のようになる。

①法起寺・法隆寺式伽藍配置までは「金堂前面の儀礼空間」の拡張がみられない。
②川原寺式伽藍配置を契機に「金堂前面の儀礼空間」が拡張していく。
③「金堂前面の儀礼空間」は、A．金堂に回廊がとりつくこと、B．塔が回廊の外に配置されること、の２つの方向で拡張していく。

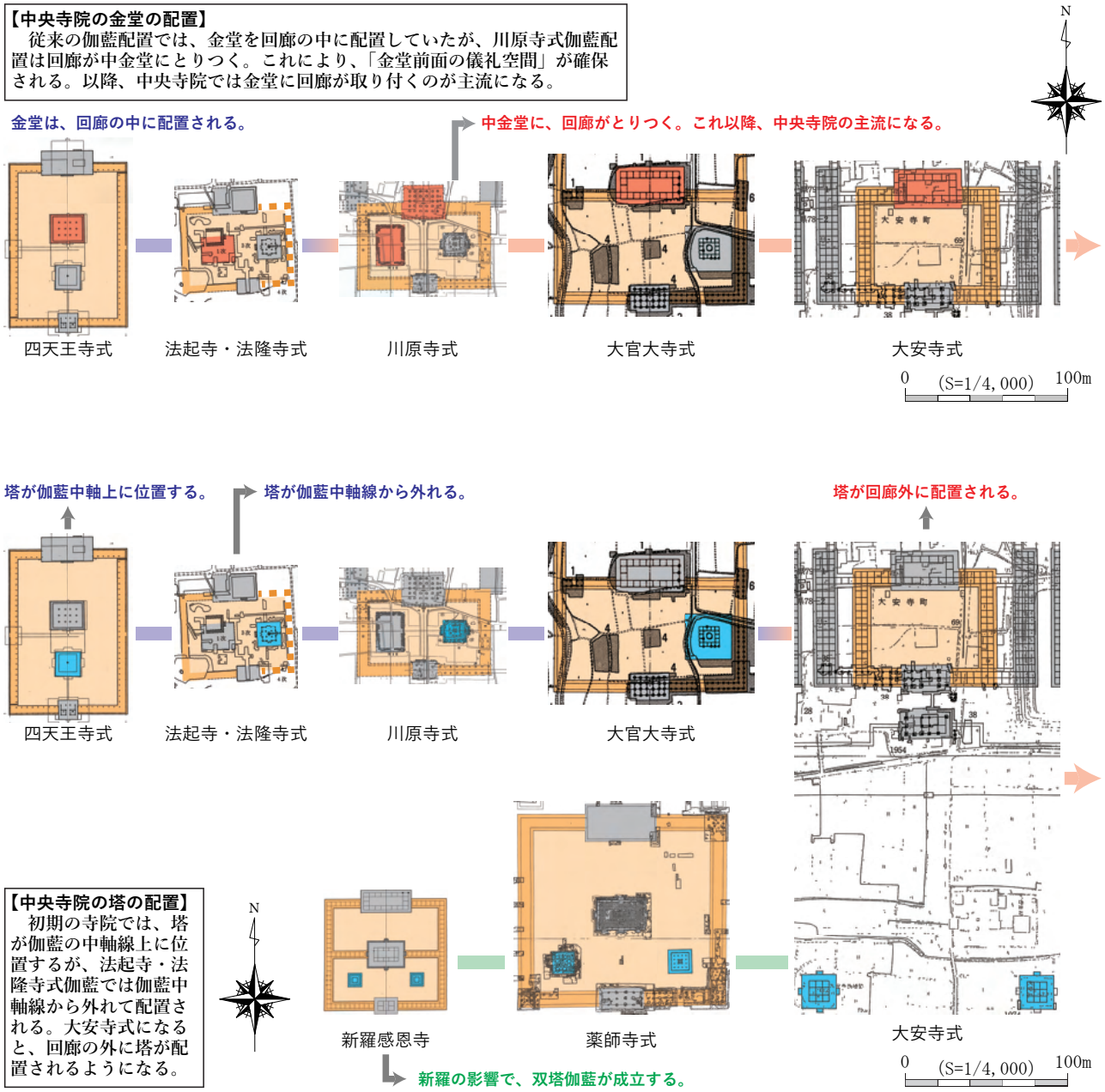
特に③の傾向は、顕著である。川原寺が造営されたと

考えられる７世紀前半から、金堂を回廊にとりつけることによって「金堂前面の儀礼空間」を発達させる（第11図上）。７世紀後半に新羅から双塔伽藍を輸入しつつ、８世紀には、回廊外に塔を配置することで更に「金堂前面の儀礼空間」が発達する（第11図下）。これ以降、金堂が回廊ととりつき、塔が回廊の外に２基配置される伽藍配置が、官大寺の主流となっていく。

３－２．関東・東北の「金堂前面の儀礼空間」

中央では、川原寺式を契機に「金堂前面の儀礼空間」を拡張する方向で伽藍形式が変遷する一方で、関東・東北ではどうだろうか。回廊内面積を見てみると、中央寺院と同様に大きさは様々で法則は見られない。しかし「金堂前面の儀礼空間」は、関東初期寺院や地方私寺（氏寺）では狭く、反対に下野薬師寺や各国分寺などの地方官寺では広い傾向にある。これを踏まえ、関東・東北の伽藍配置を伽藍形式ごとに検討していく。

関東初期寺院である山王廃寺は、法起寺式伽藍配置である。法起寺・法隆寺式は前節で述べたように、「金堂前面の儀礼空間」を拡張する前段階の伽藍配置であり、山王廃寺も同様「金堂前面の儀礼空間」532㎡、占有率11.5%と低い値を示している。山王廃寺以降も、７世紀



第 11 図　中央寺院の金堂（上）・塔（下）の配置と変遷

後半に造営された茨城廃寺が法隆寺式、８世紀第Ⅱ四半期に造営された結城廃寺が法起寺式伽藍配置である。茨城廃寺は「金堂前面の儀礼空間」928㎡、占有率25.4%で、結城廃寺は「金堂前面の儀礼空間」488㎡、占有率14.9%と、いずれも低い値を示す。この他にも伽藍の様相が明らかになっておらず、本稿では扱っていないものの、法起寺・法隆寺式伽藍配置と想定される寺院は多数あり、関東・東北では長期に渡って採用される伽藍配置である。

陸奥国の多賀城廃寺は、川原寺式の系譜と考えられている観世音寺式伽藍配置で、「金堂前面の儀礼空間」の占有率は30.6%と、川原寺に近い値を示している。全国的に類例の少ない伽藍配置で、東日本では東北で数例みられるのみである。川原寺式同様に、金堂を南北棟で配置しているため、法起寺・法隆寺式伽藍配置よりもやや「金堂前面の儀礼空間」が広い。

東国では、上植木廃寺や新治廃寺、下野薬師寺など特殊な伽藍配置をもつ寺院も多くみられる。上植木廃寺は、「金堂前面の儀礼空間」の占有率が28.4%でやや低めだが、川原寺や多賀城廃寺と近似値である。伽藍配置は、大官大寺式とは対照的に塔を伽藍中軸線より西に配置する。一見「金堂前面の儀礼空間」を意識した伽藍配置にも見えるが、回廊は金堂にとりつかないことから、「金堂前面の儀礼空間」確保の意識は低いと考えられる。新治廃寺は、金堂の東西に塔を１基ずつ配置する双塔伽藍であるが、「金堂前面の儀礼空間」の占有率が18.7%で、低い値を示す。下野薬師寺は、特殊な１塔３金堂式の伽藍配置で、回廊内の中心に塔を配置し、その北に金堂を３基置く。そのうち中金堂は回廊にとりつくが、東金堂と西金堂が前面にある為、「金堂前面の儀礼空間」は狭くなり、占有率は22.1%と低い。また、東金堂、西金堂も前面に塔が配置されていることにより「金堂前面の儀礼空間」が狭くなっており、占有率もそれぞれ22.7%と24.8%と低めの値である。下野薬師寺は、造営途中で官寺に昇格した特異な寺院であり、その結果特殊な伽藍配置になったと考えられるが、金堂３基全てが回廊内北側に偏っていることは、注目すべき点である。

741年に聖武天皇によって国分寺造営の詔が発布され、関東・東北にも国分寺が置かれた。伽藍形式は多様であるが、「金堂前面の儀礼空間」は全て2,000㎡を超えており、私寺（氏寺）では見られない規模である。本稿で扱う国分寺のうち最も多い形式は、回廊が金堂にとりつき、塔が回廊外に配置される国分寺Ⅱa式で、上野、下野、常陸、陸奥の４つの国分寺である。回廊内面積や「金堂前面の儀礼空間」は他の国分寺と比べるとやや小さめだが、回廊内に建物が無いため、占有率はいずれも90%を超えている。上総国分寺は、回廊が金堂にとりつき、塔が伽藍主軸線よりも東に偏って配置される大官大寺式で、国分寺Ⅰa式に分類される。回廊内面積は5,485㎡でやや広く、占有率も66.1%と大官大寺の占有率と近似値である。相模国分寺は、回廊内面積が17,880㎡とかなり広い。伽藍は法隆寺式伽藍配置で、国分寺Ⅲa式に分類される。占有率は27.2%と低めだが、回廊内面積が広いため「金堂前面の儀礼空間」も4,868㎡とかなり広い。武蔵国分寺は、回廊が金堂にとりつかず、塔を回廊外に配置する国分寺Ⅱc式である。回廊内面積が19,420㎡で、本稿で扱う寺院の中で最も大きい。占有率は25.5%と低めだが、相模国分寺同様、回廊内面積が広いため「金堂前面の儀礼空間」も4,944㎡とかなり広い。

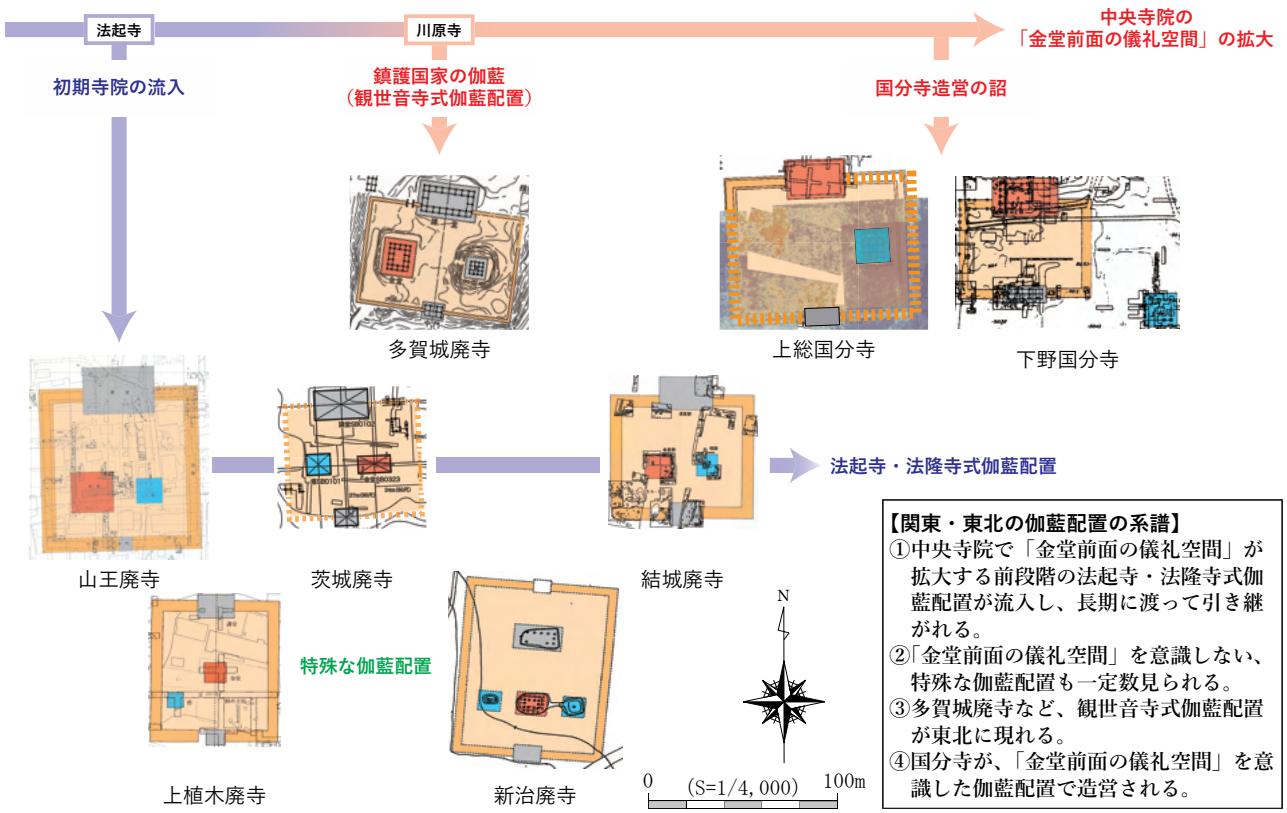
国分寺の伽藍配置は、国分寺Ⅱa式や国分寺Ⅰa式など、伽藍配置によって「金堂前面の儀礼空間」を確保するもののほかに、武蔵国分寺や相模国分寺など、伽藍の規模が大きい結果「金堂前面の儀礼空間」が生まれている伽藍配置も存在する。いずれにせよ、国分寺期になると地方寺院でも、「金堂前面の儀礼空間」が確保されるといえる。

以上のように、関東・東北の地方寺院では法起寺・法隆寺式など、「金堂前面の儀礼空間」が確保されない段階の伽藍配置を長期に渡って採用するほか、「金堂前面の儀礼空間」の意識が低い特殊な伽藍配置も多く見られる。その一方で、多賀城廃寺などでは「金堂前面の儀礼空間」の発達が垣間見えるほか、各国分寺では様々な方法で「金堂前面の儀礼空間」が確保されている。

３－３．関東・東北古代寺院の伽藍配置の展開

中央寺院では、７世紀前半の川原寺式伽藍配置の成立から、「金堂前面の儀礼空間」を確保する方向で伽藍配置が変遷していく。平城遷都後の８世紀第Ⅰ四半期頃には回廊内に建物がなくなり、最大限「金堂前面の儀礼空間」が確保された大安寺式伽藍配置が成立する。その一方で、７世紀第Ⅲ四半期ごろから造寺活動が活発化する関東・東北では、法起寺・法隆寺式伽藍配置や「金堂前面の儀礼空間」を意識しない特殊な伽藍配置を採用することが多く、その傾向は国分寺造営が開始される８世紀中葉まで続く。

このように、中央寺院と異なり、関東・東北の私寺（氏寺）では「金堂前面の儀礼空間」が拡張する方向での伽藍配置の変遷は見られない。716（霊亀２）年に所謂「寺院併合令」が発布されるが、地方の造寺活動は依然として活発であったと考えられている（三舟1987、須田1997）。また、地方寺院では他に類例がないような特



第 12 図　「金堂前面の儀礼空間」からみた関東・東北寺院の展開

殊な伽藍配置が一定数見られることなどを考慮すると、地方寺院の伽藍配置に規制がかかっていたとは考え難い。つまり、関東・東北で「金堂前面の儀礼空間」を確保しない伽藍配置を採用し続けるのは、当該地域（地方寺院）の特質といえる。

他方、多賀城廃寺では、「金堂前面の儀礼空間」の発達が見られる。観世音寺式伽藍配置は鎮護国家の政策による寺院に多く見られる伽藍配置とされ、その立地から中央主導の元に設置された寺院と考えられており、多賀城廃寺もその性格が認められる（貞清・高倉2010）。また、８世紀中葉になると国分寺が「金堂前面の儀礼空間」が拡大した伽藍配置で造営される。こうした地方官寺は、在地性が低くむしろ中央の影響を強く受けた伽藍配置といえる。

以上、古代関東・東北の寺院伽藍の展開を概観した。これを踏まえると、中央から関東・東北への伽藍配置の波及は次のように整理できる（第12図）。

①７世紀第Ⅲ四半期頃に、中央から影響を受けて造寺活動が始まり、関東・東北では長期に渡って在地性の強い伽藍配置を８世紀まで採用し続ける。

②７世紀末から８世紀初頭にかけて、多賀城廃寺など中央の色彩が強い少数の寺院では中央の影響を受けた伽藍配置を採用するようになる。

③741年以降に各国に造営された国分寺は、「金堂前面の儀礼空間」を意識した中央の色彩の強い伽藍配置をとる。

先にも述べたように、多賀城廃寺は川原寺式の系譜である観世音寺式伽藍配置であり、「鎮護国家」の政策の基に造営された。つまり、「金堂前面の儀礼空間」の確保は国家仏教と密接な関係にあるといえる。また、多賀城廃寺などの中央的な寺院を除くと関東・東北では国分寺成立まで「金堂前面の儀礼空間」の拡張が見られないことや、国分寺成立以降新しく造営される寺院がほとんど見られないことなどを勘案すると、国分寺成立を契機に国家仏教が関東・東北に根付き、これ以降、寺院が中央に統制されていく実態が伽藍配置に表出しているといえる。

おわりに

本稿では、従来の伽藍配置研究では把握しえなかった古代寺院の中央から地方への波及について、関東・東北の古代寺院を事例に「金堂前面の儀礼空間」という視点から考察した。特に、調査図面を用いた定量的な分析を

通して、飛鳥・奈良時代日本の寺院の展開についてその一端を示せたと考える。

なお、本稿では「金堂前面の儀礼空間」の機能や実態については言及できなかった。また、2012年に中国で北斉代の核桃園廃寺跡が発見された際には、「金堂跡と中門跡の間は広く、明らかに広場となっており、仏教儀式の場であった」と指摘されている（佐川 2020）。「金堂前面の儀礼空間」の確保を、日本の国家仏教特有の現象として解釈するばかりでなく、東アジアの仏教寺院との比較の中で位置付けていく必要がある。これらを、今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、指導教員の城倉正祥先生からご指導・ご助言を頂いた。また、談話会の皆様にも度々ご指導・ご助言を頂いた。末筆ながら、感謝申し上げたい。

引用文献

網　伸也 2014「国分寺の伽藍配置」『季刊考古学』129　雄山閣
網　伸也 2018「四天王寺の発掘調査」『地より湧出した難波の大伽藍―四天王寺の考古学―』四天王寺勧学部
石岡市教育委員会 2018『茨城廃寺跡　第１次～第６次調査総括報告書』
石田茂作 1956「伽藍配置の変遷」『日本考古学講座』第６巻　河出書房
伊勢崎市教育委員会 2009『新屋敷遺跡　上植木廃寺周辺遺跡Ⅱ　上植木廃寺　―埋蔵文化財発掘調査概報―』
市原市教育委員会 2009『上総国分僧寺跡Ⅰ』市原市教育委員会
上原真人 1986「8. 仏教」『岩波講座　日本考古学４』岩波書店
上原真人 2015「双塔伽藍の伝来と展開」『瓦・木器・寺院』すいれん舎
海老名市編 1998『海老名市史１（資料編 原始・古代）』
大津市教育委員会 2018『穴太遺跡発掘調査報告書　穴太廃寺の寺域範囲確認調査２』
甲斐弓子 2006「本薬師寺と新羅感恩寺」『日本宗教文化史研究』19　日本宗教文化史学会
梶原義実 2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館
金載元・尹武炳 1961『感恩寺址發掘調査報告書』乙酉文化社
九州歴史資料館 2007『観世音寺 伽藍編』
黒沢彰哉 1998「常陸国分寺」関東古瓦研究会編『聖武天皇と国分寺』雄山閣
群馬県教育委員会 2018『史跡上野国分寺跡　第２期発掘調査報告書　―総括編―』
国士舘大学文学部考古学研究室 2004『史跡下野薬師寺跡１』栃木県南河内町教育委員会
国分寺市教育委員会 2016『国指定史跡武蔵国分僧寺跡発掘調査報告書１（遺構編）』
佐川正敏 2020「東アジアにおける古代仏教寺院研究の考古学的新展開」『アジア流域文化研究』XI　東北学院大学アジア流域文化研究所
貞清世里・高倉洋彰 2010「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学』30日本考古学協会
貞清世里 2013「南海道の法起寺式伽藍配置をとる古代寺院の検討」『西南学院大学博物館研究紀要』１　西南学院大学博物館
貞清世里 2020「法起寺式伽藍配置をとる古代寺院の集成」『西南学院大学博物館研究紀要』８　西南学院大学博物館
滋賀県教育委員会 1978『滋賀県文化財調査年報　昭和51年度』
清水昭博 2006「朝鮮半島における伽藍配置」『考古学ジャーナル』545　ニューサイエンス
下野市教育委員会 2008『国指定史跡　下野国分寺』
城倉正祥ほか 2021『上総国分僧寺の測量・GPR（第１次）調査』
鈴木靖民 2010『古代東アジアの仏教と王権 王興寺から飛鳥寺へ』勉誠出版
須田　勉 1997「寺院併合令と東国の諸寺」『国士館大学文学部人文学会紀要』30　国士館大学文学部人文学会
須田　勉 2012『シリーズ遺跡を学ぶ　古代東国仏教の中心寺院　下野薬師寺』新泉社
須田　勉・佐藤　信編 2011『国分寺の創建　思想・制度編』吉川弘文館
大安寺史編集委員会 1984『大安寺史・史料』名著出版
高井悌三郎 1988『常陸国新治郡上代遺跡の研究』高井悌三郎先生喜寿記念事業会
筑西市教育員会 2020『史跡新治廃寺跡附上野原瓦窯跡 保存活用計画』
角田文衛 1938「國分寺の研究」考古學研究會
角田文衛 1996『新修国分寺の研究　総括』吉川弘文館
角田文衛 1997『新修国分寺の研究　補遺』吉川弘文館
鶴見泰寿 2021『東大寺の考古学　よみがえる天平の大伽藍』吉川弘文館
東大寺 2020『東大寺東塔院跡　境内史跡整備事業に係る発掘調査概報２』

奈良県立橿原考古学研究所 1996「法起寺旧境内　第11次・12次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1995年度』
奈良国立文化財研究所 1958『飛鳥寺発掘調査報告』真陽社
奈良国立文化財研究所 1960『弘福寺　川原寺発掘調査報告』
奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告　図版編』
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1983「大官大寺第９次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』
奈良市教育委員会 1997『史跡大安寺旧境内Ⅰ』
奈良市埋蔵文化財調査センター 2013『西大寺旧境内発掘調査報告書１』
奈良文化財研究所 2015「本薬師寺旧境内の調査　第181-1次」『奈良文化財研究所紀要　2015』
花谷　浩 1997「本薬師寺の発掘調査」『仏教芸術』235　毎日新聞社
林　博通 2001『大津京跡の研究』思文閣出版
韓　ナレ・賈　鍾壽 2014「扶余王興寺址の伽藍配置の類型及び造営年代一最近の発掘調査成果を中心に一」『環太平洋文化』29　日本環太平洋学会
菱田哲郎 2005「古代日本における仏教の普及ー仏法僧の交易をめぐってー」『考古学研究』第52巻第３号　考古学研究会
枚方市文化財研究調査会 2015『特別史跡百済寺跡』
文化財研究所奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』
文化財研究所奈良文化財研究所 2003『吉備池廃寺発掘調査報告　－百済大寺の調査－』
文化財保護委員会 1967『四天王寺』吉川弘文館
法隆寺発掘調査概報編集小委員会 1983『法隆寺発掘調査概報Ⅱ』
前橋市教育委員会 2012『山王廃寺　平成22年度発掘調査報告書』
三舟隆之 1987「霊亀２年の寺院併合令について」『明治大学大学院紀要　文学編』24　明治大学
三舟隆之 2017「古代地方寺院の造営計画・技術の伝播」『考古学ジャーナル』705　ニューサイエンス社
宮城県教育委員会・多賀城町 1970『多賀城廃寺跡Ⅰ』吉川弘文館
向井佑介 2019「中国における双塔伽藍の成立と展開」菱田哲郎・吉川真司『古代寺院史の研究』思文閣出版
陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』
森　郁夫 1991「わが国古代寺院の伽藍配置」『京都国立博物館学叢』13　京都国立博物館
森　郁夫 1998『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局
山路直充 1994「創建期造営への着手」『下総国分寺　平成元～５年度発掘調査報告書』市立市川考古博物館
山路直充 2011「寺の空間構想と国分寺ー寺院地・伽藍地・附属地ー」須田　勉・佐藤　信編『国分寺の創建思想・制度編』吉川弘文館
結城市教育委員会 1999『結城廃寺』

図表出典一覧

第１図・第９図・第11図　筆者作成。
第２図・第５図　Arc-GISを用いて、筆者作成。
第３図　奈良国立文化財研究所 1958　PLAN2／文化財保護委員会 1967 図版第36 を用いて、筆者作成。
第４図　奈良県立橿原考古学研究所 1996　p11図８／奈良国立文化財研究所 1960　PLAN2／奈良文化財研究所 2015　p114図５／奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1983　p57第32図／奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部 1983 付図　を用いて、筆者作成。
第６図　前橋市教育委員会 2012　p12Fig.7／伊勢崎市教育委員会 2009　付図／石岡市教育委員会 2018　p108第105図／高井悌三郎 1988　図版第４／宮城県教育委員会・多賀城町編 1970 図面２　を用いて、筆者作成。
第７図　国士舘大学文学部考古学研究室 2004　付図６／結城市教育委員会 1999　p27第19図／城倉ほか 2021　p17図11／群馬県教育委員会 2018　p55第27図／海老名市編 1998　p617第376図／下野市教育委員会 2008　p38第33図／黒沢 1998　p100図３／国分寺市教育委員会 2016　p3第２図／陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961　実測図第１　を用いて、筆者作成。
第８図・第11図・第12図　既出引用図面（第３図・第４図・第６図・第７図）を用いて、筆者作成。

文研考古談話会2021年度活動報告

2021年
４月２日　2021年度運営委員会議

５月12日　文研考古談話会　第191回例会
（第１回新人発表会）
進藤瑞生
「古代エジプト第18王朝のカノポス壺に関する一考察
―テーベ地域における変遷と製作体系―」
横溝　優
「藤岡産埴輪の再検討」

５月19日　文研考古談話会　第192回例会
（第２回新人発表会）
岸田　彩
「吉備地域における古墳時代中期円筒埴輪の再検討」
山本　華
「土器圧痕からみる縄文時代の植物」

11月５日　文研考古談話会　第193回例会
（溯航諮問会）
進藤瑞生
「古代エジプト新王国時代におけるミイラ製作関連遺物群の検討―テーベ西岸の所謂「エンバーミングカシェ」に関する検討―」
高橋　亘
「飛鳥・奈良時代東国の伽藍配置に関する一考察―『金堂前面の儀礼空間』の分析から―」
李　承叡「SfMソフトウェア比較から考えるSfM技術の研究への効用性」

※新型コロナウイルス感染対策の為、2020年度に引き続き2021年度は全てオンラインで実施した。

2021年度新人発表会要旨

古代エジプト第18王朝のカノポス壺に関する一考察
―テーベ地域における変遷と製作体系―

進藤瑞生

発表者は、カノポス壺の多様な要素で分類や変遷案を提示し先行研究を検証すること、および製作体系を復元することを目的として、卒業論文で対象とした中でも特に第18王朝テーベ地域において改めて分析を行った。そして変遷と製作についての当該時期における卒業論文の成果に加えて、同じ被葬者の銘文作成において時には複数人の神官による下書きがなされた可能性など、卒業論文では指摘しなかった新たな見解も提示した。

藤岡産埴輪の再検討

横溝　優

古墳時代後期以降、関東地方において窖窯焼成技法の導入に伴う生産拠点の固定化により埴輪に地域性があらわれ、製作技法などから系統として把握されている。群馬県南西部で生産された埴輪の系統も「藤岡産埴輪」として把握されているが、その把握は胎土の特徴のみによるものである。他の系統と同様に製作技法などからの「藤岡産埴輪」の把握を目的に「藤岡産埴輪」の製作技法による属性からの分類を行った。

吉備地域における古墳時代中期円筒埴輪の再検討

岸田　彩

古墳時代中期の吉備は、南北に大河川が流れ、瀬戸内海に面した海上交通の要であった。周辺地域との交流状況からその様相を解明するため、本稿では量産品であり、かつ大きさや形状から運搬可能であったと考えられる円筒埴輪を媒体とした検討を行った。形態的特徴による分類の結果、吉備の円筒埴輪は４段階にわたって変遷していくが、その様相は畿内と類似しており、古墳時代中期の時点で強い影響下にあったことが推定される。

土器圧痕からみる縄文時代の植物

山本　華

土器圧痕や炭化種子の大型化傾向から、縄文時代のマメ類については日本列島で栽培化された可能性が指摘されている。同様にシソ属についても利用や栽培などの人間活動を解明するため、栽培化の起源を検討する必要がある。シソ属多量圧痕土器の試料で大きさを検討したところ、マメ類のような大型化傾向は確認されなかったが、今後は遺跡出土種実遺体も含め試料数を増やし、より広範な空間と時間軸の中で大きさの変異や変化を捉える。

編集後記

ラーメンズ（お笑いコンビ）のコントで、私の好きな作品があります。『不透明な会話』という作品で、「常識」や「ルール」をテーマに、透明人間の存否を２人の男が言い争う内容です。このコントの序盤に「赤だから止まるんじゃない。赤だと、危ないから止まるんだ。」という印象的なセリフがあります。

この１年、研究室では「責任」「ルール」という単語を頻繁に聞いたように思います。新型コロナウイルスの蔓延と調査・研究の兼ね合いという問題が常に付き纏い、私たちは右往左往しました。特に、野外調査や資料調査の計画が持ち上がる度に、「もし〜が起こったら誰が責任を取るんだ」といった議論が頻発しました。

大学は、学問の自由（早稲田的に言えば学の独立）の観点から、その構成員による自治が認められています。教員だけでなく学生も大学の構成員であり、この構造は当考古学研究室においても同様です。つまり、学生個々人が学問の「自由」とそれに伴う「責任」を有しており、教員・助手がこれを管理するものではありません。

その一方、調査には危険が伴います。学生個人の「責任」が及ばない範囲が存在するのもまた事実であり、これに対して、助言を行うのが教員・助手の役割だと思います（決して許可・拒否・指示ではありません）。この時、学生個人が持つ「自由」・「責任」と、教員・助手が介入する範囲、の線引きは非常に難しく、ケースバイケースです。ですので、その都度頭を使って考えなければならず、決して「ルール」を設けることによって解決するものではありません。

『溯航』は、査読のない雑誌です。その分、自由度が高く、毎年興味深い論考が揃います。「諮問会」にて意見をぶつけ合い、お互い助言をする過程はあるものの、最終的には投稿者個人の「自由」と「責任」で投稿されます。今年度から、より個人の「責任」を強く意識するため、従来の早稲田リポジトリだけではなく、全国遺跡総覧でのデジタル公開も始めました。より多くの研究者に読まれることになり、ある意味では査読よりも厳しい環境にあります。その中で、投稿者は学問の「自由」と「責任」をより深く考えて欲しいと思います。

冒頭で紹介したコントは、『条例』という別の作品と２部構成になっています。この作品では、理不尽な条例に盲目的に従う２人の男達の姿を滑稽に描いています。この２人の様にならないよう、自らの頭で考え、ルールや既成概念に縛られない自由な発表の場として今後も『溯航』が発展していくことを祈念して、編集後記としたいと思います。

なお、今年度で『溯航』の創刊者である近藤二郎先生が早稲田大学をご退官されます。『文研考古連絡誌』に始まった『溯航』は今号で 40 号を迎えました。「大学院生が自由に研究発表ができる場」として、当雑誌の創刊・維持にご尽力され、早稲田大学に着任されてからは、教員として温かく見守って頂きました。本当に、ありがとうございました。（文責：高橋　亘）

（溯航編集委員長：高橋　亘／溯航編集委員：李　承叡、伊藤結華、宮崎澪菜、岸田　彩）

『溯航』　第40号　2022年２月

発　　行　　2022年２月25日

編集・発行　　早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

〒162-0052　東京都新宿区戸山1-24-1　早稲田大学文学部考古学研究室

Tel. 03-5286-3646 / (内線)72-3111

印 刷 所　　冊子印刷社（有限会社　アイシー製本印刷）

〒263-0004　千葉県千葉市稲毛区六方町114-3

Tel. 0120-41-3425